

# 対話による相互探究 IN 南米

Edited by  
Hosokawa Hideo  
Matsuda Makiko

CLD - ONLINE  
2020.7

AMÉRICANA DEL SUR  
AMÉRICANA DEL SUR

## 目次

Well-being(善く生きる)という最終的な目的へ	2
—対話のテーブルのまえがきにかえて	2
細川 英雄	2
「私はなぜ他者のために生きていきたいのか」を探究する	4
猫への想い	5
—人間社会で生きるということ—	5
中島 永倫子	5
私は人のお世話するのが好き	15
—その うらに おもわずに意外な理由があった—	15
プリエト・リタ	15
「誰のものでもない私」を探究する	20
日本語教師としての私	21
—仕事以外でホッとする時間があるから頑張れる—	21
末永サンドラ	21
一人旅	31
本多 由美	31
「異国で生き抜くこと」を探究する	36
気分転換	37
—ペルーの日本語教師—	37
淀 暢好	37
近くに本が必要な理由	42
—心の根底にあったもの—	42
鶴田 広子	42
アイデンティティ探究	48
アイデンティティのことを考える	49
堀川 ルミ	49
学びと私 / 居心地良さの探求	55
長谷川 アレサンドラ 美雪	55
「日系社会で生きる私」の探究	72
ブラジルの歴史作りに参加する	73

—ひとりの日本語教師ができるちいさなこと—	73	
横溝 みえ	73	
私の中の日系	86	
山本カーリーナ	86	
世界とつながるための私の生き方を探究する	91	
踊りが心のよりどころ	92	
—自分を肯定できるものとして—	92	
濱田 彩乃	92	
文学と私	102	
	ブルケ・マックシモ	102
「拍」としてのことばと建築	110	
松田 真希子	110	
あとがき:対話的活動は人間化の探究活動	119	
松田真希子	119	

## Well-being(善く生きる)という最終的な目的へ

### —対話のテーブルのまえがきにかえて

細川 英雄

コロナ禍の中で、南米の方々とオンラインでやりとりをしてみないかという提案を松田真希子さんからいただいたときは、活動の具体的な枠組みをそれほど具体的に考えていたわけではありませんでした。

ただ、数年前のサンパウロでのシンポジウムの経験などから、南米の方々とやりとりするなら、あまりテクニク的なことではなく、むしろ人間的なかわりを求めるような、総合的な対話の活動が実践できるのではないと思ったのです。

そのような行きがかりから、今回、13人の方々と対話のテーブルを囲むことができたのは本当に幸せでした。

対話のテーブルは、基本的に総合活動型日本語教育の対話の枠組みで行いました。この枠組みは、動機とその理由、対話、結論の3部構成になります。

たとえば、「あなたは何が好き？」という問いから、この活動は始まり、以下のような方法と具体的な手順を踏むことになります。

・**動機と理由**(自己の興味・関心について語る。／その動機・理由を述べる。／興味・関心の情報を交換・共有する。)

・**対話**(自己の興味・関心について説明する。／情報の奥にあるものを対話によって考える—なぜ、そのことに興味・関心を持つのか／自分でも気づかなかった深いところにあるテーマを発見する。／自分のテーマをその場の他者と交換・共有する。)

・**結論**(自分のテーマについてさまざまな他者と議論した結果を確認する。／初めの興味・関心から、テーマの発見に至るまでのプロセスを振り返る。／これから、「私」は、さまざまな他者と、この社会でどのように生きていくのか。／そのために、自己・他者・社会にとって何が重要かを考える。)

以上のような手順で、オンラインで活動を行い、発表やレポート記述等を繰り返しつつ、自己の興味・関心に基づくテーマを生成しました。

活動の終わった後からは、次のような感想が生まれました。

・最初は躊躇した。自分の考えを伝える、見せることで何が生まれるのかわからなかった。最初自分で書いて浅いなあとと思った。自分の苦手なことだと思っていたが、聞いてもらえることで聞いてもらいたいと思うようになった。この機会がなかったら知ってもらいたいと思うこともなかった。ありがたい体験だった。

・ここ十数年報告書ばかり書いてきて、自分を出す文章を書いてなかったことをこの経験を通して学んだ。今の段階では十分ではないけど久しぶりに自分の文章が書けたことがうれしい。みなさんからの反応が返ってきたこともうれしかった。

こうした活動のファシリテーションでは、よく「考えを引き出す」といわれるのですが、本当はそうではなくて、実際は、「内からあふれ出る」のではないかと感じます。それぞれの参加者の思いが、一人ひとりの中から文章になってあふれ出てきたものが、上の例からも伝わってきます。

一つの正解を目的とした練習や訓練からは、公開性にもとづく自己発信の意識は生まれにくいものです。「恥ずかしい」「自分のことは語りたくない」「他の人に読まれたらどうしよう」—こうした気持ちを乗り越えて、他者に向けて発信する、他者とその社会について考えるようになる、自分一人ではない、他者とともに自分があるという感覚、これが社会をつくる意識です。このことによって、人はことばの市民になることができます。

最近、プロジェクト総合活動を試みている学校で、自分たちでテーマや問いをたて自分たちで考えるという学びの形の変更が起こっている話をよく聞きます。このような活動を経て育つと、仲間の結束力が違ってきて、ずっと年を経てもつながりつづけることができると言います。そういうふうな育った子どもは大人になってから、そういう子どもを育てることができるそうです。これは未来を切り拓くための大きなキーになる活動ではないかと思えます。

すばらしい、ひとつの方法で学習すれば、必ずその言語が使えるようになるという保障のどこにもないことは、この200年の近代史の中で明らかです。ことばを習得するための、万人にとっての魔法の杖など、どこにも存在しないのですから。

重要なことは、行為者一人ひとりが、一個の言語活動主体として、それぞれの社会をどのように構成できるのか、つまり社会における市民として「この私」がどのような言語活動のあり方を有するかという課題と向き合うことでしょう。そして、それは、ことばの活動がWell-being(善く生きる)という最終的な目的へという道筋を示していることがわかります。

# 「私はなぜ他者のために生きていきたいのか」を探究する

中島永倫子  
プリエト・リタ

# 猫への思い

-人間社会で生きるということ-

中島 永倫子

## 1. 動機と理由

私は無類の猫好きである。犬とはあまり接点がないが犬も好きだ。そして、馬も豚もカピバラも、要は哺乳類全般に何とも言えない愛情のようなものがある。そして現在「せめて私ができることを」という姿勢で、サンパウロの猫シェルターでボランティア活動をしている。この対話テーブルで、こんなごくありふれた「私の猫好き話」を奥へ、奥へと突き進むことで、私の猫への愛情の根底には「この地球は誰のものなのか？」という問いがあることに気づくことができた。

猫が好きだと自覚したのは、20年以上前に始めた神戸の実家近くの公園にいる猫たちのお世話活動を通してだ。猫のお世話を始めたきっかけは、もちろん姿かたちや仕草のかわいらしさもあるが、それ以上に彼らが阪神淡路大震災で行き場を失ったことや、当時、私がある事故をきっかけに社会的接点がなくなり自己の存在価値が見いだせなかったことなど、猫たちの境遇や私の立場によるところが大きい。またその時の自分がまったく生産性がない存在となったことから、社会の中での生きづらさを感じ、人間以外の生き物との関係が救いになっていた。そこから「正義や平等とは何なのか？」や、「この地球は誰のものなのか？」という問いが常に私の頭の中にあっただ。「人間が便利に生きるためだけに地球の資源や生き物は存在しているのか？」「人の発展のためであれば、それ以外のすべてを利用していいのか？」という問題は、未だに私の中をぐるぐると回っている。結局この問いに答えを出すことはとても難しく、はっきりとした答え(生き方)を明確にできないまま今もいる。が、「他の生き物の価値を尊重したい」という思いは常に私の中にある。

奇しくも現在、新型コロナウイルスの感染拡大によって全く別の角度から「この地球は誰のものなのか？」という問いが投げかけられているように思う。先日偶然見たテレビで霊長類学者の山極壽一氏が「地球は「細菌の惑星」「ウイルスの惑星」であって、我々は主人公ではない」と言っていた。またコロナを機に、改めて世界の知識人が人類の歴史を振り返り、人類と感染症の関係は「人が農業を始め、動物を家畜にし、生態系に負荷をかけるようになったころから感染症にさらされるようになった」というような話もよく聞く。「地球は人類のために」という生き方は、大きなひずみを生み人類をここまで大きな脅威にさらしているようだ。しかし現代の社会に生きる私は、人が人を、動物を、資源を、地球を、人類だけのために使うことに慣れきってしまっていることも感じる。もしくは、それらを正すために、社会の裏側や深層まで自分から踏み込んでみることを、積極的にしていない。ただ小さく「せめて私にできること」をしているだけ

だ。当たり前だがこれでは搾取される側もする側も救うことができない。が、私はこの小さなアクションを今後もやめない。そして「この地球は誰のものなのか？」と問い続けることも。なぜならそれは、私なりの「他の生き物の価値を尊重」する行為だからだ。

## 2. 対話

・対話の相手：母方の叔父

・この人物を選んだ理由：私のことをよく知っている。親族の中で議論好き。母語の関西弁で話せる相手なので、本音で話しやすい。

### 2.1 「猫をきっかけに、自らを振り返る」

叔父：読んでおもしろかったん。こらややこしいこと書いてるなと思ったんや。

わたし：そう？

叔父：これは、人間とは何かということ、えらい根本的に問うている文章やなと思ったんや。一方で人間が疎外されている。疎外されている自分をどう取り戻そうかというふうに苦悩している文章かなとも思ったんや。

わたし：人間って、つまり私がってこと？

叔父：そうです。要するに、生きるとか、生まれるとか、命とか、生とか、生命とか、そういうものを、問いかけると。そして問いかけていくと、どんどんそれから発展していくんやけれども、要するに、生きるっていうことの意味を考えようという文章とちゃうかいな、と思ったんや。

わたし：ふーん。

<略>

叔父：あなたの文章を読むと、猫はきっかけやけども、自分を発見しようとしてはんねん。そう思ったんや、この文章、俺は。そういう意味で、自分自身に問いかけてる文章やなと思ったで。私やったら、俺は猫は好きである。なぜなら猫は勝手気ままだからっていうような、そんな論理になってしまう。

わたし：確かに。

<略>

叔父：だから、何をきっかけであろうと、人間はどんな悲惨な現実生きてるんかっていうことを、誰でもが考えなあかんのちゃうかいなっていうことやねん。



私:本当はっていうこと?

叔父:うん。それが生きるっていうことやろうと思てんねん。

私:なるほど。ちょっと待って。つまり全人類としてどういう方向性に行くかっていうことを考えるには、今現在、起こってる現象をちゃんと認識しなくてははいけないっていうこと?

叔父:そう。あらゆるとこ。自分にとって・・・。

私:でも私、そんなに、そんなこと考えてない。

叔父:考ええや、これから。

私:でも考えなあかんのかな、結局そういうことを。私、この結論を書くのがすごく難しくって。というのは、そこまで腹が据わってないねん、私。

叔父:誰でも据わってないで。

私:でも、こういう問いを始めると、自分の腹の据わってなさを発見してしまうと、結局何もしてないのと一緒にわけやん。

叔父:うん。…でもしてる。一つあるで。悩むっていうことはあるで。

私:確かに。

叔父:何にもしてないことないで。考えるということやってるで。

私:やってる。

叔父:だからええやんか。

私:ええんかどうかわかれへん。なんでええの?

叔父:考えないと生きてられへんやんか。

私:そうやけど。でも、だから私の小さなアクションは、自分ができること、小さなシェルターのちょっとしたボランティアやってますって程度なんや。

叔父:ええやんか、それはそれで。それは悪いとやうてへんやんか。

私:言っていない。

叔父:でもいろんな人から刺激受けるやんか、それやったらこうや、ああやって対話していくと、要するに、行き着く先は、えらい重大問題になっていくんちゃうかいなとやうてんねん。

## 【自分の考え】

何かを「好き／好ましい」と思うとき、その対象に対して愛情を表現したいとき、当たり前だけどその行動は自分の中にある理由から作り出される。この活動で動機文は2回書いていて、1回目の動機文では、もっと「猫」にフォーカスして書いていた。つまり「好き」な思いと「私なりの表現方法」が中心だったが、2回目の動機文では、より「自分の中の理由」を探るようになった。それが今の動機文だ。結果、当たり前だと思ってやってきたことは、実際には好きだと思う対象から見ると、たいして「何もしてない」ことに気づかされ、悩んでいる。しかし、叔父は「何もしてないことない」「考えること」ことしているといった。そして「人は考えないと生きられない」「考えるから対話する」、「対話すると刺激を受ける」と。これらは、ことばにすると当たり前すぎることだけど、それを実行するのは容易ではないと思う。今は少なくとも「考えること」で出発点には立っている」と叔父が認めてくれたように感じ、有難いと思った。

### 2.2「だからことばがある。でもことばがあるからぐるぐるする。そしてそれは、それでいい。」

叔父:生きてる生命体が全部存続したらええやんか。ところが紆余曲折あって、死滅していくものとかあるわけや。なんでそないなるんやと考えたら、そんなことまで考えてるのは人間だけやっちゃうわけや。でもその考えてる人間が、自分一人だけ生きてんねんやったら、その考え伝えられへんやん。例えば森一貫(叔父)から中島永倫子(私)へ伝えられへんやんか。今、伝えられてんのは何かいうたら、それ、言葉があるからやんか。

私:うん。

叔父:だから、ことばっちゃうのは重要ですよというのが私のコメントなんです。

私:なるほど。ちょっと待って。なんかぐるぐるして。ことばが重要は分かった。でも、そこに行くまでの過程が、あんまりよく分かってないかもしれん。

叔父:あんた、心の中でぐるぐる回りしときいや。

私:それで終わり?

叔父:何が悪いねんな。

私:いいとか悪いはもちろんない。

叔父:ない。

私:ぐるぐるすると、確かにどこかにエネルギーが出るから、出て行きたくなるから、でも多分、それがぐるぐるしてる理由は、この先にあるものが大き過ぎて私では太刀打ちできないなっていうのが、多分・・・。

叔父:今、思てるだけや。

私:分かった。ちょー待って。じゃあ、それを、もしかすると、やったらできるのかもしれない。けど、私の腹が据わってない。

叔父:かも分らんな。でもまた偶然がないからかも分らんな。

私:かもしれないし、それに、腹を据えてやりたいと、そこまで思っていないからかもしれない。

叔父:かも分らんな。かも分らんけれども、そうやって閉じてしまったら、自分の心の中だけの悩んでることだけでええんやという、そんな問題になってしまうやんか。

私:そうやねん。だからそこまでしか書いてないやん。結局、でもこれに何か行き場を求めるなら・・・。

叔父:今、求めてるやん。コメントくれ言うてる。それでええやんか。

私:ていうか、人に聞いて教えてもらうとかではなく、多分、私自身が考えるっていうことは・・・、行き場のないものとかそういうことを考えるってことは、多分、私の今までとか、これからの人生選択とか、つまり生き方に反映するわけやん。

叔父:うん。

私:そういうものと、今こうやって考えてることが、どうつながっていくんだらうっていうところまで考えるといいんだらうなっていうのは・・・。

叔父:ええやんか。今、途中やもん。それでええやんか。

私:そう？

叔父:それでええやんか。

私:へえ、それで、ええんか。え、終わり？

叔父:うん。終わり。

### 【自分の意見】

この直前に叔父は「猫も考えたらいい、ウィルスも考えたらいい。考えへんって頭から決めつけんと、あやゆるものが生きるために考えたらいい」という発言があり、私には全く意味がわからなかった。結局そんな禅問答のようなやりとりをした後、「だからことばちゅうのは重要ですよ」と締めくくられた。そして「ぐるぐるしとけ」と言われた。たぶん、言われなくても私はぐるぐるする。でも、一人でぐるぐるするのと、誰かとぐるぐるするのは違うし、そのためのことばの重要性を改めて感じた。

### 2.3「対話とは-相手から行為を考える」

私:私、時々なんか動けなくなるねん。結局、行動の理由がなくなると私はすごく困るの。何のためにこれをやってるのが分からなくなると。で、動けなくなるところにまで、結構来てるかもしれない。

叔父:それを助けたる方法はないわ。悩みを共にする友達づくり。できたら恋人が一番ええな。

私:え?でも今、叔父さんに話してるのは?

叔父:わしゃ恋人ちやうもん。

私:もちろん違うけど、めいっ子やん。

叔父:めいと恋人はちやうわいな。

私:なんで!なんで恋人じゃないとあかんの?それは何か親身になり方の深さが違うからってこと?

叔父:恋人やったら、目の前にいてる人、この人のためって思うやんか、まずは。

私:ほんまにそうかなあ。それはでも、恋人であるからとかじゃないと思う。そういうことが理解できるかできるかっていうのは、恋人であつてもなくても、できる人とできない人という。

叔父:いてるな。

私:私は、叔父さんはそれをできると思ったから、今、叔父さんに話を聞いてもらいたい。

叔父:だからデートせえへんてと言うたんやから。

私:違う。そういうこと言うてへん。

叔父:恋人やったら、わしゃするか分かれへんやん。

私:そうなん?なんで。

叔父:なんでて、ええやんか。こいつに賭けたろと思うんやんか。

私:ちょっと待って。この話はそんなに極限のことなん?

叔父:ほんま悩んでんねんやから、しゃあないやん。

私:待って。じゃあ、分かった。いや、ちょー待って。違う。この悩みを解決してくれって言ってない。

叔父:言うてないな。

<略>

私:(叔父さんは)分かっているとと思うけど、そこまで踏み込んでくれてない。

叔父:踏み込んでないよ。

私: やよね。

叔父: でも考えてみ。おまえ、自分で解決せなあかんでって言うてるねんから、ほんまは踏み込んでんねんて。他人さんやったら「大変やな」て言いながら「えらいこと考えてんね。人類の問題考えてるなんて中島永倫子さん偉いわ。わしゃ拍手贈るわ。永倫ちゃん、ばんざい！」で終わりや。

私: 踏み込むってどういうことなんやろ、じゃあ。

叔父: これ、もうあとちょっとしたら終わって帰るやんか。

私: うん。

叔父: 帰ったら、頭の中からぱっと飛んでしまうんや。っていうようなんが普通。単なる他人の問題やんか。私は今、恋人なんて言うたんは、その後でも一生懸命考えて、また電話して話しよか、とかいうていうのがちゃうやろと言うねん。

私: じゃあ、こういう話には、1回だけではなく・・・。

叔父: そらそうや。何ぼでも。

私: でも1回の対話が・・・。1回の対話が、何かすごく核心的な所に触れることはできると思う。回数重ねなくても。

叔父: できるな。わしゃ能力ないからできてないんで。

私: 違う。違うと思う。でも、そう考えると面白いね。

<略>

叔父: 存在しているから、いろんな悩みとか意識が出てくるんや。意識があって考えてんちゃうんやで。存在があるから考えたんやで。そういう意味合いでは、いてるということが重要なんで、何か行動しようとしたときに、自分を投げかける、そういうふうな行動をするかどうか、ちゅうことになるんやろうと思う。思てるだけやったら、投げかけへんやんか。思うことがあって投げかけてんねん。投げかけるということが重要やから、続けはったらどうですかて言うてる。

私: そうか。それは続く。

叔父: 続けなさいよ。

私: 続く。

叔父: またちょっと考え変わったんやけど、っていうのやったら、言うてください。「また考えて、ちょっとちゃう問題出てきたんでこれ考えて」っちゅうんならええし、「あの問題考えたら、ええ解決策見つかったから、これどう思う？」っていうんなら、よかったら聞いてくれてもええ。答えたるよ。

### 【自分の考え】

最初は「考えるてるからええやん」と言ってくれていたが、最終的には「投げかける(対話する)」ことの重要性にたどり着いた。そして「恋人に話せ」と最初に言われたとき、全然意味がわからなかったが、今考えると「立場の違いが人の行動を変える」ということは大いにあり、私自身はそれに期待していることがよくあると感じる。「このような関係性であれば、このようにしてくれるだろう」と一方的に期待を持っていて、それがその通りにいかなかったときに、いら立ちや悲しみを覚えたりすることがある。しかし多くの場合は、関係性の合意は得られていたとしても、行為に対する合意が得られていることは少ないと思う。例えば、叔父と私の間には「親類である」という関係の合意は両者にあるが、「親類だからこうしないとイケない」という行為に対する合意は全くない。実際にこのインタビューでも「私はあなたの姪っ子なんだから、もっと介入して語り掛けてくれてもいいんじゃないの？」という期待を込めた発言がある。そのたびに叔父は「自分で考えてみ」といいながら、対話を続けてくれている。こうして客観的に叔父とのやり取りを見ると、改めて対話には関係性や安心感が重要だ気づかされる。何をきっかけに人は安心感を持つのか、どのような言葉の選択が良い関係性を作るために必要なのか、明確なルールはない。今回の対話は叔父であったことや関西弁であったこともあり、私は全くその点を気にしないで話ができている。しかし、他の相手だと同じような対話にはならないし、実際私はこの関係性や距離感への配慮が足りないことがあり失敗することがある。今後の課題かとして考えていきたい。

### 3. 結論・まとめ

「自分の好きなこと」から動機文を書きましょう」とお題を頂き、「もちろん猫だ！」と、ありったけの猫への想いを最初に書いたのは1カ月以上も前。書いてみると猫に溢れた想いを輪郭づけたのは「人間社会の矛盾」や「平等とは何か」に対する自分なりの行動だった。私が「猫好き道」に入るには、猫にまつわる一連の行動があり、その行動を継続した根幹に「地球は誰のためのものなのか」という問いがあることに気づく。

「地球は誰のものなのか」という問いに対して「すべての生きとし生けるもの」と答えると、なんだか偽善者のように感じてしまうのは、「人間のものだ」と私の生活の在り様がことばより強く認めているからかもしれない。もちろん「生きとし生けるもの」のために人生をかけて戦っている人は大勢いるし、自分にできる小さな活動をしている人もいる。私はもっぱら後者として、「猫のための地球でもあれ」との願いを込めて、猫シェルターでボランティアをしている。きっと「猫の価値を認め尊厳ある猫生が送れるよう、小さくてもお手伝いさせて頂く」という行為があってこそ「猫好き」を名乗っても許されるのではないかと感じているのだろうと思う。

こんな七面倒くさい観点から自分の周りを見渡すと、一体「誰のためのものかわからないこと」に溢れていることに気づく。そもそも人は人を守るために農耕を始めて土地に根付き、人間社会を築いたのだから「自分のために」と言ってしまうえばシンプルで潔い。しかし「他者のため」が良しとされている今の人間社会の中では、「自分のために」という理由だけでは動きづらい構造が出来上がっている。では「他者のため」に動くのかと言うとそうでもなく、そう見えるように複雑に屈折した「自分のため」の行為で溢れていると思う。特に大人になり社会を機能させる歯車の一部となると、この屈折した「自分のため」の行為を「他者のため」に見せる技術を学び、それを作り出す一端を担うことが求められていると感じる。これを辛いと感じるのかどうかは、別の観点かと思うが、少なくとも私には重く悩ましい問題である。またこの悩みは、生きる土台に直結するため簡単に答えを出すのが難しい。

こんな思いを対話活動の名のもとに叔父にぶつけてみる機会を得た。議論好きで人生経験豊富な叔父から、それは納得のいくうちくを頂けるのかとワクワクしたが、叔父からもらったのは「悩めばいい」ということばだった。人間中心に形成され行動理由が複雑化した社会に生きるのは矛盾だらけなこと、疑問に感じつつ小さなアクションしか起こせない自分は結局何もしていないのと同じだと感じることなどをぶつかけると、「何もしてないのではない、悩んでいる」「疑問を呈することに意義がある」「もっと対話し続ける」と温かく言われた。

実際「疑問を呈すること」には勇気がいり、今の私には荷が重い。しかしこれは、今の私が、人間社会を生きる上で「せめてできること」なのだろう。生きることは猫を好きと繋がっていると感じた「対話活動」だった。

### 後書き

この活動を支えて下さった、細川先生、松田先生、対話のすべての仲間と叔父に感謝します。皆さんとともに、励まし、笑い、認め合えたから、色々と考えることができました。これからもずっと対話し続けたい仲間に出会えて嬉しいです。

### メンバーのコメント

#### ☆ 動機と理由へのコメント

**Matsuda Makiko**先生

興味深いです。山極壽一氏が「地球は「細菌の惑星」「ウイルスの惑星」であって、我々は主人公ではない」山極先生、ファンです。おっしゃる通りですね。いつの間にか人間は、自分たちこそが地球の主人公であると思ひこむようになってしまいましたね。傲慢でえらそうな人間が嫌いで、謙虚な生き物が好きということ？

**Hideo Hosokawa**先生

中島永倫子さん、興味深い文章をありがとうございます。中島さんのお考えはよくわかりました。「この地球は誰のものなのか？」という問いと「私なりの「他の生き物の価値を尊重」する行為だからだ。」という姿勢は本当にすばらしいと思います。もう一步踏み込んでみると、その中島さんの「この地球は誰のものなのか？」という問いと「他の生き物の価値を尊重」する行為の、ご自身の生活や仕事との関係がちょっと見えてきません。そうすると、自分の興味・関心と日常そして仕事は関係がなければならぬの？という質問が返ってきそうですが、それらはバラバラであるはずがなく、どこかでつながっているはずですよ。だったら、そのつながりをこそ語ってほしいのですが、いかがでしょうか。あるいは自分の個人的なことは言いたくないとおっしゃるかもしれませんが、これは決して個人的なことではなく、個人の意識の底にあるテーマと自分との関係なのです。これに向き合うことが、地球上で他者と共生することにもつながることだと思うのですが、いかがでしょうか。

**Alessandra Miyuki Hasegawa**さん

すごく奥深い話です。「…猫たちの境遇や私の立場によるところが大きい。」という所は、えりこさんは自分と猫ちゃんたちを重ねて見ているということでしょうか？私は大変だった時期の自分と生徒たちを重ねて見してしまう時があります。「他の生き物の価値を尊重」する行為、というのは、やはり、人間や自分をも尊重することに繋がっているのでしょうか？

#### ☆ 対話へのコメント

**Alessandra Miyuki Hasegawa**さん

慕える叔父さんとの会話、いいですね。私は読んでいて、叔父さんは突き放して介入していないというよりも、答えは中島さんの中にあるということを諭しているような印象を受けました。話は聞いてあげられるし、つくこともできるけど、俺の中に答えはないよ、とっているような。中島さんは、叔父さんから聞いた言葉を他の人から聞いていたら、同じようなインパクトがあったと思いますか？

#### ☆ 結論・まとめへのコメント

##### Mieさん

感想を書きたいけど下手な感想を書きたくない。だから保留にしてください。でも読みました。すっごくえりこさんのことがますます好きになった。

##### Sandraさん

「七面倒くさい観点から」物事を考える中島永倫子さんだからこそ、私は一緒に働くのが大好きなのかも～(笑)。動機文を読んで、私は「誰のために」生きているんだろうと考えさせられました。自分の動機文で「ブラジルの日本語教育のために働きたい」みたいなことを書きましたが、よく考えると「自己満足のため？」、だから「自分のため？」と考え始めました。でも、叔父さまのことば「何もしていないのではない、悩んでいる」「疑問を呈することに意義がある」「もっと対話し続けろ」、深いですね。これから悩み続けましょね。そして対話を続けましょね。



# 私は人のお世話するのが好き

—その うらに おもわずに意外な理由があった—

プリエト・リタ

## 1. 動機と理由

私は何が好きなのでしょう。

動物や植物、映画も好きです。新しいことに挑戦するのが好きです。

そして、教えるのが好きです。

30年前、日本へ出稼ぎに行く前に、医学部の勉強に夢中でした。25年前に日本語の勉強に夢中で、子供が生まれてから、子育てに夢中でした。

15年前は海藻の研究と日本料理、10年前は日本語教育、そして5年前は映画作りに夢中になりました。私は異なることをするのが好きなので、家族や友達を混乱させます。

でも、よく考えると、教えることと動物や植物の世話をするのが好きだということは、私は他の人に役立つ必要がある、私にとって必要なのは、他の人が私を必要とすることです。

たぶん、他人に必要なようになるために、人に与えることができるものを学ばなければなりません。それで、私は新しく異なることを学びます。

なぜかという、私にとって必要なことは、他の人が私を必要とすることなのか、私にはまだ分かりませんが、人間が好きなのは、人間の内面の必要性を満たすものかもしれません。

人間の好きなことは 心地よい気持ちを与えることかもしれません。

それで、たぶん、心地よい気持ちを与えることは、子供だったときの経験の思い出に関連しているかもしれません。

例えば、子どものころ親から兄弟の面倒を見るように言われて、うまくやって、褒められた子供、大人になってから、意識がしなくても、人の面倒を見るようになる。こ言うパターンが何回も繰り返す必要がありません。たった一回でも、子供の印象に残ってたら、その子供に対して、いじやなことではなくなる。兄弟の面倒を見ると褒められるチャンスになるって考えるようになる。

そうして、心地よい気持ちを与える状況は、思い出に良い印象に残った経験とつながってる。

そうならば、私は子供のころに何かあって、この私の必要なことは他の人が私を必要とする気持ちを生み出して、それで新しいことに挑戦するのが好きになったり、動物や植物の世話をするのが好きになったのかもしれません。

## 2. 対話 - 山本さんとの対話

・対話の相手：山本カーリーナさん

・この人物を選んだ理由：9年前しりあって、私のことよくしてるし、尊敬する人です。

### 2.1. 「子供の頃から」

山本さん：子供の頃何かあって覚えてるわけじゃないでしょ。

わたし：たぶん覚えてることとかじゃなくて、印象があって、脳の中 でどっかに残ってるんじゃないかなと思うんだけど。

山本さん：子供の時から お世話するのは好きだったの

わたし：嫌いでした。だけど私の弟、2歳下の 弟はすごくいたずらっ子で、ずっと面倒見ないといけないことだったんだ。すぐ逃げたりとか頭に怪我したりとかしてました。何回もあったことだから、ずっと見ないといけないってことでした。

山本さん：人の面倒を見るのが当たり前でした。お姉さんだからだ。

わたし：お姉さんというより、難しい子供のお姉さんでした。例えば 弟は3歳ぐらいの頃 私と手伝いさんと弟は映画を見に行つて、始まると電気が消えて、ついたら、いなくなつた。あの子野生の子でした、よく、大きな子供をおいかけて、逃げたりとかしてた。自転車の乗り方も誰も教えなくても、自分で、ある日近所の子供の自転車に乗ってそのまま家の前通つて行った。

山本さん：すごいね。それで弟さんとずっと一緒にいて、気をつけないといけなかったのは、リタさんの脳の深くに入ってるよ。

ちょっと危機感があるとよく頭に入るって言うんでしょ。。それに危機感を持つてるからリタさんって頭いいんじゃないか。面白い。

わたし：弟はそういう人間だから勉強に関して親に怒られたりとかして いつもノートをなくしたりしてたカバンごと そこら辺に置いて遊びに行つて戻つたらもうカバンがなかった。だから何回も怒られたりとかして その時だけ親から「リタみたいになればいい」「いつも勉強してるから」。その時だけ、直接褒められたんじゃないで、人に「こいつは勉強するのが好きだからいい子だ」って親が言ってました。それで勉強したらいい子になるって愛されるって思ったかもしれない。

### 【自分の考え】

人の世話するのが好きだからするのではなくて、癖です。

### 2. 「知ることが楽しい」

山本さん:興味の方向が色々があるよね、色々あるけど、やっぱり勉強の方に向かってる。海藻にしても研究をするところまでやってるし、映画もちゃんと作るのにどうやるかを勉強をしたい気持ちになってるでしょう。

わたし: そう。

山本さん:知ることが楽しい、じゃない？

わたし: ですね、知ることが楽しいですね、なんか これはどうなってるかって知りたくて、調べてそのままどんどん深くまで行って。

山本さん:ブレーキかからない、素晴らしい、りたさんの頭の中ブレーキという言葉多分ないじゃないかな。

わたし: そうですね多分そういうことを考えないといけない。なぜブレーキがない私、

山本さん:ブレーキと言うとそのリミッターみたいなものでしょ。

わたし: ここで止めないといけない、これで十分だって、普通これ以上しないよって考えない。

山本さん:いいことよ、いいことだから、その海藻に興味をもっただけじゃなくて、ちゃんと研究するところまでいってる。ちゃんとあるレベルまでいってるでしょう。いいことよ。

わたし: でも時間が無駄。。。。

山本さん:やりきったと思って、つぎにやることを探す。

### 【自分の考え】

知ることが楽しいし、好きです。

### 3. 「防衛本能？」

山本さん:子供は、防衛本能 といつか なんか自分を守る。やっぱり人間だから、働くから、全部お母さん やってくれたら それで安心するだけけど、親がやってくれないかもしれない。自分でやらない といけないと思ったら、やっぱりその子は、やるしかないってなって、気持ちが向くよ。その いろんなことしないと、なにかしないと いけないというちゃんと見るようになる。

わたし: たぶんそう、わたしは、小学生のころから、親に声かけて起こしてた。そうしなければ、二人とも 学校の先生なのにねぼうしてた。

山本さん:子供の頃から早起きだったかすごいね。

わたし: 早起きというよりそうしなければ両親が寝坊して仕事に困るから。

山本さん:偉いね 子供の頃からりたさんだったんだ。

わたし: そう。起きて着替えてパン買いに行ってみんなちゃんと起きてるかチェックしてそれは小学生の 頃からだった。

山本さん:でもその思い出さ、今振り返ってもさ、その頃の光景、今聞いてて思い浮かぶって言うか、幸 せだった じゃないかな。やっぱり、世話して、ちゃんと生活して、そのリーダーみたいにな ってるの、すごい幸せなかんじだったんじゃないかな。

わたし: そう、こいつらは私がいないと困るなってかんじ？そのきもちか、なるほど多分その時からな ってるね。

山本さん:わからないけど。逆のこと聞いてもいい？ 逆に言うと それ以外のところで どうなってるの かな。

子供は自分がだれかから必要とされてるかどうか別に考えないと思うんだけど、やっぱり自 分が必要とされてるかされてないか 不安になったりしたことがあった とかは無いの。

わたし: 必要されてなかった時とか、不安になってたっていうのはなかった。結局いつも弟か親から必要とされた。やっぱり私は必要とされてるところは 幸せだったんだね。その後、私13歳の頃もう一人の弟が生まれた。それでずっとこの弟の面倒を見ないといけないってことになった。だから必要されてないっていうのはなかった。ちょっと、私の人生は悲しいって感じてきてる。

山本さん: そんなことない。子供ってなんか 大人が考えないところで 不安を感じたりすることもあるでしょう 子供の独特な感覚があるから。

わたし: うん。

### 【自分の考え】

世話してリーダーになった。

## 3. 結論・まとめ

人の世話するのが好きな理由は、そのしだいで、リーダーになれましたからでした。

### 他者へのメッセージとして

教師として私達は生徒に幸せを達成できるように教育をしなければなりません。でもそのために、まず、私たちは幸せになる必要があります、幸せにする活動を理解して特定するのはその第一歩です。

## メンバーのコメント

### ☆動機と理由へのコメント

#### Matsuda Makiko先生

「私にとって必要なのは、他の人が私を必要とすること」、私も同じです。しかしその理由は違います。私は自分に自信がないので、誰かに必要とされることで、自分を承認したいのだと思います。嫌われるのが怖いです。子どものころは嫌われ者で、いじめられていました。誰かが自分と仲良くしてくれるとほっとします。

#### Hideo Hosokawa先生

「新しいことに挑戦するのが好きです。そして、教えるのが好きです。」すばらしいですね。リタさんのいろいろなものへの挑戦が目につかぶようです。そして、その理由が「私は他の人に役立つ必要がある、私にとって必要なのは、他の人が私を必要とすることです。」ということなのですね。その「人間が好きなのは、人間の内面の必要性を満たすものかもしれません。」の「人間の内面の必要性」とは何でしょうか。「心地よい気持ちを与えること」とありますが、何が「心地よい」かは、人によって違いますよね。そして、そのことが、はじめの「新しいことに挑戦するのが好きです。そして、教えるのが好きです。」という文の意味とどうつながっているのか、もう少し具体的に書いてほしいところです。健闘を祈ります。

#### Mie Yokomizoさん

私もいろいろ新しいことに挑戦するのが大好きです。それはどうしてなのか、何と関係しているのが、私の頭もぐるぐる考えています。

#### Alessandra Miyuki Hasegawaさん

どのような映画を作っていたのか、とても気になりました！

#### Hideo Hosokawa先生

リタさん、ありがとうございます。「この私の必要なことは他の人が私を必要とする気持ちを生み出して、それで新しいことに挑戦するのが好きになったり、動物や植物の世話をするのが好きになったのかもしれない。」ここが重要ですね。自分が他の人に必要とされることは、リタさんにとってどんな意味がありますか。このテーマについて、じっくり話してみたいと思います。よろしく。

# 「誰のものでもない私」を探究する

末永 サンドラ  
本多 由美

# 日本語教師としての私

—仕事以外でホッとする時間があるから頑張れる—

末永サンドラ

## 1. 動機と理由

「好きなことって何?」「興味があることって何?」と聞かれて、すぐに思い浮かぶのは仕事のことだ。「日本語を教えることは好き」「子どもの日本語教育に関して興味を持っている」「ブラジルの日系社会の日本語教育に興味を持っている」など。対話テーブルの最初の活動で動機文を考えたとき、私の好きなことは仕事だけ? 私の人生のテーマは仕事だけ? という疑問があり「ホッとする時間」をテーマに、仕事以外のテーマで書くことを試みた。しかし、自分が本当に伝えたいことが明らかにならなかった。

その動機文をもとに同僚にインタビューをしたところ、話は想定外の方向に進んだ。しかし、自分のテーマは「ホッとする時間」ではなくもっと大きなものだとの確信できた。また、対話テーブルの参加者からの動機文に対する質問に答えたり、他の人たちの動機文について話し合うことで、自分の言いたいことが徐々に明らかになったように思う。そのため、動機文を書き直すことにした。テーマは「日本語教師としての私—仕事以外でホッとする時間があるから頑張れる—」。

本レポートでは、最終版の動機文に至るまでの経緯を示すことにする。

ここでは、最終版の動機文を記載する。テーマは「日本語教師としての私—仕事以外でホッとする時間があるから頑張れる—」。以下動機文である。

### 動機と理由

私は16歳の時、サンパウロ州の地方都市の日本語学校で助手として働き始めた。日本語が話せるからという理由で誘われ、新しいことに挑戦してみたいという好奇心で日本語教育界に飛び込んだ。日本語教育においては素人だった。その学校に勤めながら高校を卒業し、大学は教育学部に進学した。大学で教育における全般を学び、日本語教育の基礎はブラジル日本語センターが主催する日本語教師養成講座やJICAの訪日研修で学んだ。

20代後半、新しいことに挑戦したくなり日本へ留学し、早稲田大学日本語教育研究科で修士課程を取得した。その後、群馬県太田市の小学校でバイリンガル教員として外国人児童生徒の学習支援及び日本語支援の仕事をした。

日本での生活は充実しており、小学校での仕事も好きだった。しかし、30代後半、家族のいるブラジルに帰国することを決意した。ブラジルで新たな挑戦がしたくなったのだ。帰国して2年後、国際交流基金日本文化センターの専任講師としての仕事を始め今に至っている。

このように、私は20年以上日本語教師としての仕事と勉強に専念し、5年から10年のスパンで移動を繰り返してきた。自分が好きでやってきたことなので後悔はしていない。しかし、このまま自由に自分の好きな仕事をやっていきたいという反面、心のどこかで「私の人生これでいいのか」といった疑問があった。同級生や同年代の友人は結婚をして子どもを産んでいる。私はこのまま仕事一筋でいかのかと思う不安な気持ちがあったことは確かだ。今思えば、このような気持ちを紛らわすために「新しいことへの挑戦」として移動を繰り返してきたのかもしれない。または、自分には足りない「何かを」探し求めて新しい職場を求めているのかも分からない。

6年前、日本語教育の世界とは全く関係のない主人と知り合った。主人は安定した職についており、定年退職まで今の仕事は続けるつもりでいるようだ。主人と過ごす時間のほとんどは、仕事とは全く関係のないプライベートの時間だ。落ち着きがなかった私の人生に安らげる場ができた。一緒にいる時間は楽しいしホッとする。

プライベートで充実した時間が過ごせるようになったことで「私の人生これでいいのか」といった迷いが消えた。自分が探し求めていた「何か」が見つかったのだと思う。このように自分の気持ちが落ち着いたことで、サンパウロで日本語教師として自分のできることを精一杯やろうと思えるようになった。そして、今まで積み重ねてきた経験を踏まえて「私は日本語教師だ」と自信を持って言えるようになった。

今は「好きなことは何?」「興味があることは何?」と聞かれれば自信をもって「日本語を教えること」、「ブラジルの日本語教育について考えること」、「子どもの日本語教育について考えること」だと言える。これらのテーマについて深く追及することも好きだ。勉強すればするほど分からないことが出てくる。それについてさらに調べる。また、現場の先生方と交流をしながら理論と実践をいかに結びつけるかを考えるのも楽しい。

しかし、たまに嫌なこともある。そして、「こんな職場辞めてやる」と思うこともある。でも、今は主人とのホッとする時間があり、ホッとする場所が救ってくれる。だから頑張れる。ブラジルに帰国してから今年で9年になるので、主人と知り合っていなければ新しい挑戦の旅に出ていたかも知れない。

最後に補足だが、私は今まで何度も「こんな職場辞めてやる」と思ったことはあるが「こんな職業(日本語教師)辞めてやる」と思ったことはない。それだけ日本語教師としての仕事が好きなのだと思う。

## 2. 対話

・対話の相手 : 同僚の吉川真由美さん

・この人物を選んだ理由 : 真由美さんは、日本語教師としても、今の仕事でも、結婚生活においても先輩。そして、とてもまじめで、信頼できる先輩であるため、インタビューをお願いした。

ここでは先ず、最初に書いた動機文「ホッとする時間」を記載する。その後、人物インタビューや本活動の参加者との対話を通して気づいたことに関して述べる。

### 動機文「ホッとする時間」

「好きなことって何?」「興味があることって何?」と聞かれて、すぐに思い浮かぶのは仕事のことだ。「日本語を教えることは好き」「子どもの日本語教育に関して興味を持っている」「ブラジルの日系社会の日本語教育に興味を持っている」など。でも、仕事以外で私の好きなこと、興味があることはなんだろう、と考えてみた。そして、なぜ仕事のことですぐに思い浮かぶのかも考えてみた。



私は20年近く一人暮らしで、勉強と日本語教育関係の仕事が中心の人生を送っていた。忙しいときは、夜遅くまで、そして休みの日も仕事をしていた。でも、それが苦になるということにはなかった。プライベートといえば、家族や親戚との食事会、少し長い休みが取れるときは実家でのんびりすることだった。仕事をしている、それについて考えている時間に比べると、プライベートを楽しむ時間はほんのわずかだった。友達と飲み会をすることはあった。しかし、友達も仕事関係の人が多かったため、休みの日も日本語教師である自分から離れられていなかったような気がする。どちらかといえば、プライベートと仕事の区別がつかない生活を送っていた。

6年前、主人と知り合った。主人は、日本語教育とはまったく関係のない分野の人。デートをするようになってから、私の人生に、仕事とは関係のないプライベートの時間ができた。仕事が忙しいときは別だが、休みの日に仕事をする、またそれについて考えることは避けるようになった。長期休暇が取れるときは、車で行ける範囲内の、ちょっとした観光地の山の中に数日も暮らすようになった。宿泊施設が整っているコテージのような所に泊まり、自然の中でゆったり過ごす時間、幸せだなと思うようになった。

仕事優先の生活を送っていた時は、こんなこと考えたことがなかった。でも、今は仕事から完全に離れてホッとすることが必要となった。それは、自分一人の時間ではなく、主人との時間も大切にしなければいけないからだと思う。そして、二人に共通してホッとすることが見つかったからだと思う。

主人と出会って、私の仕事に関する価値観が変わった。「仕事」と「プライベート」の区別をする必要があると思うようになった。仕事をしているとき、それについて考えているときは、真剣に取り組む。しかし、主人や家族と接する時間も大事にする。今後も、「私の好きなことは日本語を教えること。日本語教育について考えること」だと言い続けるだろう。それに加えて「主人と一緒に、ゆったりとした時間を過ごし、ホッとすること」と。仕事とプライベートを両立し、どちらも充実した人生を送っていききたい。それが「私の人生のテーマ」だろう。

以上が動機文である。真由美さんとは50分ほどお話をし、内容は私の趣味探しがメインとなった。そのため、見出しを「私の趣味探しその1」、「私の趣味探しその2」、「私の趣味探しその3」、「仕事とプライベートの両立」とし、それぞれのトピックで私が気づいたことインタビューの中の関連する部分を記載する。

## 2.1「私の趣味探し その1」

真由美さん: 最初読んだときに(動機文を)、好きなことは何ですかと聞かれたら、私たち、だいたい趣味とかあると思うんですよ。サンドラさんの場合は、趣味イコール仕事みたいになっているのかな、と思ったんです。

わたし: そう。そこなの。趣味って何って聞かれて、いつも答えに困る人間なんです。

真由美さん: (笑い) でもいろいろあるんじゃないんですか? 読書とか、美術館に行くとか、というのが趣味かなと思ったんだけど。定期的に行っているわけではないんですよね。

わたし: そうそう、定期的にいっているわけではないし、好きといえば好きかもわからないけど、それが自分の趣味になる、となるとどうなんだろうと。

真由美さん: 習慣ではないんですよね。

わたし: そうじゃないね。

真由美さん: 難しいよね。

わたし: 今日本のドラマとかよく見てるけど、それについて語れるほどのものではないな、というのがあったりとかして。

真由美さん: 評論家を書いたドラマへの批判とか、そういうものは読まない?

わたし: 読まな—い! (笑)

真由美さん: (笑) 読まないか。ただドラマが好きで見ているんだね。

わたし: そうそう。

真由美さん: そこは私も同じかもわからないけど。趣味ではないですよ。

わたし: ちなみに、真由美さんは、趣味は何ですかと聞かれて、何と答えるの?

真由美さん: 私、二つあると思うんです。最近あまり歌ってないんだけど、カラオケが趣味だったんですよ。で、カラオケで色々歌っているうちに、あ、この歌は、何でしょう。サンドラさんと同じように仕事で使えるのかな、と思って。例えば「飛んで、飛んで、飛んで」という歌を聞いたときに、あ、これはクラスで、「〜て」の形になっている動詞を教えたときに、こういうメロディーを使えるのかな、と昔は思っていたんですよ。

わたし: なるほどね。

真由美さん: それは、最近あまり歌ってないんだけど、それは趣味の一部に入っていたと思うんですよ。歌の先生がいて、そこに通って、カラオケコンクールとかに出て、というのが私の趣味だったんですよ。でも、最近、7やっぱりランニングにはまっていて、ランナーの生活習慣とか、そういうのも読むようになったし、それが趣味になっていると思います。

わたし: なるほど、そっか。私はそこまで好きでやっていて、そこまで調べて、そういうものはないなというのがあって。。。なるほどね。そっか。そういう領域に入っていくんだね、なんか分かんないけど、深く考える。ランナーのこととか、走ることとか。

### 【自分の考え】

動機文を読んで真由美さんが気になったことは「サンドラの趣味は仕事なの、他にないの?」ということだったと思う。そのため、私の趣味探しをしてくれた。以下のように真由美さんとの話は弾んだが、私には真由美さんと同じような趣味はないかも、と思い始めた。

## 2.2 「私の趣味探し その2」

真由美さん: 最後まで読んで、本当に趣味は仕事なのかな、と感じただけど、サンドラさんの場合は。(笑)

わたし:(笑)

真由美さん:以前、美術館とか博物館に行くのが好きみたいな話をしましたよね。

わたし:しましたよね。でも、実は一人の時はふらっと行ってたんだけど、旦那と知り合ってから行かなくなっただけですよ。

真由美さん:そっか。それは同じかな。

わたし:たまには行くけど、以前のようにしょっちゅう行かなくなった。一人の時は、週末時間があるからちょっと行ってこようかという感じでふらっと行ってたんだけど。

真由美さん:ということは、旦那さんはあんまりそういうところには行かない人？

真由美さん:逆に考えれば、旦那さんの趣味とサンドラさんの趣味が違っていたので、今はちょっと二人で、話し合いながら妥協するところを妥協して、新しい趣味を探してるみたいな感じになる？

わたし:そうかな。。。

真由美さん:ここはダメなんです。同じ趣味は絶対に考えられないですよ。

わたし:あ、そう。

真由美さん:そう、走ると思ったら、私は走るけど、あの人はダメ。ウォーキングになるわけですよ。それでも、マラソンのトレーニングをした時は、最初は、一緒に行ってたんですよ。で、私が35Km走るところ、12Km歩いてたんですよ。でも、あまり長続きはしないんですよ。それで、今では「どうぞ行ってください」みたいな感じなんですよ。

わたし:なるほど。そっか。でも最初は一緒に。。。

真由美さん:そう、行動してたんですよ。合わせようと思ってたんでしょうね。

わたし:なるほど。

真由美さん:で、博物館とか彼もあまり好きじゃないんだけど、私が行きたいと言ったら「どうぞ、行ってください」みたいな感じなんですよ。だから、引きとめはしないんだけど、「行ってください」みたいになるんですよ。だからそういう感じかなと思って。

わたし:そうになっていくのかな、私も。分かんないけど。。。(笑)

真由美さん:(笑)でも、そうなるちょっと危なくなるんですよ。危ないというのは、自分のプライベートはプライベートなんだけど、一人一人それぞれちがうので、お互いに縛られないでいいんだけど、やっぱり理解がないと続かないですよ。

わたし:確かに、それはそうかも。

真由美さん: そうだね。

わたし: でも、確かに、今真由美さんに言われて、お互い違う趣味持っていて、今まだ本当に合わせているところなのかもね。

### 【自分の考え】

話は弾み、真由美さんと私の趣味探しは続いた。私は美術館とか博物館に行くことが好きだった。でも、主人と知り合ってからあまり行かなくなったと話すと、真由美さんは「旦那さんの趣味とサンドラさんの趣味が違っていたので、今はちょっと二人で、話し合いながら妥協するところを妥協して、新しい趣味を探してるみたいな感じになる？」とのコメントをした。今まで考えたことがなかったけど、そうかもと思った。主人と知り合ったことで、私の生活のリズムが変わったのは確かだ。

## 2.3 「私の趣味探し その3」

真由美さん: ポルトガル語で言う、hobbyとpassa tempoですか、passa tempoは、日本語の趣味というのはちょっと意味が違うのかなと思いはじめているんですよ、私。

わたし: あ、そうなの？

真由美さん: うん、だと思う。ことらで、Qual seu passa tempo predileto?とか言うんですよ。自分が好きでやっていることは何ですか、という意味に近いのかなと思ったりする。それがイコール趣味とは言えないのかなと最近思うようになったんですよ。で、私日本の友達に聞いてみたんですけど、趣味というのはどういうことを指すんですか、と聞いたら、例えば映画を見るのが趣味だというと、その人はあるジャンルの映画が好きで、その映画を見る前にその映画について調べたりして、歴史的な背景があるものだったらそれも調べて、で、見た後批判を読んだりする、そういうのが趣味だと人がいたんですよ。それを考えたら、植物に水をやるというのは趣味じゃない。じゃあ、どういうふうになったら趣味になるかという、例えば、何でしょう、盆栽を育てるのが好きな人、だったら盆栽を育てるのが趣味になって、そのためには何が必要か、どのくらいの量の水をやったらいいのか、どういうふうにしたらそれがきれいになるのかとか、色々調べてやる人が盆栽が趣味なのかなという風に思うようになったのね。

わたし: へえ。

真由美さん: ポルトガル語でいうpassa tempoは、ただ、水を花に毎日やることで、花を育てるのが好きな人はそれが趣味なのかなと思うと、もっとライトな感じがするんですよ。

わたし: ブラジルのpassa tempoとhobbyがもっとライトな感じってこと？

真由美さん: はい、はい。

わたし: ああ。

真由美さん: そこを考えたらやっぱり、趣味ありませんかと聞かれたら、ブラジルの人は、そういう毎日好きでやっていることを趣味として答えるのかなと思ったりしたんだけど。

わたし:でも、そういうふうに考えると、なんか、本当に趣味じゃないけど「何が好きですか」と聞かれると答えられるかもね。「ドラマ見るのが好きです」といえば、それでオッケということだよな。

真由美さん:そうそう。そういう感じかなと思ったの。サンドラさんと話しているときに、そういう何でしょう、一つの言葉の意味を考えた場合、サンドラさんが考えている趣味は、まさに日本語の趣味であって、ポルトガル語のpassa tempoではないなという気がします。

わたし:そうなんだ。そこまで深く考えていなかったけど、ここまで自分の動機文を「なんで？」と聞かれて、書かなくなると、やっぱりただ単に「映画見るのが好きです」と書いても語れないなと思って、だから考えたんだけど。でも、言葉のほうまでは考えてなかったな、私。なるほどね。

真由美さん:だから、ブラジルの考えたpassa tempoイコール趣味で、好きなことはこれだけど、日本語でいう趣味とは言えない部分、そこはちょっと探っていたら、「あ、好きでやっていることが、頻繁にやっていることが、こいつがあるな」というのが考えられるのではないかと思ったんだよな。

わたし:そうか、そう考えるとまた違うのかな。でも、そう言われても、語れるようなものはないような気がするな。(笑)

真由美さん:(笑)最近ケーキ作りを始めましたとか。

わたし:でも、ケーキ作りを始めただけど、それについて語れない、私まだ。(笑)

真由美さん:(笑)語れないよね。

#### 【自分の考え】

真由美さんは、言葉の意味を真剣に考える人だ。ポルトガル語で、趣味のニュアンスで使われるpassa tempoという言葉がある。真由美さんの考えだと、ポルトガル語のpassa tempoは、ただ単に「好きなこと」と訳すことができる。でも、趣味にはもっと深い意味がある。例えば「映画を見るのが趣味だ」というと、その人はあるジャンルの映画が好きで、その映画を見る前にその映画について調べたりして、歴史的な背景があるものだったらそれも調べて、で、見た後批判を読んだりする」、これが趣味の領域ではないかと。ここまで深く考えられた結果、私には、passa tempoはあるが、趣味はやっぱり仕事なのかなと改めて思った。

#### 2.4 「仕事とプライベートの両立」

わたし:でも、真由美さんも基金に入ってから何年かして結婚してますよね。

真由美さん:はい、5年ぐらいだったかな。

わたし:そっか。だから私と同じような感じで、真由美さんを選んだということもあるんだけど。仕事をしていて、今の私みたいに。。。私は知り合って6年、結婚して2年なんだけど、少しずつ仕事に対する価値観が変わってきたのかなと感じるようになったので、真由美さんもそういうことがあったのかな、と思って聞きたいところもあったんだけど。

真由美: あったと思います。昔、勉強会を開いていたんです。でも、それは仕事の時間とは別に、土日やってたんです。日曜日出ていくのも苦にならなかったし、そこに出ている人たちも自分の生活はあったと思うんだけど、出てくれていたんですよ。で、私もずっと日曜日の午後家にいないとか、ブラジル日本語センターに出かけていっているとか、そういうことが多かったんだけど、やっぱり結婚したらそういう時間もほしいなと思うようになったんですよ。それは、苦には思わなかったんだけど、やっぱり自分のプライベートの時間も仕事と関連したイベント参加するのだったら仕事の時間以内にしてほしいなとかいうふうに思

わたし: 同じかも、私も。それで、私質問されたの。プライベートの時間と区別するようになって、充実した仕事ができるようになったのかとか、他の人に対してもっと優しく接するようになったかと、そういう質問されたんだけど。。。

真由美さん: そうですね、優しくというか、他の結婚して子どもがいる人たちが勉強会に参加している人たちの気持ちが分かるようになったとか。昔は日曜日でも、人と会って好きなテーマについて話すというのは苦にならなかったんだけど、その分、自分のプライベートの時間が削られているということは感じなかったんですよ。でも、やっぱり自分の家族がいて、待っている人がいて、土日フリーなのかと思ったら仕事が入ってきたりする、そういう時があるわけですよ。だから、そういう時間も必要じゃないかと思うようになったんですよ。もちろん、土日に仕事が入る、お互いにだけど、あるんです。でも、それは、時々だったら全然苦にならないし、仕事の一部としてやむを得ないと思うんですけど、毎週毎週そういう感じだったら、本当に全然仕事から離れられない感じになってしまうと思うんで、それは仕事とプライベートを両立して、バランスを取るのがベストじゃないかと思うようになりました。

わたし: そう、私も、人にもっと優しく接するようになったのか、という質問に対しても、やっぱり、一人の時は自分中心の時間だったので、そんなに思ったことがなかったんだけど、(他の人が)提出物遅れたとか、そんな時、すぐに怒るのではなく、プライベートで何らかの事情があったのかな、とそんな風に考えられるようにはなったかも、と答えたんだけど。

真由美さん: そうですね。

わたし: そして、もう一つ、今までだったら週末でも家で仕事をしたければできるというふうに考えると、いつまでもダラダラ仕事をしていたところもあったのかなと思ったりもして。週末が入っているから絶対ダメだと思うと、平日仕事の時間に一所懸命やらなければいけないので、効率よく働けるようになったのかと思ったりもしてたんだけど。

真由美さん: そういうところも、時間が制限されているので、休み時間、お昼の時間とか削れるところは削ってでも仕事を持ち込まないという感じ、それはあると思いますよね。あるいは、夜ちょっと遅くなってもその方がいいみたいな感じですよ。集中するようになるという感じですよ。

### 【自分の考え】

インタビューをお願いしたとき、この点に関してもう少し話が弾むかと思った。しかし、真由美さんが興味を示したのは、私の趣味についてだったので意外だった。でも、動機文で自分の言いたいことが明確になってなったからだと実感した。

### 3. 結論・まとめ

「ホッとする時間」をテーマに動機文を書いたとき、細川先生から「仕事以外で好きなことがあった、とのことですが、そのことと仕事はどのような関係がありますか。」「ホッとする時間のサンドラさんにとっての意味を書いてみてください」とのコメントがあった。「ホッとする時間」なのになぜ仕事との関係なの、と最初は思った。そして悩んだ。

また、この活動に参加しているメンバーからは「人生のテーマは何か」、「ホッとする時間で感じる幸せと、仕事で感じる幸せは違うのか」、「ホッとする時間がますます仕事を充実させ、中身の濃い仕事ができたり、さらに周りにやさしくできてたりするのか」といった質問があった。これらの質問に対しての答えを考えることで、頭の中が整理されてきた。人生のテーマと言われれば「ホッとする時間」ではないのではないかと思うようになった。また、「ホッとする時間」に感じる幸せと仕事で感じる幸せは違うけど、私にとってどちらも大事だ。さらに、「ホッとする時間」があるから中身の濃い仕事ができているのかも分からない、と思うようになった。

しかし、人物インタビューの際までに考えた動機文では、「ホッとする時間」の意味と仕事との関係については書いていなかった。そのため、文章を読んで真由美さんが興味を示したのは「私の趣味」や「趣味という言葉の意味」だった。でも、この「趣味探し」のおかげで私は好きでやっていることや、一時期はまってやることはあるが、自分のテーマとして語れるものは「日本語教師としての私」だということが分かった。そして、日本語教師としての自分が安心して仕事に打ち込んでいるのは、仕事以外の時間にホッとできる場所があるからだ気づいた。

それで、動機文を書き直すことにした。新たに考えた動機文は「日本語教師としての私—仕事以外でホッとする時間があるから頑張れる—」だ。これで、最初の動機文で考えた「ホッとする時間」と日本語教師としての私の人生のテーマが繋がった、と思う。

#### おわりに

私は、自分の気持ちや考えていることを人に伝えるのが得意ではない。文章でまとめるのはなおさら苦手だ、と今まではそう思っていた。しかし、この活動を通して考えさせられたのは「伝えるのが苦手」なのか「伝えたくない」のか、ということだ。

「ホッとする時間」をテーマに動機文を考えたとき、プライベートの時間について書き始めたものの、どこまで自分のプライベートについて語りたいのか、という迷いがあった。このような語りたくないという気持ちがあったから、書けなかったのではないかと思うようになった。テーマを「日本語教師としての私」に変更したら、書きたいという事がたくさん出てきた。そして、その書きたいことをどのように文章にしたらいいのかを一生懸命考えた。これが細川先生のおっしゃる「内からあふれ出る」ということの意味なのかと思う。

また、対話テーブルの参加者についてだが、ほとんど仕事関係で知っている人だった。しかし、それぞれの動機文を読んで「この人はこんなことを考えているんだ」とか「こんなことが好きなんだ」といった発見があった。仕事関係ではよく話しているが、その人個人については知らないことが多くあるということに気づいた。そして、今後もっと知りたいとも思った。

このように対話テーブルを通して、参加者のみなさんと「対話」をすることで様々なことを考えさせられた。時には、「もう土曜か。対話テーブルの日か」と思うこともあった。でも、楽しかったし、参加してよかった。

#### メンバーのコメント

##### ☆ 動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko先生

サンドラさんの人生のテーマはなんでしょう？「子供のころのような自由」とはどのようなものか、知りたいと思いました

Hideo Hosokawa先生

サンドラさん、とてもよくわかる文章ですね。今のサンドラさんの生活への思い、のんびりとした気持ちがよく伝わってきます。だからこそ、「仕事以外で私の好きなこと、興味があることはなんだろう、と考えてみた。そして、なぜ仕事のことがすぐに思い浮かぶのかも考えてみた。」この部分を明確にしてほしいところです。ご主人とほっとする時間が大切というのはよくわかるし、そのように語るサンドラさんは素敵です。でも、それだけだと、サンドラさんのメッセージが伝わってこない。このほっとする時間を語ることであなたは何が言いたい、その言いたいことは何か、それがサンドラさんの固有のテーマだと思っています。

Mie Yokomizoさん

ほっとする時間がますます仕事を充実させ、中身の濃い仕事ができたり、さらに周りにやさしくできたりしますか？今はほっとする日が、ほとんどない私にアドバイスありますか？

Alessandra Miyuki Hasegawaさん

「自然の中でゆったり過ごす時間、幸せだなと思うようになった」と書かれていますが、それは大好きな仕事で感じる幸せとはまた違うものですか？

##### ☆ 対話へのコメント

Hideo Hosokawa先生

オンラインでもちょっと発言しましたが、仕事と生活の両立がテーマだとすると、それらは別々のものなのか、どこかでつながっているのか、そのあたりへの踏み込みがあるとテーマそのものがより明確になると思いますね。それがなくて、吉川さんとは、「趣味」のおしゃべりになってしまったような気がします。このあたり、サンドラさんだけの課題ではなく、この活動の課題かもしれません。

##### ☆ 結論・まとめへのコメント

Eriko Nakajimaさん

動機文から書き直したのですね！！お疲れ様でした！！！！サンドラさんとは職場も一緒なので、仕事に対する情熱や文章の後ろにある現実も共有していて…、仕事とプライベートのバランス、40歳半ばの女性としての人生(ほぼ同い年として)、サンドラさんの今の思いがよく伝わりました。でもお互い仕事好きは変わらないでしょうね！いいバランスで、まだまだ一緒に働けたら嬉しいです！

Alessandra Miyuki Hasegawaさん

おお！なんだかとても共感しました。中島さんも書いてありますが、女性としての人生、仕事と多方面とのバランスというものについて、すごく共感します。「こんな職場辞めてやる」と思ったことはあるが「こんな職業(日本語教師)辞めてやる」と思ったことはない、という所もよく分かります。涙。サンドラさんのことをもっと知れて、嬉しいです。素敵です。



# 一人旅

本多 由美

## 1. 動機と理由

私は、一人になる時間が好きです。家族が起きてくる前の朝のちょっとした時間、一人で町へ出かけた時のコーヒーのタイム、ほんの短い時間だけど私にとって大切な時間です。

何も考えずにぼーっとするのも好き、小さい夢をあれこれ考えるのも楽しい、時には真剣に考え事をしたり。。。普段はほんの短い一人になれる時間ですが、年に一度か2度思いっきり一人を楽しむようにしています。それが一人旅です。実際は一人旅というほど、大げさなものではなく1泊か2泊のお出かけ程度のものですが、それが私の楽しみです。

一人旅をするようになったのは、子供たちが成長し自分の時間が持てるようになってから、きっかけは、教師の集まりでブラジルへ行ったことです。身の丈に合わないお役目で緊張していたにも関わらず、空港での待ち時間、フライトの時間一人でいる時の解放感が快感だったこと覚えています。

私が一人旅が好きな理由は、自分のペースで、自分の行きたいところへ行き、したいことができること、そして「自由だ」感じることができることにあります。ですから、楽しみの一人旅をするときは、できるだけ自分のことだけを考えるようにし、家族のことも仕事のこともその時だけは頭の片隅に追いやってしまいます。

なぜこんなに一人になりたがるのか考えてみると、移住地という特殊な社会とそこでの人とのかかわり、小さい頃の経験や自分の性格が影響していると思います。

子供が好きで、教えることが好きで、学校が好きで、好きなことを仕事にしている、新鮮で自然な食べ物が豊富でおいしくて、緑が多くて空気がおいしくて、小さい頃からみんながお互いに知っている人たちがいる移住地で暮らしているのだけど、プライベートと仕事の区別があまりなく、人と人との関係が密で濃く、複雑なので人と接することにストレスを感じてしまいます。だから、何にも縛られることがない一人の時間が好きなのです。

一人旅では、自由気ままな自分でいられます。日常とは別の自分になったような気持ちになり、何とも言えない解放感を味わうことができます。私にとって一人旅は、ストレスを解消し、日常の糧を蓄えるとても貴重な時間です。一人旅から戻った私は、出かける前よりおおらかでやさしい自分になっていると感じます。

一人旅、日常に楽しみと刺激を与えてくれる今の私にはなくてはならない一人になれる時間です。

## 2. 対話

・対話の相手：川波 恵美子さん

・この人物を選んだ理由：とても信頼できる、よき友人です。視野が広く、色々な側面から物事を見ることができるのでお願いしました。

### 2.1 「なぜ私は一人になることがすきなのかということ」

恵美子先生：まず最初は仕事とプライベートの区別がないっていうのと、人に合わせてしまうっていう自己防衛っていうのは移住地っていうことと関係しているのかなあって感じたんだけど、由美先生にとって移住地ってどんなですか。

わたし：なんか、なんだろな いいところなんだけど、日本で生活したり、サンタクルスで生活したり他のところでの生活を知っているからか移住地は生活はしやすいんだけど、自分を出しにくい場所かなとは思う。

なんかね、移住地ってね小さいころから自分のこと知ってるじゃない んで、本多由美さんはこんな人みたいなのなんかあるでしょ。

で、小さい頃からけっこういじめられっ子だったから そういうことも。。。私をいじめた人に対して、なんかこうフランクにはなれないっていうのは ある。。。。

恵美子先生：思い出が大きいんだね

わたし：自分では 気にしていないつもりなんだけど。。。でもたぶん完全にはふっきてないのかなっていうのは そうやって考えていくとあるかも、小さいときにいじめられたっていうのは、結構私の人生の中で けっこうひきずっているかなっとは思う。

#### 【自分の考え】

一人の時は、人と関わることを気にしなくてもいい、人に合わせることも、どう思われるか気にすることもない。小さいことの思い出の影響もあると思う。

### 2.2「私にとって一人旅の意味は何かということ」

恵美子先生：タイトルに旅行 自分時間って書いてあったけど、あれって 非日常的な時間を楽しむために旅行してるのか それとも 自分の知らない世界に身をゆだねるために するのか どっちかなって

わたし:旅行にいつて知らないところに行って、楽しいって言うよりもとにかく一人になるのがすきな別  
にどこでもいいんだよね。。スクレに100回行ってもいいし 場所が変わればいいわけ。。

恵美子先生:あああ非日常を楽しむほうね

わたし:たとえばブエナビスタに一人で泊まっても楽しいし、そういうのも好き。。移動する距離はあまり関  
係ない。。空間が変われば

恵美子先生:空間を変えるね 旅行って言うよりは、空間を変えるのね

じゃあそこを充実すれば、由美先生のプライベートが豊かになる

わたし:そうね、それを考えると楽しいし それができた後は 仕事でも何でもがんばれる

恵美子先生:じゃあその後は、息苦しいとかは あまり感じない

わたし:うん リフレッシュしたあとは 楽になる

### 【自分の考え】

行くときはどこでもいい、場所よりも過ごす時間が大事で一人での時間を満喫することが一人旅の大事なこと、旅の工程ではなくてその時間が大事、一人で過ごす時間を求めてしている一人旅だから、日常から逃れられる空間があれば移住地内でも事足りるかもと思った。

## 2.3「日本語教師という仕事のこと」

恵美子先生:ユミ先生が日本語教師でよかったって思えるときってどんなとき?

わたし:子供って純粋だから、この大人どんな人なんだろうとか考えないで(先生!!)って来るじゃない!!それが力になる 教師のいいところは、体は疲れるけど精神的に癒される。仕事の中に自分のためになる時間が含まれているよね。

恵美子先生:そうね、あー明日仕事行きたくねーってならないね。いい時間を過ごすことができるよね。職業的に

わたし:ああ、もう授業だけやりたいって思う。授業だけやって子供とかかわる時間を増やしたい。。子供対私の時間を増やしたいなあ

恵美子先生:それもユミ先生のプライベートを充実させるための、もう一ついけるかもね。なんか違う空間に身を置く。。たぶんそれってすごく自分でスティックになっているときもあるじゃんね。そういうときに違う空間だけど充実できる時間ってのが必要かもね。

### 【自分の考え】

自分の考え：日本語教師の仕事は、子供と教えること、好きなこと二つが繋がる仕事その仕事ができる自分は恵まれていると思う。ただ移住地で日本語を教えることは人とのかかわりの面でストレスを伴う。

### 3. 結論・まとめ

#### まとめ

今まで、小さいころのいやな記憶と向き合うことを回避してきたのですが、今回動機文を書くにあたって自分が好きなことを探っていくと今の自分と昔の自分が出会ってしまった気がします。そして自分の性格や人柄、人とのかかわり方に小さい頃の経験が少なからず影響していて過去のトラウマ的なことを克服できていない自分がいることに気が付いてしまいました。一人になる時間をつくることは、人と関わるストレスを緩和して自分の中でバランスをとっているのです。一人になることが好きというよりも、一人になることが必要なのかもしれません。

#### あとがき

生徒達には、やいやい言いながら作文を書かせているにも関わらず、自分のことを文にしたのなんて、何年振りかわからないくらいです。「好きなことについて」動機文を書きましょうという一見簡単そうなテーマが、書こうと思うとなかなか難しいものでした。最初に書いた動機文は、単に旅行が好きだったものが対話の中での質問の答えを探していくと、もっと自分の中にあるものが出てきてしまう文になっていました。私にとって自分の中にあるものを表にだすことはけっこう勇気がいるものですが、対話活動を通して自分と向き合うことができたのはよかったですと思います。

#### メンバーのコメント

##### ☆動機と理由へのコメント

Hideo Hosokawa

本田さん、自由時間というタイトル、なかなかいいですねえ。「旅行が好きな理由で一番は、一人の時間がもてることです。自分のペースで、自分の好きなものを食べ、好きなところへ行き、気が向くままに行動できるこれが一番です。」本田さんが一人で旅する意味は、何でしょうか。気ままな自由は、本田さんに何をもたらしますか。それはあなたにとってどんな意味がありますか。

Matsuda Makiko

なるほど。自己開放への希求の理由はそういうところにあったんですね。サンフランシスコにいったことがあるのでよくわかります。興味深いです。コロナウイルス大丈夫ですか？ヤパカニで流行っていると聞きました。お大事になさってください

tsuruchan56

私もゆみさんのように、自分を主張せず人に合わせることが多いです。それは仕事上、皆さんの意見をまとめる立場だったりすると役に立ったりもします。でも… そうそう、それがストレスになることも多いです。だから、違うところでストレス発散が必要。「自分時間」いいですね！「自分時間」を過ごすゆみさんも、人に合わせるゆみさんも全部ひっくるめてゆみさんだと思います。

Alessandra Miyuki Hasegawa

人に合わせてしまうというお気持ちすごくわかります。私もよく仲間外れをされたので、自分に何か間違いがあるのだろうと、人と同じようになろうと無意識に人に合わせている自分がいます。人の顔色を窺っている自分がいるのにとっても疲れます。でも、旅行っていいですよね！ふらりと自分の行きたい所に行くっていいですよね！人に合わせたくなくて旅行で前にほかの人たちと訪れたことのある町にもう一度一人で戻ったことがあります。ふふふ。

☆対話へのコメント

☆結論・まとめへのコメント

# 「異国で生き抜くこと」を探究する

淀 暢好  
鶴田 広子

# 気分転換

—ペルーの日本語教師—

淀 暢好

## 1. 動機と理由

気分転換にユーチューブを見ます。好きなものを好きなだけ、すると、ユーチューブはお勧めの番組をどんどん紹介してくれます。これでは はまりますよね。テレビは視聴者すべてにお勧めすることはできません。一方通行です。しかし、フェイスブックやSNSはどんどん、利用者に寄り添ってきます。4次元の家族とでも言いますか。自分の好きな時間に好きな場所で、会うことができる。

ちょっとオタクっぽいでしょうか。犬が怖くて嫌いな私、でも、ペルーに住みだし、はや22年、なぜが家族のように犬と一緒に住んでいます。猫や魚や、ウサギも飼っていました。動物好きな妻の影響です。私も今では犬が怖いとは言わなくなりました。

犬も気分転換にはもってこいです。なでなですると喜びます。接するだけで心が安らぎますね。例えば散歩ですが、犬が行きたいようにすることも多いですが、危険なこともあるので、私が散歩コースは大体決めています。突然ほかの犬が通りの角から出てくると、近づかないようにコースを変えることもあります。

ただ、今はコロナウイルスのせいで、自由に外出はできません。

仕事もオンラインになってから、私の時間はますます、仕事や勉強に費やされるようになりました。外に出ないで気分転換するのは 健康的ではないと思いますが、今は仕方がないです。だから、なおさら、ユーチューブです。子どものときに大好きだった歌番組や漫画をこの年でも見れることは幸せです。ユーチューブは読書であり、映画鑑賞であり、テレビ鑑賞、日本語指導の勉強、教材作成など、趣味であり、頼れる先輩や仲間であり、ちょっと昔の世界とはずいぶん変わりました。じつは今も、ユーチューブでお勧めのジャズサックスを聴きながらこれを書いています。とてもリラックスしながら、そして、集中して書けます。気分転換、仕事の頭を勉強の頭に切り替える、趣味の頭に切り替える、ユーチューブは素晴らしいアイテムです。

### 自分の興味・関心とその理由

ユーチューブの機能や特性。世界中のものが数秒から数時間、またはライブ発信されたものを繰り返し視聴できる。好きなジャンルを見ていると、次々に新しいものが紹介されてくる。ニューメディアとしての社会性。そして、個人発信が可能なメディアで、興味深い物やテレビや映画、ドラマ、漫画が時代を問

わず視聴できる。このように昔を振り返りながらも、今現在も知ることができることに大きく興味を持ちました。

## 2. 対話－Hさんとの対話

・この人物を選んだ理由：

- 1)同じグループでディスカッションをした日本語教師。
- 2)インタビューの実施について理解がある。
- 3)同じような経験や好きなことがある人物なので、興味を持って、インタビューをしていただけるのではと思った。

### 2.1「ユーチューブ？」

Hさん:なんでユーチューブなのかと思った。

私:まず、きっかけについて話した。約3年間、体調を崩し、仕事ができなくなった。家に閉じこもり、ベッドの上でできることがなく、そんな時だから、気分転換になった。

#### 【自分の考え】

手軽で、おかれた環境での娯楽として、のめり込んだ。

### 2.2「日本語教師の仕事」

私:体調を崩す前の職場や仕事内容用の説明、どのくらい働いていたのかなど。

Hさん:忙しかった時に、どうして、苦ではなかったのか。どうやってそこまで日本語を教えられていたのか。

#### 【自分の考え】

日本語を教えるのが好きで、生徒達が成長していく姿や日本語を話しているが好き。そして、頼まれたことはできるだけやる。よりよい生活のためにも必要と考えた。

### 2.3「出会い」

Hさん:日本語教師になったきっかけは

私:外食産業での仕事についてと、ペルー人の妻との出会い。家族4人でペルーへの移住。そして、日本語教師の仕事を紹介された。塾長との出会いから日本語教師の世界に入った。

#### 【自分の考え】



日本語教師になったのは運命だと思う。できることを一步一步やった結果、そして、多くの日本語教育関係者との出会いが、現在も継続していける職業としての日本語教師になれた。

## 2.4「ペルーでの生活」

Hさん:日本語が軸になっているですね。

私:ペルーではなかなか、日本のように信用できない。それに、ああ日本人だと見られる。日本や日本人へのイメージ。何度も狙われたり、襲われたりした。家族や親戚や知り合いだけが、安心して付き合える。気軽な出会いやお付き合いはしない。警察も全く信頼できない。日本でレストランの勤務が、半年から1年で転勤があり、レストランの長として、部下たちと深い付き合いができなかったことも、今の人間関係に大きく影響している。

### 【自分の考え】

スペイン語が苦手な私にとって、学校をはじめ日本語教育の場は居心地がいい。日本語で勝負ができるから。

## 2.5「向上心の芽生え」

Hさん:日本語教師としての淀さんとは

私:汎米日本語教師合同研修での衝撃。ペルー以外の日本語教師との研修活動に参加。南米のポリビアで行われた研修会で日本語教育の専門家、新宿日本語学校の江副校長、難民受け入れ先の日本語指導の講師との出会い。南米で活躍されている多くの日本語教師との出会い、それと日本語教育指導法を学んだことにより、日本語教師としての資質の向上を目指すようになった。ペルーでは、家族も学校や日系社会では日本語教師の淀先生の奥さん、子どもと言われる。

### 【自分の考え】

日本語教師会に入会してから、ペルーや国外の日本語教育関係者との出会いが増えた。それは、ペルーの日本人や日系人の皆さんとお付き合いに傾いた生活になっていたのが少し改善されたと思うことである。

## 2.6「しかし、本当のペルーの生活には深く入っていけないままだとも感じている。」

私:なぜ、ユーチューブなのかを分かってもらいたかった。

Hさん:ストーリーが大きいと思った。人生を背負った背景があることが分かった。

## 【自分の考え】

気分転換が必要だった時期。今は、社会復帰しているの、以前より、ユーチューブを見る時間はかなり減りました。今後は健康のため、今とは違った気分転換を探すべきなのかと思う。

## 3. 結論・まとめ

日本語教師になれて良かった。何も知らないペルーで多くの出会いと経験をすることができた。どんな時も家族がいてくれてよかった。

そして、ユーチューブはこれから先も手放せない気分転換になりそうだ。

### 終わりに

今回対話についての活動に参加することによって、自分を振り返ることができました。自分が自分のことを書き、書いたことを見直し、新しい仲間と共有することで、新しい出会いの中で対話が数多く生まれました。出会いは対話の始まりですね。

### メンバーのコメント

#### ☆ 動機と理由へのコメント

Hosokawa

淀さん、YOUTUBEへの興味、よくわかりました。ありがとうございます。ところで、淀さんにとって、YOUTUBEとは何でしょうか。生活や仕事のツールでしょうか。「わたしの好きなものは…」という会話は、一種の情報交換にはなりますが、他者との価値観の交差にはなりません。淀さんにとってYOUTUBEについて語ることは、他者へのどのようなメッセージになるのでしょうか。別にメッセージなんかありませんという答えが戻ってきそうな気もしますが、それならば、なぜ私たちは他者とテーマのある対話をしようとするのでしょうか。ちょっと考えてみてください。

Mie Yokomizo

淀さんおすすめのYOUTUBERは誰ですか？また、どうして淀さんのテーマがYOUTUBEなのかまだわかりません。でも知りたいです。

Alessandra Miyuki Hasegawa

もし、このコロナウィルスの状況でYoutubeがなかったとしたら、淀さんにとってのYoutubeのような存在は何だったと思いますか？

@Alessandra Miyuki Hasegawa コメントありがとうございます。

気分転換に関していえばオンラインゲームですが、ユーチューブが無かったらということでしたら、テレビや映画やマンガですね。ただし、ユーチューブの代わりにはありませんが。

@nobu30ri

どうしてユーチューブの代わりになりませんか？

@Alessandra Miyuki Hasegawa アレサンドラさん、ご質問ありがとうございます。

代わりならないのは 見たい番組や知りたい番組が好きな時に好きなだけ見れないからです。

**☆対話へのコメント**

Alessandra Miyuki Hasegawa

インタビューを読んで、なるほど！と思いました。ユーチューブに求めるものは「日本語」なんですね。その気持ち、わかります。

**☆結論・まとめへのコメント**

Eriko Nakajima

研修などで出会った淀さんは、いつも裏表なくとても鋭いコメントをされる方だと覚えているのですが、文章からはやわらかい人柄が伝わります。ペルーで生きるという選択をされたことが、淀さんの生き方に色んな影響を与えているのだらうな、と思いました。この活動では個人的にあまり話せる機会がなかったですが、文章を読んでもっといろんな話が聞きたいと思いました！これからもよろし

Alessandra Miyuki Hasegawa

対話を読ませていただいて、ユーチューブと日本語の繋がり、そして、そこからの淀さんの日本語教師としての活動や環境が見え、「なるほど！」とずっと心に入ってきました。淀さんとは何度か対話を通して少しずつ文面だけでは見えないことも見えるようになり、嬉しかったです！

くお願いします。

# 近くに本が必要な理由

一心の根底にあったもの—

鶴田 広子

## 1. 動機と理由

私にとって本はなくてはならない存在だ。その理由は、母との温かい思い出から来ている。自分は無学だと嘆いていた母は、子どもにはいつも本が近くにある環境を作ってくれていた。まだ字が読めなかった幼い私に、母は家業や家事で忙しい合間を縫って読み聞かせをしてくれていたのだと思う。そして、それは私にとって忙しい母との温かで幸せなひとときだったのだと思う。しかし、母のそういう事情を理解できず、自分が読みたいときに読んでくれないことが癪に障り悔しいと思ったことを覚えている。そんなわけで、私は自分で読もうと決め、就学前には字を覚え好きな時に本を開き読めるようになっていた。木箱の粗末な本棚には絵本や物語本だけでなく小学生用国語辞典も置かれており、わからない言葉があつて尋ねると「お母さんは分からないから字引で調べて」といつも言われたものだ。

思い起こせば、私は幼かった頃、よく微熱を出していた。おなかが痛い、頭が痛い、脚が痛いなどと言って、その度にかかりつけ医の所に連れていかれた。医者診断は特になく、かんの強い子だからと言われていたらしい。その「かん」は、敏感の感なのか、勘が鋭いの勘なのか、癩癩持ちの癩なのか…おそらく癩癩の癩ではなかったかと今は想像する。そして、そんな私が逃げ込む場所が本の世界だったのではないかと思う。なぜなら本は母につながるものだったから、その世界に入り込むと安心でき、癩の虫もおさまっていたのではないだろうか。

それで本は私にとって常に近くになくてはならない存在となった。常に本を携帯している。スマホは忘れても平気だが、本を忘れると落ち着かないのだ。なぜなら、このブラジルという刺激の強い異文化の中で生活する私にとって癒しとなっているからだ。この土地で生活することを自ら選んだ私だから、この地の人々の行動・考え方を尊重しようと努力はするが、自分とは違うと感ずることが多い。それは場合によっては楽しい刺激となるが、反面、違うということを受け止め理解しようとするに結構疲れている。そこで、癒しである本の世界に身を置きたくなる。もしかしたら情けないことに、子どもの頃からの「かん」は治まっておらず、還暦を迎えた今でも、本の世界で「かん」を治めようとしているのではないかとふと考えた。

私は、人が幸せに生きるコツは毎日を感謝して生活することだと信じている。そこで、「かん」に振り回され不平不満が溜まって感謝ができなくなるとは困るのだ。そのためにも本を近くに置いて、感謝できる日々をこれからも送りたい。

また、周りの人たちも幸せに生きてほしいと願う。だから、私にとって安心できる場所が本の世界であるように、私自身も誰かの安心できる場所になれたらいいなと願う。そんな場所になるためにも、私にはやっぱり本が必要だ。

## 2. 対話 - 私の先生との対話

・この人物を選んだ理由：日本語教師養成講座のときの講師であり、卒業後は一緒に仕事をさせていただき、それからずっとのお付き合いで、今ではブラジルのお母さんのような存在だ。感じたことを率直に話して下さる方なので対話したいと思った。

### 2.1. 「日本人という意識」

先生：一番言いたいのは幼い時にお母さんが本の環境を作ってくださった。そして、ブラジルに来て日本人とは違う相容れないものを感じる。それは私にもあるのね。

私：あっ、先生にもあります？

先生：あるよ、私も長年住んでいるけれど、日本人だからね。地下鉄に乗ったときに一番感じるのね。孤独感。周り全員ブラジル人でしょ。周りに知り合いはいないし、すごく寂しい気がするのね。孤独感があるの。だから地下鉄の中にいると今一人だなと感じるの。もうブラジルに来て60年になるのだけれど、やはり違うなと感じることがあるの。だから鶴田さんも同じようにそれがあって、それを癒すというか、それに本に逃げるということかなって。これを読んでも気持ちが変わるのよね。

先生：ブラジルに来て、何年なるの

私：かれこれ20年です。

先生：ああ、もう20年か…それで何に慣れないの。

私：慣れてはいると思うんです。楽しんでもいるんですけど…。なんか違うと感じて。

先生：ああ私と同じね。結婚する時にどうしても2世の人と結婚したくなかった。なんか日本人とは違うのよね。感覚が…

私：そうですよね、なんか違うんですよね。「つうと言えばかあ」という感じではないんですよね。

先生：そうそう、どうしても受けつけないのよね。それと同じで、どうしてもブラジルを受けつけられないのかね～？

私：受けつけないんでしょうかね～？それとも～？

先生: やっぱり育った環境というのはすごく人間、人生にね、育つ環境はその人が、感化されるよね。やはり日本で育った人はどこか違うのよね。なにか相容れないものがあるのよね～。

私: う～ん? 仲良くはできるんだけど…

先生: そうそう、けどどこかがすれ違うというかね…

私: だからそういう部分、苦しいのか悲しいのか腹が立つのか、なんなんでしょうね。

先生: 人によっては日系人でも、いい人だけど違うものを感じて、本気で本音で付き合いえないとか、付き合いがないってことがあるのよね。相手も日本人に遠慮して言わないとか…。(相手にも) 気の毒なんだよね。鶴田さんは、そういう人に囲まれて仕事をしているから、いろいろと大変だし、苦労も多いんじゃないかな。知らず知らずのうちに気を遣って、仕事しているんじゃない?

私: いえ…それは、かなり意識してかなり気を遣ってます。それでも「えっ! ?」ということも度々あって…大変ですね。

## 【自分の考え】

話は思いもしないところから始まった。本のことではなく異文化の環境で生活することの話だった。そこで、N先生が「私は日本人だから」という言葉をはっきり、きっぱりと使われることが衝撃的だった。私はブラジルで生活を始めるようになって自分が日本人だということを意識しないように、そしてその言葉は使わないように努めてきた。そうすることが、この地の人々と人間関係を築き仕事を生きるために必要であり、そうあるべきだと考えていた。しかし、先生との対話を通し、日本人ということを意識しないように努めてきた私だが、やはりどこまでも日本人だということがはっきりした。そして、かなり無理をして自分の心をごまかしてきたのではないかと気づいた。

## 2.2「無理をしている自分」

先生: 本に種類が書いていないけれど、鶴田さんは、本は何でもよいと思っているんだろうなと感じた。

私: そうですね。本がなかったらチラシでも何でもいいのかもかもしれませんね。なんでもいいんです。

先生: とにかく本があれば自分が落ち着く。物足りないものに本に逃げる、本を頼りにする。ブラジルに来て、親戚もいなくて、子どもを抱えて、でも頼る人がなかった。ブラジルで生きていくためには大変なことだった。そのためには本が絶対に必要だった。その環境はお母さんがつくってくれた。その思い出はお母さんだった。

日本人はどこかブラジルの社会に生きてきて…100%満足にはならないと思うよ。自分の子供でもやっぱり2世だなと感じる。例えばね、お葬式に行くのに、日本人はお金を持っていくで

しよ。息子たちに言わせれば、「こっちが、わざわざ行ってやっているのに、なんでお金を渡すの？」なのよ。だから、「あなた達の時代になったら、そうしたらいいよ。でも私は日本人だからお金を包むよ」って言うの。私は日本人だから、子どもはブラジル生まれだからコチラには合わせられない。無理にはできない。こっち生まれなんだから。無理にブラジル人を理解しなくてもいいんじゃないの

私:そうですね、理解しようとするから疲れるんですかね～。

先生:でも、職場でその中に身を置いた鶴田さんはつらいだろうと思う。

### 【自分の考え】

先生は私と本との関係を私の生きてきた背景から来ているものとして捉えられている。本の世界は母との温かい思い出に繋がり癒しとなる。考えてみれば、全くその通りで今までの人生が大きく影響している。本来、敏感で弱い自分が、しっかり生きなければと思い、無理無理生きてきた私にとっての癒しを与えてくれる本の存在だ。そして、自分がブラジル社会に適応し生きていくためには、なんとかしてブラジル人を理解することが必要だと頑張り疲れた時に逃げ込む世界だった。「無理に理解しなくてもいいんじゃないの」という言葉が心に沁みた。そもそも自分の持っている狭い世界の中で、理解しようとするのは無理なのかもしれない。理解して自分の中の落ち着く場所に無理やり消化させようとしていたのではないかな。消化できなくても理解できないところがあったとしてもそのままを受け止めること、違いを認めること、そしてそれでも共にいることが貴重なことだと思えてきた。

## 2.3「異なる人との関係」

先生:最近の世の中は、人間自体が変わったよね。

私:そうですね。だから、もしかしたらブラジル人だけではなく、日本人でも相容れないものがあるのではないですかね。

先生:そうね～、特に私らは古い人間だから…。

### 【自分の考え】

そうだ！人種には関係なく、自分と異なる人間を相容れることは難しいことだが、とても大切なことだ。だから悩む。きっとこれからもそのような難しさに多く出会い悩むのだろう。しかし、これからは無理に理解しようとすることは止め、そのままを受け止め共にいることができるように努力していきたい。

## 3. 結論・まとめ

この動機文を書き始めたときは、「本が好きだ」というテーマだったはずなのに、グループでの対話を通して、私は実はそのことを書いているのではなく、もっと根底に何か訴えたいことがあるのではないかと感じていた。そしてインタビューが思いがけない話から始まったことで、気づいたのは異文化環境で生活す

ることの葛藤だった。日々見ないように流してきた心の深いところの気持ちを表せたことで、これからも本を近くにおきながら、もっと楽にもっと楽しく、異なること、異なる人との共生ができるのではないかと感じている。動機文を書き、対話を重ねることで得た気づきは、これからの私にきっと良い影響をもたらすに違いない。

## メンバーのコメント

### ☆ 動機と理由へのコメント

Hideo Hosokawa

「本のページを開くと、周囲とは違う世界に身を置くことができる。」「いわば本の世界で守られたシェルターみたいなもの」それがご自身の「生きていて良かった！」レベルの幸福感につながる、これが鶴田さんのメッセージでしょうか。鶴田さんにとって本というものがどういうものであるのかはよくわかりますが、そのことを語ることで他者へどのようなメッセージを送りたいのかがややあいまいですね。自分の中にテーマを持つことは、おのずと自分の立場を発信することになります。それに対して、他者とのさまざまな連携も生まれるように思うのですが、いかがでしょうか。

Alessandra Miyuki Hasegawa

Zoomでお話しましたが、鶴田さんの本に対する感じ方と私の感じ方は大分違うなと面白く聞かさせていただきました！鶴田さんにとっては「本の世界で守られたシェルターみたいなもの」、私は本の世界へ行っても、本のどこかの部分を自分の世界に持って来ようと狩りに行っているような感じです。笑

Mie Yokomizo

心に癒しをもたらす本や生きていてよかったレベルの本のタイトルや内容や傾向を語らずにいられるのはなぜ？どうしてですか？

### ☆ 対話へのコメント

### ☆ 結論・まとめへのコメント

Eriko Nakajima

大人になってから海外に定住すること、自分の中にある大切な価値観を守るとはどういうことか？、どこにいても時代の流れとともに変わる人の生き方を受け入れるとはということか？、など色々考えさせられました。ブラジル日本語センターにいと色々な人が出入りされて、日本語教育に対する考え方は世代や教育背景や生きてきた場所で全然違って、まとめ役となるのは大変だと思います。そんな時に本が支えになること、よく伝わります。私もそうですが、一つの好きなことから、自分を見つめる作業ができるこの対話活動はすごいですね！！また色々とお話を聞かせてください！

Matsuda Makiko

私も読みました！「気づいたのは異文化環境で生活することの葛藤だった」素敵な気づきですね。私もそうですが、何かしら当初想定していなかった気づきがありますよね。おそらくそれはもともと自分の内側にあったのですが、普段漫然と生活しては見えてこない。対話的活動とはそうしたものに心を澄ます作業なのかなと思います。私は最近本当に自分の楽しみとしての読書をしていないなあと思います。研究書や論文ばかり読んで、、、(まあ、それも好きなことの一つなんですが)、建築雑誌読みたいなあ。

Juana Horikawa



本がホットするのは意味があったんですね。日本人と2世は違うとく2世がわから聞いていたので日本人がわから聞いて改めて考えさせられました。

Alessandra Miyuki Hasegawa

違うということは、緊張感が続いたりしますよね。それを本の世界でホッとしていたんですね！私は鶴田さんとお話している時に、とても柔らかい雰囲気でご包んでくださる方と感じ、葛藤には気が付きませんでした。お母さんのような存在の先生には、もう見えていたんですね。鶴田さんとまたもっとお話ができる機会があったらいいなと思います！

# アイデンティティ探究

長谷川 美雪  
堀川 るみ

# アイデンティティのことを考える

堀川 ルミ

## 1. 動機と理由

アイデンティティについて皆はよく考えるのだろうか。

私の両親は、幼い時 祖父につれられてパラグアイに移住し勉強もできない貧しい環境で育ったそうです、でもその中、自主的に学習したそうです。

苦勞した両親は日本人とパラグアイ人をよく比較し、日本人は努力家、働き者、良心的だといつも言っていました。私はパラグアイ人であると言い両親とよく口論になっていました。

しかし、高校卒業して日本に10年住むことになった私は、自分の中にも日本人の血が流れていて自分のルーツは日本にあると感じることが出来るようになりました。20年近く自分のルーツを否定して生きてきた私はそれを受け入れることで日本人のいいところなどを受け入れることができずごく楽になりました。

パラグアイに帰国した後、エンカルナシオンという町で教員をしていたころ娘が生まれました。彼女が生まれた時、田舎にいる母に預けて週末だけ会いに帰っていました。ダブルの娘は、初めは髪の毛が黒く日本人の顔だったのですが、3年ぐらいたら茶髪にかわってきました。娘が3歳になった時私も日系人移住地に引っ越し一緒に暮らすようになりました。

娘に対する他の人の言動を通して、またアイデンティティのことを今までより深く考えるようになりました。例えば、母が、娘とスーパーに行ったとき「この子は日本語を話すの」と聞かれたそうです。母は、「私が育てたのに、スペイン語を使うわけがない」と思ったそうですが、他人から見る娘の顔と使う言葉がいつかしなかったみたいです。その気持ちは、よく分かります、私自身 幼い時から日本語で話してきた日系人の友達には日本語だけで話すのに日本語を話すパラグアイ人がいてもスペイン語でしか話しかけなかったからです。娘も話し始めた時から日本人か、パラグアイ人の顔と判断をして言葉を使い分けしていました。

あと、娘が4歳ぐらいの時「鏡をみて私は、パラグアイ人の顔いやだ」「黒い髪がいい」と言いました。誰も何も言っていないのになぜそのようになったか分からないです、でも通っている幼稚園が日系人のなのでその影響かもしれないです。またある日、茶髪に染めている日本人を見かけた時、「ああ ハンナと同じ髪の色」と喜んでいました。幼いながら孤独感を感じているかも知れない。「パラグアイ人の顔とその髪かわいいよ」言い聞かせるようにしています。

アイデンティティは、もって生まれるかもしれないが環境がつくっていくのかもしれないと毎日 娘を通して考えさせられます。

## 2. 対話 - 藤田ラウンド先生との対話

・対話の相手：藤田ラウンド先生

・この人物を選んだ理由：現在、宮古島の文化を取り戻す研究されているので、どうしてそれをされているのか感心を持ちました。またそれもアイデンティティにつながっているの思ったからです。

### 2.1「アイデンティティとは」

堀川：ラウンド先生の体験、経験から私の方がいろいろ聞きたいと思って。

ラウンド先生：そうですね、私ちょうどこういう授業をやっているの、ちょっと、授業でなくて対話、会話っていうか、前、ある意味ルミさんは私のもと学生みたいな感じだからでねJICAでね、私もちょっと言語発達のことも教えていたので今改めて読んで ルミさんはあのうご自身のアイデンティティと娘さんのアイデンティティをどう違うと思いますか。

堀川：私のアイデンティティーその環境と育ちが全く変わると、その悩みが違うのかと思って、私悩み始めた時にはパラグアイ人のなかに入っていたんですよ、なので一人の日本人がパラグアイ人のなかに入っていて、娘は逆になるっていうか日本人は入ってるけどハーフもいるけど日本人の移住地で育つとすごい違う悩みが出てくるんじゃないかなって思うんですよ。それがあの

ラウンド先生：あの

堀川：その

ラウンド先生：どうぞ

堀川：あのよくパラグアイではアイデンティティーの悩み日系人の中で出されたんですよ、出たんですよ、それで自分は日系人だからアサードも食べられるしおにぎりも食べられて2ついいところどりできるから自分達は幸せだという方向もなんかみんな進んだんですよ、今の若い人たちっていうか それを小学校から教えてるみたいだからそれ悩むことになるからなんかあれだから、でもその私ダブルの悩みは聞いたことなくってあつこういうふうに徐々に違うんだなって娘を見て思うんですがその娘そのは茶髪でみんなと違うし自分は日本人の顔してないって言ったりするから。

ラウンド先生：なるほどね、例えばパラグアイは分からないけどブラジルとか前アルゼンチンの方から聞いたんですけど今だに日本ではハーフって言うんだけど混血って言葉を使ってるところもあるって聞いてますけどパラグアイでは、どうですか、

堀川：んん直接本人に言わないからよく分からないですね、んん私もそのうちの母の世代が聞きますけどその人下には聞きません、その言葉 そっから聞いたことないですね。

ラウンド先生：なるほどねまあでも逆にいうとおばあちゃん達の世代だとまだ混血ってことが使われているわけですよ。

堀川：そうですね

ラウンド先生：その言葉 娘さんの耳にも入るといことですよ。

堀川：入ることはないです。

ラウンド先生:入ることはない、そうですか、私は 親として絶対混血って言葉は自分の子供達に使って欲しくないかったのだから私自身がまず藤田ラウンドって大人の私が実際にハーフではない私が使うことでこの二つの名前が重要なんだって他の人にまず伝えようと思ってなんですねだけど沖縄に行ったら沖縄の人たちっていうのは結構今でも混血って言葉使うんですよ普通に、

堀川:おおでもそれは

ラウンド先生:だから

堀川:本人たちの中でそのなんというかって自然と、それとも分けるために使う言葉なんですか、なんていうんですかねdiscriminacion

ラウンド先生:いあ 本人たちじゃなくて

堀川:discriminacionっていうか日本語で何て言うんですか

ラウンド先生:ああ偏見ですか。

堀川:偏見ですか。

ラウンド先生:ううん えっとね 偏見というよりもあの沖縄の人たちはええ沖縄っていっても沖縄島 沖縄本島の人たち基地アメリカ軍基地があるのでだからアメリカの兵隊さんと日本人の女性がたくさんまあ結婚してそのそこで特に黒人の人と結婚した人たちのこと子供達は混血児ってちょっと下にみられていたこれ偏見よりももっと差別にかなり近い形で。

堀川:ああ

ラウンド先生:あの混血って言葉が使われてきたんですねながらそれを見ているおばあちゃんたちが今ではあのとくに黒人 ゆうしょく人種の日本人には見えない白人の人には混血って言葉はあまりもう使わなくなったけどこうやっぱりちょっとこう浅黒い人と肌の人とかあのくるくる髪の毛が天然パーマになってるとか やっぱり外見上で分かる人はちょっと混血って言葉が出てきますね

堀川:ああ

ラウンド先生:だからその社会的なちょっとスペイン語では何て言うかわかんないけど日本だとステイブマン社会的なその偏見とはべつだからそれはあのハーフって言うと言って聞こえは良いんだけどねだからといって二つのあの国や言葉を持っているというアイデンティティーを肯定しているわけじゃなくてなんかハーフっていうことで自分とは違うって切り離しているようなたまにはちょっとそういうせつないような正義さき私にはそのちょっと思えるんですね。

堀川:あああ

ラウンド先生:えっとねあのつまりそのええアイデンティティーって社会からどう見られているのかってすぐその人にとってプレッシャーになるじゃないですか。

堀川:なるほどね-そういうことなんですか。

## 【自分の考え】

長い間 自分は何で自分は誰なんだ、また娘がアイデンティティのことで悩むのかと思っていたが、対話をしていたら1つの言葉を通して何か深い意味を考えさせられた。また、その言葉を知ることによって少し世界が広がり考え方を換えられるとも思われた。例えば:ラウンド先生が言われた「アイデンティティは社会からどう見られているかのプレッシャーであること」これを解決するには自分に自信をつけることが大事だと思われた。

## 2.2「偏見、差別、謙虚」

ラウンド先生: だからあのその本人がどう思うのかってもそうなんだけど、んで小さい頃はそんなにあのーそれが自分の中に残らないけどでもやっぱりあの小学校あがるぐらいから子供達もだんだんとなんで私だけなんでなんかこう別に問題抱えているんだろうみたいなそういう社会社会から見た時にみんなと違うってことがやっぱり自分にとっては嫌だと思うように小学校じゃないのかうちも四歳ぐらいからやっぱりそういう言っていましたね。

堀川: ラウンド先生のお子さんも、その髪の毛の色とか違うですか。

ラウンド先生: えっとそうですね、ん髪の毛の色もんんの子はそうじゃないけど下の子はやっぱり少し茶色くて骨格が日本人ではないあとすごく身長が高くてすわりとしてるから身体的にはちょっと日本人とはちょっと違う、だからやっぱり彼女が安心するように私は保育園三才ぐらいの時から私髪の毛を茶色くしていたんですよ、彼女の色に近い

堀川: んんん

ラウンド先生: それはやっぱり3歳ぐらいの時になんでお母さんの髪の毛と私違うのって言われてわそこであーそっかやっぱりそういうふう思うんだたら私が出来ることだたらと思ってだから彼女が4歳保育園に行っていたころだから3, 4歳の時からえええっと小学校卒業ぐらいまで私とずっと髪の毛を染めていましたね、

堀川: んんん私の娘が通っているところはまだ2, 3人いますけどね、んま 逆にお母さんが金髪でお父さんが日本人っていうのがあって 内の場合父親がいないから見えないから、で 今お仕事されている中でええ いろいろ文化とかもう一回沖縄のことを大事にしようと今フェリックスとかいろいろ出されていますよね、そういうこと本人たちはそれを通してその まあ言語とか 言葉とかいろいろもう一回取り戻したら何が変わっていくんですか。

ラウンド先生: 自分の尊敬 あの私が今やってる宮古島が宮古島はあの沖縄本島から 飛行機に乗って40分もつとはなれているんですよ、で沖縄の高校までしかないから宮古島の子達は高校卒業すると1番近いその飛行機に乗って40分かかる沖縄本島に大学とか就職したりまたはあの本島東京の方に3時間半飛行機でかかるんですけどまあ就職か進学するんですね、あのう東京に来ててもそうだけど沖縄同じ沖縄県なのに宮古島の子たちは沖縄本島に行くともまず差別されるんですよお前は田舎者だ

堀川: えええ

ラウンド先生: でそれでその子たちだから二十差沖縄でも沖縄本島でも差別されて、で沖縄本島でも差別されているのにまた東京に行ったらさらにお前ちょっとなまっているよって言われてそういう社会的なあのやっぱり日本の同調圧力っていうのがなんかあのすごくある意味こうアイデンティティ形成にマイナスになってるっていうのはそれはずっと私は考えてますね。だからそれを取り戻すためにもっと宮古島のいいところを知ろうとかそういう教育をしましょうって言って小学校の先生たちに提案をしてこんなに美しい海は沖縄本島よりきれいだし東京にはこんなきれいな海と空はないよとかだからその自分の尊厳センフェスティーンを高める教育が必要なんだといつも言っています。

堀川: んんんん

ラウンド先生: 逆に言うと今東京私がフェースブックでやって宣伝しているのは東京の人はもっと謙虚もうちよつとほかの人のことをちゃんと聞くマイノリティの人もそうだしなんかちよつと自分とは違うからって区別するんじゃないでなくて相手の良いところを見て相手の意見をもっと聞きましようっていうことを東京今ちよつと東京でやってるだから今の大学でやってるんですね。

堀川: あああ素晴らしいそのその先生ががそこを気にされたその根拠とはなんですか。逆にごめんなさい、私がインタビューして。

ラウンド先生: いろんな言い方がありますがあの例えば人権一人の人が生きていくうえでやっぱりこう対等になるってのが重要だしあとやっぱりそのほかの人を低く見るっていうのはそれは非常にこれは偏見を持つことになるでしょうだからそうじゃなくて一緒に同党なんだってまずわかって欲しいな一って思ってたので なんでマジョリティ側の人たちにもう少し ようく相手の意見を聞きましようって言った感じコミュニケーションですよね異文化をどう理解するか、マジョリティーの人にはそうだしマイノリティの人達にはもっと強く自分を尊敬するような知識と力を身につけてってよく言います。でもこれってハーフの子供達もちよつと似ているところがありますよ、日本の社会の中のマイノリティあのパラグアイにいるからもしかしたら娘さんそれを感じないですんだかも知れない今パラグアイにいるから大丈夫かもしれない パラグアイ中南米はやっぱり移民の国じゃないですか、だからそういう意味ではすごく言語だけではなくて文化もそれぞれあるでしょう、そこがちよつと違うと思う。

### 【自分の考え】

私は幼い時にどうしてアイデンティティについて悩んだのか少し分かるようになった。パラグアイ人の中で育った自分がマイノリティでパラグアイ人がマジョリティであったことなど、今まで正直知らなかったです。なんだかすっきりした上、親が子供に寄り添っていく必要があることもラウンド先生の対話中で思われました。そして、この偏見、差別、謙虚を娘や自分の生徒達にも教えていけないといけないと思いました。

## 3. 結論・まとめ

私は、幼いころから考えるのが好きというより、、どうして、どうしてそんな考えをするの、どうしてそんなことを言うの、それはどんな気持ちなの、などなど考えてしまうことが多かった。考えるのが多いと答えのない世界で迷っているみたいでひたすら勉強か仕事に打ち込んでいた。でも、この対話テーブルに参加させていただいて、対話文を書きインタビューをする活動を通して思ってもいなかったことに気が付いた。私は、本当に悩んでいることや思っていることを誰かと対話をせず考えすぎていたこと、また未知なことに対して深く調べて行動をしていなかったこと。

対話テーブルに参加させていただきありがとうございました。細川先生の指導方法初めて経験させていただいて本当に良かったです。正解がないと言われることで自由に書けたと思います。

### メンバーのコメント

#### ☆ 動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko

衝撃的な内容です。マジョリティのはずのパラグアイ人が、ピラポ移住地だとマイノリティになるんですね。特に子供は世界が小さいでしょうし。。。アイデンティティとは、自分の世界をどう描き、どう位置付けるかなんですかね。。

#### Hideo Hosokawa

堀川ジョアナさん、ありがとうございます。ご自身と娘さんを通したアイデンティティの問題、とても感動的です。この課題は、要するに、アイデンティティとは何かというテーマだと思うのです。松田さんも、「アイデンティティとは、自分の世界をどう描き、どう位置付けるかなんですかね。。。」と書いていますが、私たちは、常に複数のアイデンティティを持っていて、それはその都度その都度の他者とコミュニティとの関係によって変化します。ジョアナさんの語るアイデンティティは、そのなかのひとつであることは間違いないのですが、それ以外のアイデンティティについてはどうお考えですか。答えは一つではなく、いろんな答えがある、こんなふうを考えることで、世界の見方も変わってきませんか。

#### Alessandra Miyuki Hasegawa

「アイデンティティ」というテーマは、私もよくぶつかるテーマです。私があるテーマにぶつかるのは、他者に自分が何人かを伝えようとする時と、疎外感を感じて自分の居場所を感じられない時です。とある時は、相手の希望に応えようとしている自分さえいます。ジョアナさんのご自身のアイデンティティに対する悩みはどういった感じで解放されたのですか。それは徐々に消えていったものですか？それとも何か確固たる瞬間があったのですか？

#### Sandra Terumi Suenaga Kawabata

私、ルミさんたちが住んでいる日系移住地に行ったことがあります。ルミさんの娘さんにお会いしました。ハンナちゃん、茶髪ですごくかわいいです！ルミさんは今後、ハンナちゃんの成長を見守りながらアイデンティティについて考えていくと思いますが、ハンナちゃんも大きくなるにつれて自分のアイデンティティについて考えるようになるんだろうな、と思いながら文章を読みました。今は無意識で「パラグアイ人の顔はいやだ」自分の髪の色に染めてる人を見て「ああ ハンナと同じ髪の色」と喜んでるように思います。今後、どのように成長していくのでしょね。ルミさんは私の友達です。私にもハンナちゃんの成長見守らせてください。

#### Mie Yokomizo

私はよく友達や同僚に、日本人というイメージを覆す「日本人」と言われ、それを好ましく思っています。いい意味の人もあるし、そうじゃない人もいでしょう。でも、もう大人だし、人の意見のようなものは私の根底を揺るがしません。でも、ハンナちゃんは子供で、周りの環境やお母さんの言葉や態度がすごく今のところ影響すると思います。だからるみさんがハンナちゃんを褒めることはすごくいいなと思いました。サンドラさんのように、今は無意識でまだ見かけのわかりやすいことから他と比較しているのかと思います。私がハンナちゃんだったら、髪は茶でも赤でも白でも黒でも青でも何でもかわいいとお母さんが伝えてくれたらうれしいなと思うんじゃないかな。とか、るみさんは青は褒めないかな？とかいろいろ想像しています

#### ☆対話へのコメント

##### Alessandra Miyuki Hasegawa

わー！ジョアナさんの「ラウンド先生が言われた「アイデンティティは社会からどう見られているかのプレッシャーであること」これを解決するには自分に自信をつけることが大事だと思われた。」という部分にとっても共感しました。

#### ☆結論・まとめへのコメント

##### Alessandra Miyuki Hasegawa

アイデンティティというテーマは私も敏感に反応してしまうテーマです。でも、前にも書いたように、「アイデンティティは社会からどう見られているかのプレッシャーであること」これを解決するには自分に自信をつけることが大事だと思われた。とジョアナさんが書かれているのを見て、私も共感し、頷きました！



# 学びと私 / 居心地良さの探求

長谷川 アレサンドラ 美雪

## 1. 動機と理由

私は学んだり、人の話を聞いたりするのが好きだ。身に付くかは別として、学習意欲は豊富にあるような気がする。その意欲はどこから来るのか、少し内観してみた。

私はブラジル日系人2世である。育ちは日本。その後、思春期から成人になるまでは日本とブラジルの間を行ったり来たりした。私の学習意欲に関する事だけへの影響を与えただろうことに焦点を置くのであれば、習い事がしたくても共働きの出稼ぎの両親はいつも残業を2時間程してくるので、送り迎えが出来ず、習いたいピアノや剣道が習えなかったり、中学生になって塾に通いたいと思ったが、お金を貯めるのが目的の生活では月謝が高すぎて通えなかった。そうこうしているうちに、ブラジルへ帰国。ブラジルに戻ったら、今度はポルトガル語が出来ない。学校に行っても授業内容がはっきりと分からない、クラスメートとの会話さえままならない。言語のせいだと分かっているけど、言いたいことを表現できないと自分がすごくみじめで馬鹿な人間に感じた。

父の配慮からか、私はブラジル以外では国籍でブラジル人と呼ばれるため、自分はブラジル人だと言われて育った。でもブラジルに来るとブラジル人だと思っていた自分はブラジル人でもなく、日系コミュニティに行っても自分は日系人ではなかった。思春期真っ只中、気難しい自分が更に気難しくなっているのを感じた。日本へ二度目に渡った時、今度は自分も出稼ぎとして行ったので高校を中断。日本で周りの同世代の子たちが華やかに(そう見えた)制服を着て通学しているのが私はすごく羨ましかった。

そんなある日、元々興味があったファッション雑誌を手にとってクリスチャン・ラクロワというデザイナーのオートクチュールのファッションショーの写真をみて鳥肌が立った。「すごい、ファッションがこんな風に誰かを感動させるなんて。」と思い、ファッションの勉強がしたいと思い立ったのが15歳の時。その「ファッションの勉強がしたい」という気持ちが色々な事に直面していたその頃の私を支えてくれた。

実際に大学ではファッションを専攻し、とても楽しかった。自分の「学び」に対する執着は、今までの「学び」に対する飢えから来ているのかな、と思う。でも「学び」は私をいつも励ましてくれた親友でもあるのだ。両親からも「学び」を強制されたことは一度もない。

今、日本語教師として自分は「学び」を与える側にもなっている。その際に、生徒たちの日本語の学習進捗よりも心の進捗状況の方を気にしてしまう。自分と重ねて見るのはよくないが、日系、非日系関係な

く、生徒と自分を重ねて見てしまう。私は長い間、自分を受け入れずに生きてきた。そのため、自分で自分をたくさんいじめてきてしまった。生徒たちには私のような歪んだ考え方をせずに、自分で自分を知り、受け入れてもらいたいという願いがある。

でも、そこで気づくのは、それぞれが違う人間だということだ。覚え方、学習スピード、考え方やものの捉え方、全てが違う。日本語の習得に関しては、試行錯誤すればその生徒が理解しやすい道が見つけられると思っていつも授業を準備している。各生徒にカスタマイズすることは時間が許してくれないため、なかなか無理だが、力を入れた分だけ伸びる彼らを見るのは本当に言葉にできない充実感がある。私は何より「ほら、こんなに覚えたね！」と本人たちに気づかせるのが大好きだ。自分の伸びに気づいた生徒のその後のモチベーションが全く変わるし、生徒たちに「自律」して取り組むことを覚えてもらいたい。一人一人が違う、だから私は毎学期、通信簿を渡すときは一人一人を教室に呼んで対話する時間を設けている。フィードバックは日本語習得に対することだけではなく、日常やイベントに参加したときなどの行動へのコメントなんかもするようにしている。彼らが学んでいるのは日本語だけではなく、それ以上のものが一緒に詰まっていると思うからだ。

だからこそ、私がいつも頭を抱えてしまうのは、日本語以外の彼らの人間的な所だ。何か家庭の事情で浮かない顔をしていたり、イラついている子や、友達と仲違いし、疎外感を感じ、もう学校に来なくなってしまった子。完璧主義でテストで95点も取ったのに、後5点が足りなかったからとテストをビリビリと教師の前で破く子。自分はすごくできると思って周りの子を馬鹿にしてしまう、でも自分が注意されると癩癩を起す子。自分はデブで不細工なんだよ、と自分を卑下する子…。もちろん、そういうことばかりが起こるわけではないが、こんな時、もっと自分を知って、もっと自分と仲良くしてもらいたいと願ってしまう。私が彼らの年齢の頃、言語ができないということよりも、現状を前向きに捉えることができず歪んだ方ばかりに考えてしまう自分にすごく苛立ちを覚えたからだ。自分と仲良くできれば、世界とも仲良くできるような気がする。

そういうのを目の当たりにしていると「性格」、「個性」、「アイデンティティ」というようなキーワードが私の中に出てくる。それらが人間をもっと向上させるキーワードのような気がする。集団の中には「個」があって、「個」を尊重してこそ集団が機能するのではないのだろうか。でも、私たちはいつも誰かと見比べてしまったり、相手に同じことを求めてしまう傾向があるような気がする。自分は今、微々たるながらも人に影響を与える立場にいるため、人についてもっと学びたいと思う。何よりも、私もまだまだ自分自身を知る必要がある。

そしてそれらを英語で学びたいと目下思っている。もっと色々な情報を手に入れたり、人の話を聞ける可能性が広がるからだ。そう思うとワクワクが心から溢れてくる。

## 2. 対話—長谷川美雪—福島青史

対話の相手: 福島 青史先生

この人を選んだ理由:

福島先生とは、私の住んでいる地域の日本語教師合同研修会でお会いしました。その時に、私が移動の多い人生を送りつつも「成功のケース」というお言葉を頂きました。喜ぶべきお言葉だったのかもしれませんが、「成功」という言葉に違和感を持ち、心の奥底から喜べない「成功」について悶々と考えました。「移動する大人」であって「移動する子ども」の親でもある福島先生。きっと私の視点からは見えないことが、たくさんの世界を見てきた福島先生の頭の中にはあるんだろうなと思いました。今学びたいと思っていることについて考えるきっかけを与えてくださった福島先生と対話したいと思いました。

## 2.1「私はなぜ学校に通う事を断念しなかったのだろうか、そして成功体験というもの。」

福島先生： 僕はそうだな、成功っていう言葉はあまりいい表現じゃないからね、成功があるってことは逆に失敗があるってことだからね。

わたし： なんか、いろんな世界を見てきているので、多分先生の中での成功の定義があるんだろうな、私の見えないところでいろんな悩んでいる人たちを見てきているんだろうなと思って

福島先生： 成功っていうかね、なんか稀なケースだなんていうのは、なんか、いろんな難しい状況があるってことで、私は私の中で成功っていう表現を使ったかどうかわからないんだけど、それを自分の研究ではね、教育学の中では、ある分野での成功と失敗じゃないですか。

わたし： はい、そうですね。

福島先生： 今ある日本社会の枠組みで高校に行ける、行けないで成功、失敗ってのがあって、言葉が覚えられる、覚えられない、学校が続く、続けられないっていうので成功、失敗があって、まあ、今日本の文脈でいくとそういうのがあっていうので、すごく重要な意義をもっているっていうのは分かっています。例えば、で、子供の時間って大人の時間よりずっと長いじゃないですか。子供の一日って大人の一日よりずっと長いし、今回のコロナみたいなので子供が3か月放っておかれるっていうのは、大人が3年間放っておかれるのと同じ重要度みたいなね、と思っているので、それで例えば子供が、これは長谷川さんのケースにもかかわると思うんですけども、例えば言葉が分からない状況で1週間いるっていうのは大人の時間に換算すると恐ろしい状況だろうなっていうのがあるんですね。だから、ある種、じゃあ日本の社会もうちょっと高校に行けないっていうパターンっていうのも変えましょうよっていうことはできるんですね。高校に行けないっていう事に関して、そんなネガティブなフィードバックをするのはやめましょう、と日本社会にいうことはできるんですけども、で、それを子供にいつてね、高校に行かなくていいんだって心があれするのはいいんですけども、高校行かないことによってそんなに社会ってすぐには変わらないから

わたし： そうですね…

福島先生： そうすると、高校に行かなくてもいいやーって思って、でも働こうかなと思って、で仕事探しに行ったら、いや、お前高校出てないから駄目だって言われて、いやでも先生いいって言ったんだけどもってなって、全然そこはもう、時間がずれるし、言う相手は分けないといけなとっていうのはあると思うんですね。だから、そういう意味で、その、うんと、私はブラジルに学ぶところがたくさんあると思っていて、そのオルターナティブってよく言いますが、Aがだめ

だったらBに行く、BがだめだったらCに行くっていう、その中に階級がない。Aの方がいいけど、Bに行っちゃったっていうところもあるかもしれませんが、例えば今高校に行かなかったら定時制の高校に行くっていうような階級があって、あの一、ただ、今、一方で普通科にいて大学に行く道があるっていうのを意識しながらも、そもそもブラジルの子たちは、あの、うんと、スタートが遅いっていうのもあるじゃないですか、スタートっていうか、途中で来て、言葉が分からないところで急に高校入試みたいだね、いきなり。あの一もう2年待てば違う結果なんだけど、みたいなところが、もう行って、言葉も全然わからなくて高校入試になって、入れる高校がここしかありませんってなって、で周りを見渡したら周りには自己評価の低い子たちばかりがいてみたいな状況があったりするとき、そこでちょっと考え方をええなさいいけないっていうか、オルターナティブっていうような形で、そういう定時制高校みたいなのを、日本側の意識を変えないといけないと思うし、じゃあ変わる力っていうのを外国から来た子供たちは持っているのかなって思いますけどね。それまでその外国人の子供たちがいないとずっとその定時制高校が勉強のできない子の学校だった、っていうようなのを、そういうちょっと違うラインの人が入ることによって、よく先生という人がいるんですけど、そういうブラジルの子が入ってからすごく伸びる子がいるっていうんですね。で、おそらくそれはブラジルのこどもたちが中学に入ったばかりで勉強全然できない状況であるんだけど、高校に入ったらその子自身の日本語の能力も上がってるし、周りが勉強できないからいきなりトップに立つとかね、そういう成功体験を経て、すごく上がっていくと。そうすると、学校の中でもそんなに勉強できる子今までいたことないぞみたいな状況になって、で、成長の速さって子供速いじゃないですか。例えば一年というのでも、さっき言ったのと一緒なんですけど、子供の一年っていうのは長いので、この成長のスピードむっちゃ速いですよね。だから、まあ、その辺があるだろうなって。そういうことで、非常に関心が、こういう人がいるんだって思ったのが。話を聞いたのが、その言葉が分からなくて学校に行くっていうのを2回体験したわけですよ？日本に行ったときとブラジルに行ったときと。

わたし： そうですね、日本に行ったときは4つで行ったので、6才で小学校に上がったときにそういう環境だったので、あんまりこう、なんていうんだろう、私は幼稚園に行かない子供だったので、本当に急に、社会に出るという経験ですごく気疲れしたのを覚えています。一年生のときは、で、2回目が13才だったので、本当に、この間の先輩テーブルでも話したんですけど、えーっと、全くコミュニケーションが取れないと言っていいのか、私の性格もあると思うんですけど、私の性格で人と話すのが怖くなってしまって、学校に着いても「Oi」というだけで、一日中他の言葉を発したことがない日が続いてた時があったんですね。で、後は、みんなの輪にはいるんですが、誰とも話さない、もうずっと家に帰ってくるまでは「Oi」の二文字以外は全然言わなかった時があったんですね。

福島先生：それはどのくらい時期があったんですか。

わたし：んー一年ぐらいでしょうね。あははは、一年ぐらいだと思います。

福島先生：一年、ふつー…、なかなか、さっきの話と繋がるけど、いられないと思うんですけど、だからそこが不思議なんですよ。

わたし： なんて行ってたんでしょうね？あははは、実験のモルモットみたいに麻痺してたんですかね？

わたし：（…中略）あ、高校生、2回目に帰ってきた時に、定時制みたいな高校に入ったんですけど、定時制の高校入る前に私、私立の高校に一回入ってみたんですよ。でもすごく勉強熱心な高校で一か月でやめました。それはやめました。

### 【自分の考え】

そういえば、自分でもなぜ13歳の時の自分にとって苦痛でしかなかった学校に行くのをやめなかったんだろうと思う。けれども、福島先生のこのような成功体験というものを経験した覚えがある。州立学校だったので学校の質が悪く、おまけに私は言語ができないこともあって多分一番成績の悪いクラスFクラスに入っていた。（多分Aから出来る順で振り分けられていたような気がする。）言語のできない私が唯一追いつける科目が「数学」だった。クラスの子たちは数学の基礎が成り立っておらず、先生の出す問題が全然解けなかった。私一人が理解をしているのを見て、先生が喜んでるのが記憶にある。周りとのコミュニケーションは最悪だった。でもだからと言ってブラジルではいじめられも、仲間はずれにもされなかった。

周りが出来る環境で自分だけが置いていかれるという状況だったり、あからさまに受け入れられていないという体験をしていたら、私は学校に行くのを諦めていたかもしれない。

## 2.2「身近の意外な人の影響」

福島先生： じゃあどうすんのこれ、学びについて質問した方がいいのか、私の関心でしていいのか。私の関心はなんでこう多くの人は、っていうか自分が想像しても、こうまく学校を続けていけるのかって言うね。だから前回会ったときは親のお父さんお母さん、いいお父さんお母さんだからって、でも友達も関係してんのかなって。言葉が分かんなくて、例えば4才で日本に行く、4才の時は大丈夫かもしれないけど、この13才でブラジルに行くっていうのが決定的に辛いと思うんだけど。

わたし： そこは地獄でしたね。

福島先生： なんで学校続けたんだろう。

わたし： そうですね。逃げるっていう考えがなかったですね、そういえば。ああ、でも、えっと私ブラジルに帰ってくる前に、中学にいた時に、今で言う中二病ってやつですか？なんか全てが無意味に感じてた時期があったんですね。日本にいた時に、中学2年生の時に何のために学校に行ってるんだろうとか、学校に行ってもなんか本当にも虚しいばかりで何かこう意味が見いだせなかったんですね、人生に対してか何か。で、私はいつかブラジルに帰ってくるって聞いて、その頃もちょうどブラジルに引き上げるっていうのが決まっていたので、勉強もみんな受験控え始めてるので頑張ってる場所でも自分はずっと状況が違うし、うちの両親は全然を勉強を強制したことないので、なんだろうなんか本当に何もかもが虚しかったんですね。それは私だけじゃなくて、思春期特有の虚しさだと思うんですけど、それで学校行きたくないって言った頃があるんですけど、姉が不登校になったことがあるんですね。日本で姉に学校行きたくないって言ったら、でも1日行かなくなると本当に二日目は辛くなって行かなくなっちゃうから行けるんだったら行った方がいいよって言われたのを覚えてるんですよ。それもちょうど影響があるのか

なと思う時もあります。で、ブラジル来ても行きたくなかったのに、なんで行ってたんでしょうかね。

福島先生： そういったね、お姉さんとかの影響もあったでしょうね。だから、まあ結構そういう影響を与えてくれた人とか、そういう考えを話してくれた人が誰なのかってね、ちょっとお姉さんって言ったら大分なんていうか、説得力があるって、誰が言ったかってのも大きいじゃないですか。その学校にあの、行かなきゃダメだよって誰もが言うかもしないけど、あ、そうだなって思うかね、そんなこと言っただってって思うか。同じ環境にいたお姉さんが言ったってというのが。あの、友達はどうなんですか、ここは。

わたし： 13才の時ですか？

福島先生： この13才はブラジルの13才？

わたし： そうです、はい。

福島先生： このころ友達は何？

わたし： いませんでした。ブラジルにはできませんでした。残念ながら心が開ける友達は。

福島先生： ひたすら学校に通うだけ？

わたし： そうですね。あはは。でも、あの、日本の友達と文通はしてました。時々届く手紙が何通かあってすごく嬉しかったりとか、その頃はひたすら部屋にこもって本を読んだりとか、日本語の本が、姉が読んだ本が、小説とかがたくさんあって、それを読んだことがなかったのでの暇つぶしに自分の方に持ってきて読んだりとか、絵を書いたりとかするのが好きだったので絵を書いたりとか、その頃から服を縫ったりするのが好きだったので、まあミシンを引っぱり出したりして縫ったりとか、そういった方の創造力使うほう、クリエイティビティを使うほうにすごく夢中になってました、家では。

### 【自分の考え】

自分の道のりを振り返ると、両親の影響についてはよく考えたことがあるのだが、最近姉が私に及ぼした影響についてたくさん気付かされる。姉とは6才年が離れているのと、両親に比べると一緒に住んでいる期間が少なかったのことで、今までそんなに影響があるとは思っていなかったのだが、よく考えると、私の嗜好には姉の影響が多大にある。姉が持っていた本やCD、見た映画など、姉からの影響がなかったら私はどうなっていたんだろうと思うときがある。やっぱり周りの人や環境というものは、私たちに影響を与える力が強いということを改めて思った。

### 2.3「違和感」

福島先生： その違和感ってのは、まだあるんですか？長谷川さん自身にははまだあるんですか。

わたし： そうですね…自分が認めてあげてないからでしょうね。

福島先生： さっきの話だとその言語ができてできなくても言うからは言語ができるできないと関係ないところにあるある違和感の反対の言葉、なんだろう、達成感じゃないけど満足感かもしれないけど、言語とは関係ないってことですか？それとも言語について言っているんですか？

わたし： 成功っていう意味ですか？

福島先生： 違和感。言語について自分の喋ったり書いたりするのに違和感があるのか、それとも言語は置いといて？

わたし： 置いといてです。言語ができるようになって本当にすごく嬉しいんですよ。できるようになったこと本当に嬉しいです。あっ…でも言語とも繋がってなくはないと思います。日本語ではこうやって意思の疎通がすごく私、楽なんですけどポルトガル語も今あまり問題なくできるようになっても、さっきのアイデンティティの話に戻ってしまうんですけど、これは私のケースで、私日本では自分が日本人だと思っただことがないんですね。あの文にも書いたように、父がブラジル人だと言われてたのでそれがなんかすごく私には影響が大きかったような気がするんですけど、ブラジル人だと言われていたし、周りの人たちからの扱ひもブラジル人だったんですね。日本って田舎の方に行けば行くほど田舎の習慣っていうのがあるじゃないですか。やっぱりその土地の習慣とかがあって、うちの両親はそれを知らないの、自分がその群れに入っていない人間だと小さいながらも感じてたんですね。自分は日本人じゃない、で、ブラジルに帰ってきたらブラジル人でもない。言葉もできないですし。で、日系人社会に行っても自分は日系人じゃなかったっていうのがあったんですね。日系人の方には日本人とみられ、ブラジルの方からは日本人と見られ、日本ではブラジル人と見られて、で、全然こう、枠に入らないんですね。自分のフィットする場所が全然見つからず。つい最近他の方もアイデンティティについて書いてる方がいて、その方を読んだ時に、アイデンティティは社会のプレッシャーという面もある、社会がこうあって欲しいって言うアイデンティティもあるって読んで、私を日本人と見る方は私は日本人じゃないといけないんだみたいな、変なプレッシャーもあるのはあるんですね。で、ブラジル人だって言われると自分はブラジル人だって、期待に応えようとする自分もいるんですね。で、ポルトガル語が上手になれば上手になるほど中級ぐらいレベルになると、できないといけない、応えられないといけないというプレッシャーが逆にあったんですね。で、学校にまだポルトガル語はそんなにできてなかったんですが、行った時に私の作文をみんなの前で、私のとは言わないんですけど、ものすごく間違っただ書き方をしてるって見せられたんですよ。でも間違っただ当然なんですよ。私、分からないので。でもブラジルの先生は日本みたいに連絡事項がきちんとしてないので、私が日本から来た子だっただのは全然知らされていないので、悪い例として見せられたんですよ。なので自分の中ではわかっていても、しょうがないとわかっていても期待に添えられなかったっていう感じもありますし、ポルトガル語が中級ぐらいになってきて道端で声かけられてポルトガル語で答えるとばあーって言われるとポルトガル語が分かるように思われるんだ、ちょっと対応しなきゃっていう変なプレッシャーがあったりとか、いつもなんか不完全な感じがするんですね自分が。イギリスに行ったらイギリスに行ったであなたはどこから来たんですかって英語の学校で聞かれると、私ブラジル人なんです、私たぶんブラジル人のステレオタイプではなくって性格的にいうと日本人よりだっただ自分でわかってるんですが、かといって日本人とも言えず、私は…ってなんかすごい説明に戸惑ったんですね。相手もどう思うかわからないですし、ほとんどの人は「私はドイツ

人です」「私はスペイン人です」「私はブラジル人」ですって答える中、私答えられなかったんですよね。そこでもなんか不完全に感じてしまって、で、性格があると思うんですよ。それを前向きに捉えて、私両方あるじゃんって思えたらいいんですけど、なんかそういう変なプレッシャーとか、自分でも自分でかけてるのか、社会からそんな風に要求されてるような気もしてるのかっていうのがありますね。なので全然繋がっていないと言ったら嘘だと思いますが、私の性格的な部分で、違和感で引っかかるのが、多分そういう部分があると思います。言葉ができるようになったのに、言葉では補えない部分、文化的な習慣的な、なんかこう私にとっては言葉っていうのは文化や習慣とすごく繋がっていて、言葉を覚えただけじゃその言葉は使えない気がするんですね、完全には。やっぱりその言葉が出来上がる前に習慣とかがあると思うので、でも自分は残念ながらどっちも完全じゃないなっていう気持ちがあります。

### 【自分の考え】

ここで、なんとなく「成功」という言葉に自分が違和感を持った理由が分かったような気がした。成功という言葉の定義が何であるかは、使っている人や状況によって異なっても、成功というやっぱりどの場面でも使われても一般的にはポジティブなイメージがあって、もう終結しているようなイメージが湧いてくる。私の中では、環境への適応、言語の習得などの戦いは終わっておらず、いまだに悩むことがある。戦いと表現してしまうところ自体、考えるところであるかもしれない。どちらの言葉も文化も知っていていいね、と言われると「でもね…」と言いたくなってしまう。確かにうれしいこともたくさんある。でも「いい」の言葉ひとつでは収まりきれない。その「でもね…」が言いたくなる根源も、私は考えてみるべきかもしれない。自分は自分、人は人、と思っても、どこかで理解してもらいたいという自分があるのかもしれない。

### 2.4「社会の影響」

福島先生： これはね、私がこれに関心があるのは、さっきのだからこの言葉に集約されるんですけど、まあ後私が言ったようなところで、やっぱり違和感があるのはさっき言いました社会的なところがあるかもしれないですね。社会的なところからくるんでしょうね。きっとね。だから、それはある意味、あの一般的にはなくならないんだろうけど、でもこのケースだとどうなのかなってのはありますけどね。そういった意味で学ぶっていうのはイコールですよ。あの、足りないから学ぶってね。

わたし： あ、自分が不完全だと思ってることを補おうとしてるっていう？

福島先生： いや、どうなんだろうね。まあ、でもそれはもしかしたら他の人も同じなのかもしれませんがね。ただ、その、何が言いたかった？ そうそう、だから、あの今の社会は、多くはそのモリニングルのために一番的適合するように社会が出来上がってるんですね。モリニングル社会、で、基本定住する人のために社会制度が整ってる。

わたし： んーはい。

福島先生： そこにずれてくる人は、いわゆるアシストをしないとイケませんねっていう存在ですよ。でもそれを決めたのは社会ですよ。

わたし： そうですね。



福島先生： マジョリティだから。でもそんな事いったって、そういうマジョリティ側の所を当然人間は内面化しますから、さっきの話で人間の自我、アイデンティティと社会との関係性って言ったら、そういうの内面化して自分を形成していくから、特に社会との差異を感じる人はこの違和感が取れないですよ。やっぱりね。でも逆に言うとさっきの発達論的なところに戻って考えると、どうなんだろうって私は思いますね。社会的なモノリンガル社会に適合した人間の作り方をしているから、そうなるんじゃないですかっというのかなあとか、まあ。

わたし： ああー。

福島先生： ちょっとそんなこと言ってる人がいて、あのトランスランゲージングって言葉は知っていますか。トランスランゲージングっていう概念なんです。これを表面的に言うと言語を混ぜる人みたいな、複数言語話者がこうやって混ぜていくっていう人なんですけど、あのあまり簡単にいうとあれなんですけど。

わたし： コロニア語みたいな感じですか。

福島先生： そうそうそう、そうなんですけど、そうすると社会言語のこうなってますね、というだけの研究じゃないですか。私が読んだ感じだと、その人のモチベーションは、さっき言ったことなんです。あの、その人は多分移民なんです。移民なので、社会がモノリンガル用に出てくるって言うような怒りを感じるんです。そもそも人間っていうのは、あの言語っていうのは名詞じゃないって言うんです。トランスランゲージングって動詞だっていうんです。言語って頭の中にあるものを作ってるんじゃないで、言葉を使いながら、関係を作っていくから動詞、だから普通モノリンガルの人はこの言語を使いながら関係性を生きてます。だから固まったものじゃないですよ。って言うこと言いたいですね、きっとね。だからトランスランゲージングは複数言語だから、で、いろんな言語で、例えば長谷川さんはいろんな言語でいろんな人と関係性作るでしょ。で、それをモノリンガルの視点からいうと、長谷川さんはポルトガル語と日本語で作ってるなーっていう風に見えるし、自分もそう意識できるけど、反対からすると何とて言うか、意識はするかもしれませんが、そういうなんか二つの言語をやっているのは当然その二つのコミュニティが別々であって、それを使い分けてるっていう考え方もあるし、けど、長谷川さんの中心に考えると、何とて言うか、言語によって関係性分けてるし、混ぜる場合だってあるわけですよ。混ぜても通じる人には混ぜます。うちの娘も英語と日本語混ぜるんですよ。兄弟で話すときに、混ぜてる意識はあるとは思いますが、もうやっぱりなんか同じようなところにあるので、言語のね、あのだからそういう意味では、混ぜる事っていうのをまあ別に混ぜたくて混ぜてるのか、よくわかんないですけども、それも言いたいことは、あのモノリンガル言語ってのは一つ二つあって、それが混ぜてますってこの考え方がおかしいんだって、その人は言う。おかしいって言うか、間違っていると。間違っているって言うかこういう見方もありますよってことでしょうね。この人の多分最大に言いたいことは、間違ってますよって言う社会のあり方が、自分を何て言うか、さっきの話ですが価値を付けてるので、それを多分なんとかしたいんでしょうね。だからバイリンガルって、私のこのバイリンガル状況をモノリンガル社会が混ぜてるとかね、ちょっと違っているとかわらってるって言うそういう考え方を多分違う視点を見せたくて、そもそも人間ってトランスランゲージングですよ。って言う風にその人は言うんです。人間って確かに言われてみたら、それ言語学でも言っていて日本語喋ってますって言う人も、私の日本語と同じ日本語ネイティブ

でも、日本語を話してる状況ではもう特別言語ですよ。だから何言語喋ってるって頭ん中にあるだけで、違う言語喋ってるんだけど、同じ日本語だと思ってるだけみたいな、そんなような。

福島先生：（…中略）私だからさっき言ったモノリンガル社会から見た社会っていうのがついもう頭にくっついてるから、多分長谷川さんの中にもくっついてるんです。

福島先生：（…中略）人の心って社会の評価にすごく関わるところなので、で、複数言語で生きる人はネガティブというか、違ったものとして捉えられるんですよ。それは恐らく障害を持っている人とかも同じように捉えられるし、でも障害を持った人は障害が普通じゃないですか。でも社会がお前大変だなあって言われて、えー大変なのって言ったら、社会がその本当に大変なように出来上がっていて、やっぱ大変だって思って、それを裏返したような価値観みたいなものを持たないと、その人の心をどう育成のするか関わってくるのかなって思ったんですね。それを考えた時に、自分の中からどう取り出すのかっていうのは、方法があるのかなあと思うんですね。で、最終的には体験だとか、色々ありますけど、言葉にしないといけないですよ。

### 【自分の考え】

モノリンガル社会！社会がモノリンガル用に作られているという発想は、私は持ったことがなかった。自分は13歳の時に新しい環境に適應できないのを自分のせいだと責めた。自分を責めることが、その時の状況を受け入れる唯一の方法だったからだ。どこに向けていいか分からない苛立ちは、自分に向けてことで落ち着いた。私はブラジルに帰る前に、日本の中学校の図書館でよく障害を持った人の伝記を読んでいた。壮絶な生活が綴られつつも、乗り越え、自分に価値を見出すというストーリーがとても魅力的だった。ブラジルに初めて帰ってきたときは、そんなストーリーと自分を比べてしまっていた。どうして自分は前向きになれないんだ。「個」だけに固執し、マクロの影響については今まできちんと考えたことがなかった。社会の影響というものが、どれくらい大きく「個」に降りかかるかということとは。

## 2.5「アイデンティティとマジョリティは移動がない？」

わたし： あの、何て言うんですか、社会との関わりとかでの言葉に達するまでのっていうのがあるんですけど、私ポルトガル語を覚えなきゃって思った一つの要因っていうのが、社会から見て自分がブラジル人だからなんですよ。もちろんコミュニケーションをも然りなんですけど、私が海外に行った時に、何か起きたら頼まないといけないのはブラジル領事館ですよ。多分、ブラジル領事館に頼まなくてはいけなくて、私の国籍はブラジル人で、そこで全然ポルトガル語はできなかったらどうやって助けを求めらるだろうと。別に外に行こうとか思ってなかったんですけど、自分はブラジル人っていう意識が言葉と繋がってないといけないんじゃないかなっていうのもあったんですね。それだけではないと思うんですけど、やっぱりその社会との関わりとか、やっぱり言葉にしないと伝わらないっていうのはすごく強く関連してるんだらうなっていうのは自分でも感じます。

福島先生： まあ、それはありますね。特に国を移動してると、必ずそれはね、くっついてきますからね

わたし： そうですね。社会がモノリンガルだから、まあ、モノリンガル・・・うーん、何でしょうか。あはは。

福島先生： 国境を越えると、それは個人がバイリンガルであるっていう状況と、やっぱりそれは、複数言語のブラジル人っているけど、その人の事情とまた長谷川さんの事情は違いますよね。

わたし： あはは、そっか。そうですね

福島先生： (国を統一するため、人と国家と言語を繋げる言語政策の説明、そして移動のある人はその枠から外れてくるという下りから) 自分にアイデンティファイする、日本人だ、と思わせるために国語っていうのを作って、学校教育で義務教育として教えるんですね。これ言語政策の基本なんですよ。だからアイデンティティ・・・その中にいると何か忘れちゃうんですね。それが当たり前になるっていうか、だからそこがずれるとかと悩む人がいるんですけども、実をいうと、言語政策の歴史から言うと言語がバラバラであったり、人が国にアイデンティティを持たないということの方が普通で、持たせようと思って言語を作るんですよ。だから近代以降の現象ですね。何々国の何々人だって人が思うようになったのは。それまでは隣の方言も強いし、なかなか近代っていう枠の国家の中にアイデンティティっていうのを逆に言うと誰も持てないっていうか、あまり遠すぎて持てない。

(…中略…)

例えば日本だと明治維新の後、いろんな広い範囲の人を一致団結させるためによく言うのは、言語と領域と人をつくるっていうんですけど日本語を作って、日本語が通じる範囲が日本で、それを話す人が日本人ですよ。ここで identification を人為的に作っていったってのが言語政策の歴史ですよ。(…中略…) そういった近代の言語と人と国籍とかと合わせるって言うのは言語政策という観点からもあって、で、そこからずれると悩むんですね。

わたし： あー、なるほど！

福島先生： 悩みはね、あの実は人為的に作られているっていう

わたし： 目から鱗ですよ、今。

福島先生： まあ努力して、でも作ったんですよ。そもそもはそういう風に思われなかったところを、19世紀は、いわゆるまあ明治政府とかね、後ブラジル政府なんかも一所懸命多分教育によって、お前ブラジル人だろ、ブラジル人はポルトガル語だろうって。学校の科目にして成績つけるんですよ。この人は成績が良いとか悪いとかね。この人のポル語がいいとか悪いとか全て言語政策ですよ。それによって、こう、国民を作っていく。特にブラジルみたいに移民が多い国は難しかったと思いますよ、やっぱり。ブラジル人だって思っていないじゃないですか、色んな人が。

わたし： そうですね。

福島先生： 一つは、あの近代ってのは戦争するでしょ。

わたし： しますね。

福島先生：（国が戦争するために言語を統一したという下りから）本来は、その結びつきっていうのは作られたものではある。ただ社会の成り立ちとしては、まあ、例えば長谷川さんが国の王様とかになって、国を治めてくださいって言われた時に多分同じことをするかもしれません。まとめるのどうしようかな。全然違う国の人だって思ってるんですよ、みんな。で、みんななんか緩やかに言葉が分かるんですね。そしたら、みんなに通じる言葉作るかとか長谷川美雪にいたのは美雪語を話せと。あなたの言葉はちょっと違うから、標準長谷川語を作るからみんなで作ろうって。それを学校で教えるからって。そうするとなんとなくまとまるじゃないですか。

わたし： そうですね。コミュニケーションツールですよね。どうしてもやっぱり自分の国の人に何か伝えたかったら、言葉伝わらないと、まあ統治する側はやっぱり困りますよね。

福島先生： で、伝わるとなんか仲間のような気がするじゃん。通じるからさ。でも隣と通じなかったら、こいつちょっと違うけど、ここ通じるからそうするとやっぱこう、共同体ができるんですね。

わたし： でも私は言葉は通じてたのに、じゃあ、なぜその共同体が出来なかったのでしょうか。

福島先生： それはどうなんだろう。程度とかがあるんじゃない。なんの程度かっていうと、言葉の程度って言うんじゃないで、文化規範だとか、なんかその辺の三つ、だから言語と民族とかなんとかとか、なんでだろうなー。その辺も探ると面白いですよ。

わたし： 私はなんでそうだったんだろう。私は一…うーん、どうでしょうね一…。

福島先生： 言語政策の原則は二つあって、一つは領域内にコミュニケーションを保証すること。それは例えば、長谷川さんはできた。もう一つは所属意識、ビロッキングスっていうんですけど、ビロッキングスをどうやってつけるか。これがあの一、まあ、これも難しいんですよね。多分コミュニケーションは保証されたけどビロッキングスが持てないのはなぜなのかって言う問いになるんですよ。多分恐らく国家としては、国家の作り方は日本人と外国人を分けるみたいなどころがあるので、国籍情報がズレると、ちょっとあれだけど、日本は日本国籍と日本語と日本民族とが一致してるからね。ここからズレると少しデビエートする、そうするとよそ者だと思っ回路が働くってのがあるかもしれない。国によっては、例えばブラジルとか民族が違っても、あ、ブラジル人だって外さない回路があるじゃないですか。

わたし： はい。

福島先生： 日本の国っていうのの回路に、いわゆる日本が思う日本の要素っていうののいくつかあって、言語、民族、で、見え方もそうでしょ。

わたし： そうですね。

福島先生：見え方が日本人だけど、日本国籍持っても、見え方が違うとなんとなく日本人かになって思われたりする、だから大坂なおみが日本人かどうかというような議論があるじゃないですか。見え方が違うとかで。そういえば日本はわりに窮屈なんですね。窮屈というか、厳しいんですよね。バリエーションが少ない。

わたし：はい。

福島先生：ブラジルの日本の人は、顔は合格、言語も話す人がいるからまあ合格、でも国籍がないんだよねとかね。で、だんだんずれていく。この辺は包摂的な国は緩いじゃないですか。ブラジル人とはって言ったときに、国籍を持っています、持っていないでもブラジル人と思われるかどうか。なんだか民族であるっていうのも緩いですよね、多民族ですから。その辺の縛りを内面化したところのズレは、長谷川さんは感じるんじゃないんですかね。それは日本の規範的に日本人っていうところの縛りが、条件が厳しいですよ、きつと。でもそれも作られたものだから。

わたし：確かに私、一時ずっと自分はブラジル人かなと思ってました。ポルトガル語ができるようになってから。友達も出来た。友達は別に私を日本人とかブラジル人じゃなくて、長谷川アレサンドラ美雪っていう風に見てくれて、ブラジル社会に受け入れられてる感じがしたんですね。で、一時の間ずっと自分はブラジル人だと思ってました。今は、もう振り出しに戻ってるんですけど、また。日本語教師になってからとイギリスに行ってから。いやー、でもブラジル人でもなかったんですけど帰ってきたんですけど。でもこのブラジルだったからっていうのはあるかも、これがアメリカだったら、もしかしたら私は自分をアメリカ人と思って過ごしてはいなかった気がします。なんか。

福島先生：（日経新聞の勝ち組という本の内容、日系人が日本でサンバを踊っているのはちょっと珍しいというブラジル人記者の記事についてのコメントが書かれていた下りから）それ逆に言うと長谷川さんが言ったことと同じ。どこに行っても、なんか違うって言われる。Identificationのやり方を変えてみるって言うのもあるかもしれませんが。え、でも今、長谷川さんはどういう風に思ってるんですか。色んな経験をして、色んな思いをして、それはやっぱりまだ悩みとしてあります。それともだいぶ吹っ切れていますか。

わたし：日本語教師になってから、なぜかまたアイデンティティについて考え始めました。イギリスに行ったのもすごく大きいですね。影響が。たまに JICA さんとかを受け入れたりして日本から来た JICA さんと話していると、ズレを感じるんですね。自分の日本人だと思ってる部分とのズレ…ブラジル人と話していてもやっぱり何かズレを…ああ、ブラジル人とはそんなにズレを感じてないかもしれないです。近い人なので、ほとんど話すのは。でも私を知らない人に自分を紹介するとき、ブラジル人ではないなと感じることの方が多いんですね。自分も、なので、今、あのなぜこの部分が自分の頭を悩ませているのか自分でもわかってないんです。どうしてなんだろうって。多分、さっき行った不完全を感じるっていうので何か引っかかるところがあるんでしょうけど、それが毎日自分を悩ませているわけではないんですが、答えは出てないです。自分が誰なのか、何人なのかっていうのは。今は。

福島先生：まあ、すぐには出ないかもしれないですよ。まあ、50何歳で福島は何者なんだろうって考えますからね。やっぱりね。終わりまで考えるかもよ。

わたし： あははは、私考えるような気がします。もしかしたら私答え出ないかもしれない。家族に聞いたことあるんですね。お母さんは何人？って、母が、「日本人だね」って、「なんで？」って聞くと「日本人の娘だから。なんでそんなこと考えるの？」って。父に聞くと「お父さんは日本人だよ。パスポートが日本人だから」って。ああ、そうか父はそこかって。姉は「わかんない」って。うーん…私もしかしたら終わりまで答えはでないかもしれないですね。

福島先生： あの教育心理学やると、自分の仕事になりますけど、移民研究ってのもあるんですよ。で、二世研究っていうのをしている人もいますよ。長谷川さんは二世じゃない…あ、二世、二世と三世か。

わたし： はい、私二世と三世です。

福島先生： 結構二世っていうのが、これは日系移民だけじゃなくて、二世って大変だっていうのが。一世の価値観と自分の価値観が結構ぶつかるっていうか、二世を研究する二世研究っていうのもあつたりします。だから、そういった移民研究の中にも色々ヒントがあるかもしれないですけどね。でも、本当、人っていうのは、色々移動している…マジョリティは移動しないんですかね。

わたし： あー、あははは、そうか。福島先生は「移動する大人」でしたね。

福島先生： 25年間移動していたからあれなんですけど。確かに、周りみんな移動しているからね。

わたし： そうですね。移動…しないんでしょうね。多分…。

福島先生： しない人たちによって社会はできてんだよ。それにこちらは適合していない。まあ、でも子供のとき移動するっていうのは辛いと思うな、色々な困難があるというか。

### 【自分の考え】

まず、アイデンティティが人為的に作られたものだということに驚きが。ここでもやっぱり社会の「個」に対する影響というものを感じた。移り変わる世の中で確固たるアイデンティティを持つとする自分の考え方を問い始める。こういった考えは気を付けないと、「自分はそうじゃなければいけない」と縛ってしまうのかもしれない。それが私の感じている自分自身へのプレッシャーというものかもしれない。そして、この自分自身へのプレッシャーというのが、前見出しで「モリガル社会から見た社会というのが頭にくっついている」と言われた部分なのかもしれない。でも、だからこそ社会のプレッシャーというもので、持たなければいけないという感じがするのも事実だ。日本語教師になって再度アイデンティティについて考え始めたのは、多分日系コミュニティの中の日本語学校の日本語教師ということで、そこでも自分はズレていると感じているからかもしれない。

後、マジョリティは移動していないというコメントに、「ん？私は移動したことがない人を理解しているのか？」とふと思った。移動しない人の生活というものがふと全く知らない景色のような気がしてきた。

### 3. 結論・まとめ(自分の考えのまとめ)

福島先生と話していて、なぜテーマが「学び」なのだろうか、という所に何度か話が戻っていました。対話後、動機文と対話内容を何度か読み返し、動機文で今学びたいことに辿り着くまでに結構長く書いた自分の生い立ちと、福島先生と対話したときによく出てきた自分のアイデンティティや社会の影響などの観点が心に引っかかり、私は「学び」を通して、居心地良さを探求しているのかもしれないと思いました。

多感な年ごろに国を移動した経験は、正直、とても大変でした。私は成人してから心理カウンセラーに通ったりしており、福島先生と話した規模程に社会からの自分への影響については考えたことがありませんでしたが、私の考え方の歪みは、今までの経験を経て培われたものだと言われたことがあります。そして文化的要因も大きいだろうとも言われました。ただ、それは移動があった人生だったから、ということに限ったわけではなく、移動ももちろんのこと、家庭内やその時置かれていた環境などの影響もあり、あそこ、自分に心理的なサポートがあったらと思うときがあります。言語が出来なかったので無理だったし、金銭的な面などの問題もあったので、結局は受けられなかったと思いますが、多感な時期に受ける影響は、その受け取り方によってはその後、厄介なものになったりします。

自分は生徒さんには自分が悩んできたようなことで悩んでもらいたくないし、自分に不安を抱えながら生きてもらいたくない。居心地よく生きてもらいたい。そういった思いで、つい自分と生徒さんを重ねてみってしまうのです。

私の感じる不安は、言語や社会、移動の影響を無視しては語れないということも対話を通して気づかされました。社会と周りの環境というものが人格形成にどれくらい影響しているかということ、影響があるとはどこかで認識しつつも、その影響の大きさを今までは考えを巡らせていませんでした。社会ってスケールが大きいので、唯一手に届く「個」で対処しようとしていました。「個」で社会すらをも背負おうとしていました。

「個」を知る、自分を知る、ということが大事だという思いは変わらないですが、私自身、「個」が大事、それを尊重してこそ居心地がいい場所が作れると思いつつ、自分の「個」を尊重していないかもしれません。アイデンティティの話をしている所などを読むと、私が自分の「個」を知らない＝違いを知らない＝自分が理想とする違っていいことの「個」へと繋がっていないんじゃないかと、自分の中に矛盾も見つけました。人には違っていいんだよ、と言っているのに、自分には違うことに対していけないと言っているみたいです。動機文に「何よりも、私もまだまだ自分自身を知る必要がある。」と書いたもので、潜在的にはそれを自覚しているのかもしれませんが。

私は一人、躁うつ病と診断された日本帰りの9才の男子生徒がいました。ご家庭が少し複雑な子で、授業中の発言は攻撃的な内容を好み、作文などを書かせるとお母さんへの怒りを露わに見せるものでした。医者からの診断書には勉強したくないときは無理にさせない、などが記述されており、勉強をしたがらないので日本語の指導もできず、ボールをパスしながらゲーム感覚でしりとりをすれば、使う単語はすべて攻撃的で暗い(毒、死ね、悪魔など)ものばかりで、とある時は突然「先生、血管って切ったら死ぬ？」と聞かれ、死ぬと言って本人が切ってしまったらどうしよう…かと言って死なないと言って切られて、先生が死なないって言ったからってなったらどうしよう…と考えつつ、やっと「それはお医者さんじゃないと分からないよね。でも切ったら痛いよね。」と答えるようなやりとりが続き、自分の対応できる範囲の限界を感じ、「続けるには医者からの直接の指導がほしい」と上の人に相談したところ、その子の母親と話をして、私はその場に居合わせなかったのが何が話されたかは知らないのですが、学校をやめるように説得したようで、母親が怒り、その生徒は学校を辞めてしまいました。先生は話に入らない方がいいと言われ参加しなかったのですが、今でもその出来事が胸に引っかかっています。辞めてもらいたかった訳ではなく、本当に私の力不足だったと思います。

非日系の17才の生徒は、ブラジル学校が不登校になり、高校を卒業せずにやめてしまった子がいます。同時期に日本語学校も親に嘘をついて欠席していましたが、日本語学校は辞めずに今でも続けています。日本語学校でも仲の良い友達がいるわけではありません。自己肯定感のとても低い子で、自分の全てをネガティブにとらえています。理解の速い子で、速いからこそ勉強もよくさばります。時々不安定ですが、それでも、家に引きこもらずに何かを続けていることに少し安心します。

なんだか居心地が悪いと感じている生徒さんを見ると、自分にできることはないか、その子が自分の自信の種を植えられるように、私がしてあげられることがないだろうかと思えます。どこに行っても、私たちとお供するのは自分です。心理学を学ぶことによって、居心地良い場所を自分の中に見出せるのではないかと、または見出せるための一歩になるのではないかと思うのです。

#### あとがき

対話テーブルに参加し、本当にとっても貴重な体験をさせていただきました。まず、「書くこと」と「話すこと」の差にびっくりしました。話そうとすると上手く出てこないのです。かと思えば、皆さんや福島先生と話していて、一人で書いていたら出てこなかったであろうことが話していてポロっと出てきたりするの不思議で、皆さんと話すとたびに新たな発見の連続でした。そして対話した後の余韻と、実際に文字に起こし再度読んだときの言葉の重みというものの違いを感じることも、とても面白かったです。皆さんが投げかけてくださる言葉を受け取り、それを考え、ふわっと出てくる思いを見つけるのもとても楽しかったです。対話を通してでなければ、体験できない発見だと思いました。

今回、このような機会を与えてくださり、心より感謝申し上げます。本当に、本当に貴重な体験です。

#### メンバーのコメント

##### ☆ 動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko

すごくおもしろく読ませていただきました。いつもおしゃれだなーと思っていたのですが、ファッションを専攻していたんですね！それぞれが違う人間、本当にそうですね。当たり前のことなのに、教育はどうしてそのことに鈍感なんだろうと思うことが多いです。

Hideo Hosokawa

長谷川アレサンドラ美雪さん、ありがとうございます。美雪さんのファッションへの熱い思い、よく伝わってきます。また、日本語教育についての美雪さんの考え方もよくわかります。「日系、非日系関係なく、生徒と自分を重ねて見てしまう。でも、そこで気づくのは、それぞれが違う人間だということだ。」このところ、とても重要だと思います。ファッションの考え方も通じていますね。だからこそ、美雪さんのめざしている日本語教育の姿をもう少し具体的に書いてもらえるとわかりやすいです。美雪さんは、毎日の教室で、どのような教育実践活動をされているのでしょうか。それを具体的に教えてほしいし、そのようなご自身の立場をつくったきっかけがわかるとなおうれしいです。

Sandra Terumi Suenaga Kawabata

美雪さんは、日本とブラジルを行き来するいわゆる「移動する子ども」だったんですね。複雑な体験を通して、今まで様々なことを学んできた美雪さんの思いが伝わってきます。ブラジルにも日本にも親に連れられて移動し、美雪さんと同じような経験をしている人がたくさんいます。中には、自分のアイデンティティのこと、今後のことについて悩んでいる人もいます。そのような人に伝えたいメッセージはありますか。どんなことを伝えたいですか。

tsuruchan56

お話したときに、本の世界に逃げ込む私とは違って、本の内容を狩りに行くという表現をされたみゆきさん。「自分の「学び」に対する執着は、今までの「学び」に対する飢えから来ているのかな、と思う。でも「学び」は私をいつも励ましてくれた親友でもあるのだ。」という表現にみゆきさんが通過した難しい状況とそれに負けなかった意志の強さを感じました。

Mie Yokomizo



美雪さんの座っている姿勢や人と話している様子が美しく、それは考え方を映しているのだと思います。「英語で心理学を勉強するのですか！！！」すごい！！日本語学校でファッション講座とかしてほしいです。

また、日本へ行く親御さんにどんなメッセージがありますか？

#### ☆対話へのコメント

Mie Yokomizo

みゆきさん！！「恐るべし対話！」読みました。そうなの？アイデンティティって人為的に作られた基盤からのスタートなの？モリソングルの社会なの？なんじゃそりゃ？一回しか読んでないから「？？？」がいっぱい。また読むね。

みゆきさんと福島先生の対話を読んで、今の段階では、私は「考えられる幸せ」を考えたい。「個」と「個」「個」のことを考えながら「言葉」の「なぜ」をぐるぐる回って模索してる感じが、人間たる姿というか考える生き物というか、うまく言葉にできませんが、成長できるというか大きい器になれるというか、この機会にジャンプできる感覚が感じられる。私もこのお二人の対話を読んで一緒に考えて、私も大きくなれる「シアワセ」を感じている。まとまらないですー。いつかまとまるのかな？私の感想。ははははは。もう一回、ゆっくり読んでまた、話したいです。

#### ☆結論・まとめへのコメント

Eriko Nakajima

美幸さんとは個人的にお会いしたり話したりする機会がなかったのですが、私はソロカバのUCENSで2013年9月～2014年6月にJICAボランティアでお世話になりました。文章に出てくる子どもたちに、あの子かな？とか思いながら読んでいました。学齢期に移動する生活での大変さは、当事者でないとわからないことがたくさんあると思います。またそれを言語化するの、簡単なことじゃないことも。でも誰かが発言しなければ、政策を作る側からは存在すら認められない…。そういう思いで支援者は色々な表現を使って説明するのでしょうか、違和感を感じることも多々あるだろうし、それを伝えることは勇気がいることだと思います。私は美幸さんの文章を読んで、私はなぜかパラグアイのピラポの子どもたちのことを思いました。全然状況は違うんですが…。またそんな話をゆっくりできると嬉しいです！この活動の後も色々とお話してください！！

Matsuda Makiko

大作ですね！自分と向き合い、迷い、悩み、考えた様子が生き生きと描かれていて、感動しました。福島先生との対話も読みごたえがありました。初めてお会いしたときから内省力がすごく強い方だなと思っていたのですが、思った通りでした。これからも美雪さんの「当事者研究」を読みたいと思います。待ってます！

## 「日系社会で生きる私」の探究

横溝 みえ  
山本 カリーナ

# ブラジルの歴史作りに参加する

—ひとりの日本語教師ができるちいさなこと—

横溝 みえ

## 1. 動機と理由

なぜ「ブラジルで日本語教師をしていること」が私のテーマなのだろうか。まず、「ブラジルで」という場所が大事で、他の国では、私の人生のテーマとはなり得なかったのではないかと思う。「ブラジル」という広い国土と移民の文化を持ち、歴史が浅く、国として成熟していない、何か上昇志向で活気あふれる、懐深い雰囲気やベースに、しかし反面貧富や権力の差がものすごく激しく、あきらめと希望が混在する、いい意味でも悪い意味でも人間味溢れる人達が生活している国。私が遠慮や配慮なく、ここに暮らすひとりの人間として自由に感じていい。周りの期待や迷惑など私が勝手に想像していた「こうあるべきだ像」から解放され、伸び伸びと生きていける場所。

この国は教師の地位が低い。例にもれず、日本語教師も同様である。「日本語の先生」は聖職ではなく、農業に従事できない役立たずのする子守り役とか、日本人会館の管理をする人という地域や時代もあった。それが現代となり急に価値が上がるということは考えにくい。日本語もポルトガル語も堪能で、コミュニケーションすることが大好きで、日本語教師になりたいと言っていた学習者は親に猛反対されたり、生活が成り立たず、別の職業を選んだりするケースがたくさんある。日本語は、家庭内で話され、身近なもので話せて当たり前という世代から、次世代へと変わり、不要なものだと軽視したり、難しすぎる特別なものというイメージがあったりする。また、相反して「神話」のように日本を崇拝している人達も多く存在する。

ブラジルの日本語学校では、生徒が自然に身につけ、もともと持っている言葉を、学校で「書く」ということを行っていた授業スタイルの影響が色濃く残り、例えば、手紙やメッセージで外へ発信する手段として「書く」、考えをまとめるために「書く」などの行為があることを忘れ、ただ「あ」という文字だけを書き順とともに教え込むという授業や、機械的にドリルを読み書きだけで行う授業をしている日本語教師がいる。また、「日本語教師」は日本語が話せることが唯一の資格のように思っている人が学校運営に関わっていると、コミュニケーションが苦手だったり、人の成長に興味がなかったり、自己肯定感が低く他人を攻撃する傾向にあったり、教育には向いていないのではないかと思われる人が「日本語教師」として学習者と接する不幸を生んだりする。それがブラジルには多すぎると思う。

私はパンデミック前は子供から大人、初級から中級まで、(だいたい)みんな一緒に日本文化体験をするクラスを実践していた。運動会やうどん会、手巻き会等の大きなイベントは日本人会と共同で計画し、実行した。授業で何をするかも学習者が自分たちでアンケートをとってくれたので、それをカリキュラムに取り入れて行っていた。小さな日本人会なので、一人ひとりの頑張りはそのまま家族や友人にはっきり届いた。学習者がイキイキとした顔つきになり、目の輝きが強くなったときに、このスタイルは私のやりたい日本語学校だと確信した。私が一人でできることは小さく限りがあるが、学習者同士が集まって教えあったり触れ合ったり、得意なところを活かし、交換したり場所を作ることがとても大事だと思っている。このスタイルは一昨年前にブラジルの日本語教育の大きな課題である「複式授業」と日本人会衰退化を解決するいいチャンスではないかと思ったことから始まった。現在はコロナ禍でオンライン授業を試行錯誤中。

私の理想の教師像は学習者の人生に関わっていることを自覚し、行動に責任を持ち、思いやりを持った応援者として存在して、日本語を教えることを学びつづけ工夫し、内省できる人。学習者や学校を日本人会、地域とつなぎ、経験や活躍の場所をつくり、視野を広げるきっかけをつくれる人。学習者が日本語を身につけたらどんないいことがあって、それがその学習者の周りにどんな影響を与え、それが社会をどう巻き込んで何が変わっていくのか、学習者は何で日本語を勉強するのか、何のためか、幸せになれるのか等を考えることが好きな人。もっと想像力を働かせることを教師養成講座や研修でもやっていけたらいいと思う。

資格を持った人間を尊敬する傾向が強いこの国で「教師資格」にもっと本物の価値をつけていくことをやってみたい。それはもしかしたら、今なら劣悪待遇を変える大きなきっかけとなるのかもしれないと何かワクワクする。

一度しかない今日をこのおもしろい国で、なにか楽しかったな、ありがたいな、日本語教師でよかったなと思える毎日を送っていきたい。

出来たらインタビューの相手を細川先生にお願いしたいです。

## 2. 対話—横溝みえ—細川英雄

・この人物を選んだ理由:

- 1) 一期一会だから。このような機会は人生でめったにない千載一遇のチャンスだから。
- 2) みなさんとの動機文のやりとりを読んで、感動したから。考えさせるきっかけを出したり、決して押し付けではないが、本音を語らずにはいられない、その秘密を知りたかったから。
- 3) 私の未熟な点や、まだ不確かで定まっていないことへの何か光のようなものが、細川先生とお話することできっと現れてくると思ったから。
- 4) 絶対的な憧れから。

## 2.1「日本語教師の待遇改善策はやっぱりひとりの意識改革！」

(略)(日本語教師の地位が低いこと、日本の地方のボランティアに頼っている現実。研究と教育。日本語教育能力検定、日本語教育推進法の話になった。)

わたし:海外も支援があるから、すごいチャンスだとは思っているんですけど、お金もらったり、いろいろしたところで、今のままでは、こっちでうまいこと使えないんじゃないかと思ってて。。

細川先生:やっぱり、お金の問題は重要だけど、最終的にはお金では解決できない問題もたくさんあるから。。。

わたし:うーん。。。

細川先生:と思うんですよね、それは要するにみんなが幸せになるためには、お金さえあればいいかっていうと、そういうわけではない。

わたし:はははは。。むしろ無いほうが幸せなときもあるし。。

細川先生:ありますよね。だからこの教育っていうのも制度、資格っていうのがきちんとすれば、日本語教育そのものがよくなるかっていうとそうともいえないような気がするし。。。

わたし:ええ。。なんか。。。

細川先生:一人ひとりの意識みたいなものかなあ。

わたし:やっぱり、その一意識改革っていうか！

細川先生:そうですね。

わたし:ひとりが自分の仕事にプライドを持って、学習者と一緒に取り組むっていうことに、そこに幸せを見出す人がみんな日本語教師になってたら、もっと別に待遇改善とか、なんたらかんたらってやらなくてもいいと思うんですけど。

細川先生:ははは、そうですね。

## 2.2「日本語教師の一人ひとりの幸せって何かな？一度集まって考えてみたいな。」

細川先生:(社会の序列化、画一性、多様化の話、)

わたし:今、ものすごい変わりそう。。世の中が今まで思っていたこと、特に教育の世界ではものすごい変わってるし、これから変わる。。(略)、これをチャンスみたいに变えるにはどうしたらいい

いのかなって思っているんですけど、多様化なら多様化でそれぞれがオンラインとかで、学習者の満足するものを先生はしようとしていて、前より、学習者の気持ちに近づくとか、工夫するとか増えているとは思うんですよ。

細川先生： うんうん、それだから結局は90年代の後半に起こったいわゆるポストモダンとか、脱植民地主義とかね。大量生産じゃない形で教育、教育だけじゃあないけど、いろんなことを考えていこうっていう動きが起こってきて、それで 近代国家、っていうか近代が非常に動いてきた、軍隊を作るように動いてきたものへの反発でしょ。 また、今回コロナの、きっかけとして、再燃している感じはありますね。火が付いたっていう感じがある。

わたし：心地いいんですかね？みんな一緒だと。

細川先生：考えないこと？

わたし：考えない、わはは。

細川先生：考えないことで安心してられるっていう。まあ、物事が変わることはすごくある意味では不安もあるし、先が見えないそういうことがあって、嫌がる人はいますね。

わたし：確かに！なんか考えない人が多い。

細川先生：それはそうだと思いますよ。

わたし： 考えて、それぞれの幸せとか、日本語教育で私がやっていく意義を考えましょう。っていうのって、大段的にそが一番に掲げたことないんですよ。私。例えば研修会とかで、「楽しく教える」とか「学習者に合わせて」とかやっているけど、教師が貴方の幸せのためにもっといろいろ毎日を工夫しましょうとか やったら面白いですよ。

細川先生：本来はそうならざるを得ないというか、一人ひとりが、自分を取り戻すというかね。

わたし：自分を取り戻す！

細川先生：結局は制度とか社会とか体制とかいうものに巻き込まれてしまう。 大事なのは個人のひとりひとりの生き方というか、幸せであるわけだから、それがどうやって大事にされ、大切にすかかっていう話だと思うんですよ。それは逆に言うと近代という社会の中で封じ込められてきた、どうしても国家優先だから、国のためにこうあるべきだ、というような考え方。理想的な人物像とか……。理想的な、なんていうんだろう。

わたし： 人に求められるものに応えようみたいな、

細川先生 そうそう、自分の好きなことややりたいこと、実現してはいけないっていうまあひとつの倫理観のようなものが生まれてしまって、特に経済発展のさなかにとっても強く広がりましたよね。

わたし：今もなんかそんな……。

細川先生:今もありますよ。

わたし:(コロナ禍のブラジルの大統領とか工場の偉い人とかの話をして)わざとそれを使ってわたし働かなきゃいけない、経済がないとどっちみち生きていたってどうぜ死ぬんだ、働かなきゃいけない。自分の幸せとか、「じゃああなたはどうなの」っていう「問いかけ」がないから、それに巻き込まれちゃうんですかね。やっぱり。

細川先生:したいことは何だろう、やりたいことは何だろう、どうやって実現していけばいいかって考えていきたいですよ。そのように考えること自体を封印されてしまう。自分の好きなことをして、暮らしてはいけないんだっていう・・・。

わたし:そうそうそういう感じがあります。何か贅沢だみたいな感じがあります。何ですかね。

細川先生:それだから、

わたし:そう考える人が多いと、経済が、上の人が、金持ちが損するからですかね。

細川先生:経済の発展のためには消費する人、される人、そういう関係が、むしろ階層化していくことが望ましいっていう風に考えるわけですから、経済発展こそが国の幸せだっていう、社会の幸せだっていう風に考える。

わたし:子供たちにもっとしたいことをしなさいって、今、ちっちゃい時だったら聞くじゃないですか。先生のこと。もっと私たちが「好きなことしていいよ」って言っていいですよ。もっと、私たちは。

細川先生:そういうことですね。

### 2.3『自分を取りもどす！』こと、私も含めて。」

わたし:今、生きてくっていか、ご飯食べられないところにいると、今、私がしたいことはなんだ、考える余裕というんですかね。考える余地がないところにいるというんですかね、そこにいる子供たちに、どういう風にしたら、言ったら、自分の幸せはなんだろう、自分を大切にすることなんだって言えるかなーって思っているんですけど、

細川先生:それはまさにフレイレが「自分を取りもどす」フレイレが言った、書くことを学ぶこと

わたし:あー書くこと！

細川先生:識字教育、書くことを学ぶこと身につけることによって自分を取り戻すことができる。

わたし:そうか！今私たちがやっているこの先生が最初に言った「自分を表現する喜び」を知ればいいんだ！

細川先生:そういうことですね。

わたし:そういうこととか全然たぶんあんまり意識していなかった・・・。

細川先生:それはつながっているはずなんですよ。

わたし:書くこともできないから、例えば、自分の名前が書けないから自分の名前を書けるようになろうってことで、終わってるんですよ。そこまで。「自分を表現する喜びを知ろう!」とか、してなかった。そういうの実践的にやってなくて。

細川先生:まあそれをあまり正面に出すと、何ていうかな、それが目的になって、目的みたいになってしまって、それは抽象的な形だから、その、表現する喜びを知るっていうのも、人によっていろんな形があるんだから、あーしなければいけない、こうしなければいけないっていうのがあるわけではない。

わたし:はい、もちろん。でも、それを教師側が隠しておいて、そういう仕掛みたいなことすらもできていないから、やっぱりその、今は文字を書く、アルファベットがわかることで、終わり! みたいになっているところがすごく多いので。

細川先生:残念ですよ。

わたし:はい、その ひとつとして、もっと楽しく喜び—表現できることが、(表現できること)をみつけるところから、それも全然できていないし。

細川先生:今、みえさんが動機文に書いている、実践にしている、「文化体験」して実践している、まさにこういうことじゃないかな?

わたし:でも、コロナで残念で、オンラインでストップしています。皆、乗ってこなくて・・・。

細川先生:鎮静すればまた、できることがあると思いますよ。

細川先生: 活動—体験するまさに活動っていうかな体験する。これは日本文化でなくてもいいと思いますけど、いろんな体験することを通じて自分にとってどんな意味があるのかっていうようなことを考えていく。みんなでわいわい騒ぐのは楽しいんだけど、それだけで終わってしまうと、要するにイベント。イベントを通して、さらにもう少し、もうひとつちよっと先にみんなで行けるっていうか。

わたし:そうなんですよね。そう。

細川先生:そういうことが入ってくるととてもいいと思います。

わたし:足りないのは今、すごいそこで。楽しくみんなでわいわいやって、振り返って、自分で何ができたかとか、いろいろ、振り返ってちよろちよろやってたけど、全然ちよろちよろだったなあ、って今はすごく思っているんですよ。だからこそその子たちと今、一緒に走っていないのかなあ。わたしが仕掛けていないなあと思っているんですよ。



細川先生: イベントは一つのいい入り口にはなるけれど、継続する、続けることによって、その体験の意味というか。なんでこういう活動をしているのか考えてみたり、自分はどのような活動をしたいのか自分たちで作ってみたりとかね。しかもそれを継続的にやっていく。いわゆる教科書を勉強することではなくて、受け身ではない。もっと積極的な形、姿勢がでてくる。全ての教育がそうだと思います。

わたし: はい、何かその・・・

細川先生: まあ難しいですね。誰がデザインして、発想とか思いつきとか重要だから、毎回違うし。

わたし: はい、小さい会なので、いろいろみんなで話し合っ決めてたりしてたんですけど、なんだろう「浅い」っていうか。作りたい食べものを変えているだけとか。どうしてそれをするか、社会の役に立ちたいとか、求めちゃいけないけど、何か自分たちの楽しみだけでおわっている感じがあって、

細川先生: 継続して行っていけば・・・。みんなで活動の意味を考えて、カリキュラム、スケジュールの中に組み入れていけば、かなりいろいろなことができると・・・。

わたし: はい。うん。

## 2.4「複式活動クラスをもっと考えながら宣伝してみよう。」

細川先生: 教育学の世界では、最近の教育学の世界では、むしろ複式こそ意味がある。

わたし: はい、本当にそう思います。

細川先生: それは、さっき言った画一性と序列化の問題ともつながっているんですけど。みんな同じじゃないといけないというふうに思い込んでいる。本当は学びっていうのはひとりひとり違うわけで、学びのリソース、もとは外から来るんじゃなくて、実はひとりひとりの中にある。

わたし: それこそ、パウロフレイリですね。

細川先生: うん。ひとりひとりの中にあるものを出しあって、そこでみんなで考えていく。学びはとても共同的になっていくし、意味がある。

どうしても教科書が中心になると問題となるのは、それが絶対で、それを勉強することが学びだとおもいこんじゃうわけですね。知識とか学ぶべきものは外にある。吸収することだけが学びだっというように思いこんでいることが問題。

わたし: 与えたいみたいな教師とかいますもんね。

細川先生: その人自身が与えられたいんですよ。

わたし: はははは、そうそうそうそう。

細川先生: いいものは 外にあって、外側から何かいいものを学びたい、吸収したい願望が非常に強いとそうになってしまう。

わたし: 自分の中にあるよーって思える人はいいいけど、完全に外からもらいたいい人はいいですよね。しょうがないっていうか。

細川先生: そうだけどね、実はもらいたいと思っているけれど、みんなそれぞれ持っているわけで、それぞれ持っていること、それに気づくことが重要なわけでしょ。

わたし: 自分の中に、気づけたらいいですよね

細川先生: 気づけるような場を作っていくっていうのがね。

わたし: すごい変わった子たちがいっぱいいて、ある時から。そういうのを見ると、ただただ教科書をやってただけじゃあ変われなかつたらうな。そういうのを増やすっていう。

細川先生: 複式クラスのいいのは、そういうものをとりだしていくためのすごくいい条件なんですよ。

わたし: はい、はい、私も本当にすごくそう思うんですよ。

細川先生: いろんな年齢の人がいる、違う背景の人がいるということですよ。

どうしても教育は同じ背景同じ能力同じ年齢そろったほうが、それが教えやすいと 思いこんじゃっている。

わたし: 思いこんじゃってる。思いこんじゃっている。

細川先生: それはどうしてかという、決まった教材、教科書—機械的に一斉に教えるのはやりやすい。工場生産的ですよ。

わたし: それ、なんかぶち破りたいんですけど、

細川先生: 複式学級こそをどんどん広げていく。

わたし: やっぱり発表しないといけないですかね、発表しても、今いち響かないっていうか、あんたは明るいからできるけど・・・(ここ秘密)

細川先生: 若い先生で活動型に対して共感してくれる人を一人か二人みつけてね、一緒にチームでやれば雰囲気は伝わるんじゃないですか。

わたし: うん、若い人には伝わる！ やわらかいから。

細川先生: 仲間を増やすことを……。増やしていく。必ずしも同じ考えを持っていなければいけないわけじゃないし連帯連携できる人をそういう仲間を。

わたし: もうちょっと……。発信してないし、あんまり。

細川先生: 繋がるためには、呼び寄せる大事かもしれない。

わたし: それとあと裏づけをもう少し強くして。

細川先生: 結構増えてきてはいるから、専門的にも教育学的にも見直されてきているから。仲間はたくさんいますよ。

わたし: ブラジルに限らなくてもいいですもんね。でもなんか見えてきた。

資格とか、そっち頑張るのあんまり楽しくないんで、一人でできないし……。

細川先生: 違う力ってうか、違うエネルギーが必要になりますよね。

わたし: 今やってることを広げて、好きなこと、もっとおもしろいことを仕掛けて。

(略)(日本人会の話)

特にブラジルの場合は日本人会がコミュニティになっているから。

ある意味新しい日本人会一若い学習者。非日系人をとりこむ。

日系と非日系をどうやって混ぜるか。日系だけだと限界があるかもしれない。

大きな力のような気がしますね。若い世代、非日系、彼らと複式、活動型と一緒に考える。通信大学の学生とも連携。一緒に考えてみよう、など)

細川先生: 活動型が広がりにくいのはどうしてもマニュアル化できないから。

わたし: はい、でも、基本的な考え方とか、共同学習とか、理論的なこととか、

細川先生: そうそう、考え方なんです。考え方、立場、発想そういうものさえ共有していれば、現れてくる形はいろんな形があつていいわけだから、そういう風に考えればどんどん広がっていくと思いますよ。

わたし: やっぱり、考えられる教師を増やすってことですね。

細川先生: ははは。まあまあそうですね。

わたし:結局、考えるっていうのがテーマっていうかキーワードだなあつ。

細川先生:もっとそれぞれが自分のしたいことやりたいことをどうやって実現したらいいか、考えていいんだ。っていう場を作っていく。

わたし:考えていいんだ。

細川先生:余計な事を考えちゃうと、今すでにある形をつくったひと、その中にいる人に都合が悪い場合もある

わたし:自己否定になっちゃう人も・・・。

細川先生:変わってくには変わっていったいい、変わるには考える。そのもとになるのは一人ひとりの興味関心ですよ。

わたし:そこを大事に。

細川先生:個人的な、そこから始まる。

わたし:個人の幸せですもんね。私とその人の幸せ、わからないし。

細川先生:そうそうそう。

わたし:あー、なんかおもしろくなってきたー！！！！

細川先生:まとめりそうですか。

わたし:ぼんやり、わかったような気になっていたことが、バラバラだったことがまとまってきた。向かう方向が強くなった感じがします。

**質問したまとめ:**「細川先生みたいに対話できるようになりたい。」のメモ

どうしたら、先生みたいになれるのか質問しました。皆さんにも参考になるかと思います。ここに箇条書きですが、共有します。

- ・力を加えて動くものではない、待つ。いい意味である意味では場にまかせる。言いたいことははっきり言ったら相手は考える。デーンと構えて。

- ・「ひとりひとりのことはその人にしかわからない。」それに気が付くまで細川先生も時間がかかった。想定通りにはいかないことが当たり前。毎回違うものを楽しむ。行けるところまで行ってみる。

**対話を終えて、感謝の言葉:**

細川先生と話したあとの私の幸せそうな満足した顔は自分で見ても本当にいい笑顔でした！ありがたいです。本当にありがとうございます。

### 3. 結論・まとめ(自分の考えのまとめ)

今までの自分とは違うパワーアップした自分がいる。今までも迷っていたわけではないが、特にこれといった確信が持っていたわけではない。今までの「ブラジルの日本語教育を良くしたい」という漠然とした思い。すぐに一人で何かできるわけではないが、全く何もできないとも思っていない。そんな自分の今すべきことやしたいこと、やってみたいことがはっきりした。まずは、仲間を増やす。または、仲間との絆をさらに強くする。この活動で、細川先生の問いかけに答えたり、仲間と本音でやりとりしたりして、いかに「人とのつながり」や「他者とのやりとり」で自分をひきだしてもらえるか、また、その人たちがどんなに大切かがわかった。心から信頼できる人達とのつながりを大切にしたい。そしてその繋がりが広がるといいと思う。

日本語教師の待遇改善策はもちろん教師資格試験作成や奨学金作戦などの提案や企画はもっと積極的に行っていきたいが、それと同時に、ひとりひとりの幸せをもっと感じる—考える「幸せ」な日本語教師像を思い描くワークショップのようなものを開催したい。教師である自分も、学習者と共にもっと幸せになっていいんだと考える会を開いて、何かふんわりともっとハッピーな集団になりたい。待遇面はさておき、教育者にふさわしい日本語教師が増えていけば、ブラジルの(日本語)教育の質は上がる。視野が広がると相手を受け入れる許容量が増える可能性は高まるから、教師に認めてもらえる生徒が増える。認めてもらえた経験は「個」を強く大切なものと感じるきっかけとなる。そもそも「幸せ」は伝わり広がっていくものだと思うから、日本語学校から「幸せ」のものを発信することができるという素敵なアイデアをたくさんの人と考えていきたい。

また、私に今まで足りなかった「心を通わせて書く」「書くから心が通い合う」という活動をもっと積極的に行っていきたい。そして、ブラジルの日系日本語学校にとっても合っているひとつのスタイル—“複式学級活動型”の基本的な考え方をみんなで学ぶ機会をつくって、広めていけたら、日本語学校が活気にあふれ、地域を巻き込み、ブラジルを変えていくことにつながっていくと思う。

#### 後書き

この対話の活動がもたらしてくれた「仲間との信頼関係」と、そこからくる「自分を含めたグループへの強い肯定感」に心から感謝したいと思う。この対話活動の前から一緒に働いてきた仲間、友人、知り合いだった人がたくさんいるが、この活動を通して、たった2か月で信頼度が各段と深まり、「私は、素敵なチームに属している。」という誇らしいような感情がうまれている。今までの人間関係も浅くはなく、いい関係だったのだが、それがさらに強く固く深い何かでつながった感覚がある。尊敬できる仲間がいる私は何をするのにでも「私以上の私」でいられる。

また、この活動を通し、よくわかったことがある。「ブラジルの歴史作りに参加する」と恩師森脇礼之先生が、いつも言っていたフレーズだ。酔っぱらって笑って唄って笛吹いた後に、時々でてくるこの言葉。それは何か夢物語のように感じていたのだが、今は夢でもなければ幻でもなく、その意味がよくわかる。ひとつひとつ小さなことから始めて、幸せな日本語教師を増やす(まずは、自分になる)。「幸せとは何なのか」幸福の定義も感じ方もそれは人それぞれ。私はブラジルの歴史を作るひとりとしてしっかり根をはって生きていくことを積極的に楽しんでいきたいと思う。

そして、いつか私も「人から何か溢れださせる」人になりたいと思う。引っ張り出すわけでもなく、背中を押すわけでもない。「その人のことはその人にしかわからない。」という言葉に胸に刻み、もっと本を読んで、深く思考し、友と語り合い、少しずつ理想に近づいていきたい

この活動は終了ですが、私にとっては本当にいいスタートだと思っています。感謝の気持ちでいっぱいです。皆様、これからも、よろしくお祈りします。そして、本当にありがとうございます。

## メンバーのコメント

### ☆動機と理由へのコメント

Hideo Hosokawa先生

横溝みえさん、ありがとうございます。ブラジルの日本語教育についてのみえさんの考え方、よくわかります。とても大きな問題なので、簡単には解決しないと思いますが、少しずつ状況も変わってくるように思います。なお、できれば、みえさんのめざしている日本語教育の姿をもう少し具体的に書いてもらえるとわかりやすいです。なかほどに「書くこと」への批判がありましたが、このテーブルでも、みなさんに書いてもらっています。みえさんは、毎日の教室で、どのような教育実践活動がされているのでしょうか。それを具体的に教えてほしいし、そのようなご自身の立場をつくったきっかけがわかるとなうれしいです。

Alessandra Miyuki Hasegawaさん

みえ先生の文にすごく、すごく共感しました。みえ先生は教師の質を上げることによって、意識を変えていこうとしているんですね。ふと、運営側の意識も変えられるきっかけって何かないかな、と思ってしまいました。このお仕事始めてから、素敵な先生たちに出会って来ていますが、運営側との関係で厳しい状況(金銭面だけではなく)で働かされている人もいます。いい先生がいるのに、運営側は変わらない。先生は直接生徒に反映する人物なのに、運営側と教師との間で教育に対する差が愕然とあり、教師の力が発揮されていない様子も聞きます。でもそこには古くからの付き合いもあったりして…と若い先生が続けづらい状況もあります。難しい問題ですが、少しずつでもみんなの意識が変わって行って、みんながよい方向へと歩めるようになってほしいなと、いつも思っています。

Sandra Terumi Suenaga Kawabataさん

みえさんのブラジルの日本語教育に対する熱い思い、すごくよくわかります。そして、まだまだ解決すべき問題、課題は多いということも。しかし、このような状況の中で「一度しかない今日をこのおもしろい国で、今日もなにか楽しかったな、ありがたいなと思える毎日を送っていきたい。」という気持ちで、前向きに生きているみえさん、すごいと思います。その熱い思いがあるからこそ、今のみえさんの実践があると思いますので、そこを私ももっと知りたいです。そして、多くの人に知ってもらいたいです。

私の返信→サンドラさま、メッセージありがとうございます。信頼できる友達に、すごいと思ってもらったことをこうして文字で表現してもらえることは、「ものすごく嬉しい！！」です。今、気がついたことは、サンドラさんの存在が私にはとても貴重だからその人からの肯定的な発言は、私の生きる前向きエネルギーを増強していく何かに変わるということです。大げさかもしれないけど、本当です。近くで一緒に見ていてくれて、行きたい方向を理解してくれてると感じられる人ってそんなにいないし、(もちろん、全部じゃないけど)ありがたい。私も、サンドラさんのことを「すごい！」と思っています。押しつけがましくなくサラリと本質をつきながら人を攻撃しないで導ける能力が特に天才的！！もちろん、そこには人にみせない努力があることも知っています。大好きな仲間がいるということが何よりうれしいです。これからもどうぞよろしくお祈りします。

ところで、第三回目の動機文に「実践」の一部をちらっと書いたのですが、もっと詳しく書いたほうがいいですか？もし時間があったら読んで、またメッセージください。感謝です！！

### ☆対話へのコメント

Hideo Hosokawa先生

ファイル、開けました!! ミエさん、ありがとう。内容、対話の感動がそのまま伝わってくるようで、うれしいです。結論を少し整理すれば、完成ですね。よろしく。

Alessandra Miyuki Hasegawaさん

みえ先生の言う「待遇改善」とはどのようなことですか？

今、私は色々な意味で現職場の待遇改善に立ち向かっています、が、心が折れそうです。私が主張しようとしていることはわがままなのか、と思ったり、でも生徒のことを思ったり、持続可能な日本語学校の形、と思うとやっぱり今のままでは限界がくると思っています。

複式クラスについてのご意見、とても参考になりました。

実は、うちの学校も単式がいいと教師は思っています。複式クラスもあるんですが、恥ずかしながら、やっぱり教師側が教えるのが、生徒を待たせてしまう、複式だと一コマに5人いけば、5授業の準備をしなければならないため、今の許されている時間内では到底一人一人に力を入れてあげることができない、など色々な理由で単式を好んでしまいます。でも単式になると思うことは、それぞれの覚える速さも何もかもが違う、ということで結局早くできる生徒を待たせることになるので、一人一人にどのようにして向き合うか、という事をよく考えさせられます。親御さんや文協側の見えないプレッシャーにも応えようとしている部分があるのかもしれませんが。教師としては、一人一人の心と向き合いながらお仕事することを自分では大事にしているつもりなんです(まだ出来ていません…)、親御さんにはそこまで見えないようで、日本語能力の伸びだけを要求されることもあります。うちでは週に1回文化授業があり(コロナ前)、その文化授業では折り紙や料理教室など色々な活動を通して日本文化を紹介するんですが、私はそこでこそ生徒の内面的なものの伸びがあると思っているんですが、生徒から「お母さんが文化の授業は休んでもいいって言われた(日本語の読み書きの授業じゃないから)」って言われたと言われ教師一同涙がロリ。人それぞれの考えなので仕方ないですが…

そこで、お二人の対話でも出てきている「教育」という概念に関して深く考えさせられます。教育は国の大量生産のようにしているのではないかと、とも最近思っていました。テストでいい点が取れること、いい大学に受かることが親御さんたちから「教育」と思われているのではないかと。何か大切なものを忘れている…。色々な考えが巡り、もっと学校を良くしたいと思う反面、文頭の「待遇改善」という問題にもまたぶつかります。

でも、複式クラスについて再度考えさせられました。本当に貴重なご意見ありがとうございます。

Matsuda Makiko 先生

みゆきさんのご意見とても興味深く読ませていただきました。私も文協立の日本語学校は文化活動がとても大切な教育の場になっていると思います。また、教える人は教師だけでないと思います。複式の良さはそれぞれが協働的にかかわれることにあるように思います。

☆仲間のコメント(私のコメントへの仲間の返事)

Eriko Nakajima さん

みえさん、コメントありがとうございます。いつでも、何でも言ってください!この活動を通して、私も皆さんのことを益々知り、益々好きになりました。心を裸にしてみると好きになれる関係ってすごいですね。

# 私の中の日系

山本カーリーナ

## 1. 動機と理由

私の興味のあるものの中に、日系人や日系社会がある。

私自身は、アルゼンチンで生まれた。だが、ちょうど2歳になる月に日本へ行ったので、日本社会で育つことになった。両親共に日本人だ。ならば、普通の日本人だろうとおっしゃる方もいる。スペイン語も話せないし。だが、もし私がネイティブ並みのスペイン語が話せたら、どうだろうか。印象はずいぶん変わると思う。何かしらのつながりを探すのではないだろうか。母方の祖父母はこちらの土に還ったという、それで納得する方もいた。

言語の面からみると、ひとつには家庭内の使用言語と育った社会での使用言語が一致するかどうか、両親の母語が同一かどうかなどの影響により、複言語という生活環境が日系には密接に存在すると思われる。その環境は豊かな土壌のように複言語の子どもをのびのびと育てるように思う。そう思うのだが、2世にとってはやはり大変なもので、ある程度成長するまでは必至で勉強することになるようだ。ただ個人的な印象でいうと、家庭内での日常会話のみが日本語で、現地学校での言語がスペイン語の場合、わりと成功しているように思う。医者になる2世もいて、素晴らしいことだ。

私の育った環境でいうと、家庭内でも学校でも日本語だった。たまにアルゼンチンから親戚や知り合いが来て、両親もスペイン語で話していたが、相手によってはうちな一ぐちにもなり、大阪弁もまじり、今思えばおもしろい環境だった。ちなみに両親がけんかする時には子供がわからないようにスペイン語で話していた。

日本とアルゼンチンとどちらが好きかと聞かれることがある。私は日本が好きだし、アルゼンチンも好きだ。どちらからも影響を受けて生きていると思う。当たり前のことだが、どちらにも長所短所がある。

私にとってアルゼンチンは日本以外の他の国とは違う。母は私が子供の頃からアルゼンチンはよかったですとよく言っていた。思ったことをはっきり言えるし、感情表現がストレートなので、複雑に考える必要はない。お洒落だからTシャツもアイロンをかけるし、エプロンで近所に出ることもない。また、出かける時はきちんと革靴を履く(これらについては時代によっての変化もある)。

大人になってから、アルゼンチンでの生活を始めた。日系人との関わり、日系社会との関わりの中で、日本と重なる部分、違いを感じる部分、その距離感。そこから、日本の生活を振り返った時、アルゼンチンと日本の豊かさの違いにも思い至る。

日本とアルゼンチンは、地球の反対側にあるからというわけではないが、いろいろな事柄で逆さになっているように感じる。経済面でいうと、日本では円安になれば輸出が伸びるので、ある程度歓迎され



るが、アルゼンチンではペソ安はインフレと直結して、頭痛のタネである。時々、デフォルトを起こすのだが、みんな生命力が強く、どうにか生きていく。日本人ならデフォルトが起こるかもという噂だけで、寿命が縮むんじゃないだろうか。仕事の進め方を比べると、日本では準備万端に計画通りに着実に進めていくが、アルゼンチンではぎりぎりまで、できるのかどうか不安になっても、本番に強いというべきか、最後の力技でやり切ってしまうエネルギーがある。終わり良ければ全て良しの精神である。なんとなくではあるが、お互い持っているものが違い、日本人は心の余裕を欲し、アルゼンチン人は物質的な豊かさに魅力を感じるのではないか。日本には思いやりがある。アルゼンチンにはさりげない優しさがある。心の温かさは同じでも現れ方が違うのだろう。

日系人はアルゼンチン人と日本人の間において、2世、3世と世代が下るにつれ、アルゼンチンの方へシフトしていくようだ。もちろん家庭や個人によっても違うと思うが。

アルゼンチン以外の南米の日系人と話すと、また何か違いがあるように感じる。歴史や地理が関わるのか、それぞれの国柄が関わるのか、興味深いところだ。

故郷を離れ、遠い国へ出稼ぎに来て、いつか帰ると思っていたのが、家族ごとその国に根を下ろすことになった1世。言葉も通じないところで、必死になって働き、子供を育てる。そんな姿を見ながら育った2世も多いことだろう。その成長過程では、子供の方がスペイン語ができるようになって、親よりも社会的な言語力が勝るといふ事も起こり、家庭内でのある意味でのパワーバランスが崩れた例もあるのではないか。呼び寄せで渡った子どもより、現地生まれの子どもを優遇するような事もあったように思う。呼び寄せで来た子どもは日本人、現地生まれの子どもは2世で、2世は言葉ができるので役に立つというように。そのあたりで、日本語のプレゼンスというか、価値が低く見られる背景が生まれたような気がする。

日本人とアルゼンチン人では表現方法も異なる。子供への接し方も当然違いが出る。Besitoしたり、抱きしめたりするアルゼンチン人の友達の親の姿などを見て、2世は自分の親の接し方の違いに寂しく感じたという話も聞く。親が子を想う心はどこの人間でも同じだろうが、家庭内での文化の隔たりというものが、言語と同様に存在していたとも推察される。

アイデンティティというものが、自分が経験してきたことも含めて、様々な要素から成り、今の自分を作り上げているものだとすると、これを自覚すること、客観視することが自己肯定につながり、自信を持ち、他人を受け入れたり、寛容の心が持てる素地になるのではないか。

日系人のアイデンティティの中には、それぞれの国や日系社会という環境が編みこまれているし、それに縛られていると感じることもあるかもしれないが、良い面がたくさんあり、日系人としての心や誇りを支えているのではないかと思う。

## 2. 対話

自分の興味・関心とその理由：

アイデンティティはその人の中にあるもので、その人に関わるいろいろな事柄(背景や過去も含む)が絡み合っていてできている内的、精神的なものだ。他の人が規定できない。

## 人物インタビュー

・対話の相手：リタ・プリエトさん

・この人物を選んだ理由：リタ・プリエトさんを選んだ理由は、なんでも話ができ、はっきりと意見を言ってくれると思ったからです。もちろん、尊敬しています。

### 2.1「生まれた場所」

リタさん：その国で生まれたからその国の国籍とか、血がその国だからその国の国籍とかは、どう思う？

わたし：法律でいうと出生地主義とかいろいろあると思うけど、アイデンティティというのは、法律の話ではないと思う。その人が自分をどう捉えるか。

リタさん：たとえば日本人の大使の子どもだったら、外国で生まれていろいろな国で育つけれど日本人だし、他の国で生まれても、日本人なんじゃないかな。

わたし：それは、その人が日本人だと思っていれば、日本人だと思う。

リタさん：自分のことと考えないで、たとえばアフリカで生まれた人がアメリカで育っても、アフリカ人と思うのか。

わたし：どこで生まれ育ったにしても、その人がアフリカ人だと思うなら、それでいいと思う。もしその国が好きで、その国の人だと思うなら、それでいいと思う。

### 2.2「祖父母」

リタさん：頭で考えているように感じる。心とか気持ちで、なぜ自分が日系だと思うのか、知りたい。

わたし：自分が育った環境としては、日本だけどアルゼンチンから親戚や両親の友人が時々お客さんとして来て、両親はスペイン語で話したりしていたし、父や母は20年以上アルゼンチンに住んでいたこともあり、自分にとってその要素は“0”ではない。母からアルゼンチンにいたころの懐かしい思い出を聞かされていたし。普通の日本人では祖父母は4人とも日本にいるのが普通だろうが、母方の祖父母はずっとアルゼンチンにいたわけで、骨を埋めたのはアルゼンチンの地だし。

リタさん：おじいさん、おばあさんのお墓がアルゼンチンにあるというのが、一番納得できた。

わたし：アイデンティティというのは、綱のように一本一本のいろいろな要素、どこで生まれた、両親はどんな人だった、育った環境、小さい頃の経験、その人のまわりにあったものが撚り合わさってできているものだと思う。だから私の中に日本人の要素も日系アルゼンチン人の要素もあるんだと思う。そういう、人の背景とかも含めて、その人を形作るものがすべてアイデンティティに織り込まれていると思う。

## 3. 結論・まとめ

リタさんにインタビューをしていただいたり、皆様とグループでの会話をしている中で、日系ということにこだわっている自分を感じた。それはやはり自分を理解したいし、理解してほしいということなんだと思った。日々雑多な用事に追われ、なかなか自分について一所懸命考える時間もなかった。今現在自分について考えることをまとめられて良かったと思う。考えというものは変わるかもしれない、だが考えながら進んでいきたいと思う。

### おわりに

この対話活動の機会をいただき、自分について何度も顧みることになりました。はじめは自分の内面について人に話すことに抵抗を感じましたが、何度も相手の話を聞いたり、自分の気持ちを話したりしているうちに、他者の視点から自分の考えを振り返るようになったかもしれません。

インタビューだったり、ブレイクアウトルームでの会話だったり、それぞれ自分ならこう感じるという話がありました。その中で、南米に来て自分が「日本人」だとより強く感じるようになった方がいらっしやり、むしろ1世の場合はそのほうが多数だという意見が印象的でした。それはそのはずですね。でも私の場合は日系という意識が芽生えました。なぜか。おそらくは両親、特に母の影響が大きいのではないかと思います。この対話を通して様々なことを振り返ることによって、それぞれの背景や経験というものがアイデンティティというものを作り上げているのではないかと思うようになりました。自分を理解し、他人を理解しようとするのが、前向きなエネルギーを生むように思います。

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。感謝いたします。

### メンバーのコメント

#### ☆ 動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko

とてもおもしろいです。そして先日のお話と重ね合わされ、泣けてきます(T\_T)

→松田先生、あたたかいコメント、ありがとうございます。1世の方々のご苦勞は想像も及びませんが、その心情を察し、ただ敬服します。

Hideo Hosokawa

カリナさん、ありがとうございます。さいごの「日系人とはなんだろうか。この社会の育んできたものとはなんだろうか。それぞれの人生にとって、その意味は違ってくるのかもしれない。」の意味するところは何でしょうか。とても興味深い文章で、さまざまな歴史、環境など、いろいろなことを考えさせられます。だからこそ、「個人的な視点からの雑話」ではなく、「私からのメッセージ」として捉え、カリナさんの主張を思いきり展開してほしいところです。また、「日本人」「アルゼンチン人」という表現がたくさん出てきますが、それぞれ「日本人」「アルゼンチン人」とは誰のことでしょうか

→細川先生、コメントありがとうございます。「日系人とは、この社会の育んできたものとは。」の問いについては、テーマを広げすぎた感じがしましたので削除し、私の意識についてのみに絞りました。すみません。日系人とは、特に経済的な動機で日本から世界へ夢とともに飛び出した人々だと思っています。その作り出した社会とは、夢がかなった者も、かなわなかった者も、みんなが苦勞して日本人であることを守ろうとして作り、維持してきたものではないだろうかと思っています。もちろん時代や様々な要素によって変化し、現地社会との調和が成功の鍵となり、価値観も大きく変わってきたかもしれませんが、今でも遠くから故郷を思う心を受け継ぎ、それを持ち続けることがその国で生きる自分たちにとっての強味ともなる。そのような社会かと個人的には思っています。

→日本人・アルゼンチン人とは自分が日本人だ、アルゼンチン人だと思っている人の事だと思います。アルゼンチン人は50年くらい前には、まだ私はイタリア人だ、私はスペイン人だと言って、それぞれのお国自慢をしていたそうです。時を経て、その場のコミュニティのつながりが強くなり、アルゼンチン人という共通意識ができたのでしょうか。アルゼンチンでは小学校4年生で、国旗の誓いを行います。おそらくはアルゼンチンで生まれ、アルゼンチンで暮らす者たちは、この国旗の前に平等であるということで、国民がまとまることができたのか、とも思います。

Alessandra Miyuki Hasegawa

私もブラジルにいと、日系人とは…日系社会とは…と考えを巡らせる時があります。カリナさんにとっての意味を聞いてみたいと思いました！

→長谷川先生、コメントありがとうございます。人それぞれに感じることや視点が違うんだと思いますが、今でもその国の土壌で日本的要素を栄養にして、現地の水を吸い上げ、大きく育った木のような感じ がします。

Mie Yokomizo

聞いたびっくり情報がまだ衝撃的です。どうしてブラジルでは日本人はものすごく好かれているのにアルゼンチンではそうでもない。その理由が今は知りたいですー。カリナさんのテーマからまたちょっと外れちゃう？日系社会とそれぞれの国との関係や日系社会と日本との関係。いろいろ考えます！考えるスケールが大きすぎる！

日本にはないアルゼンチンのいいところって何ですか？

→横溝先生、コメントありがとうございます。スケールが大きすぎて手に余ったので、絞りました。ブラジルでは日系人の数も多く、移民資料館もあり、移民史なども受け継がれていることが大きいかもしれませんね。ジャングルを切り拓いて現在の自分たちにつながっているというのは、インパクトが大きいですよね。

→アルゼンチンの良いところは、結果が悪くても相手を責めないところ？ですかね。もちろん、場合によりませんが、寛容さを感じます。日本のように完璧に計画したらその通りにしないと、という感じではなく、その計画通りにいかない困難さが常にあり、ある種のあきらめもあるかもしれませんが、起きてしまったこと(結果)をどうこう言っても仕方がない。やるべきことをやったのなら、それ以上悔やまない。それよりも、プランBにさっと切り替えることが大事という感覚があるように思います。

グループディスカッション中のコメントで、日本人と外国人の違いとして、「仕草が違う」という指摘がありました。どちらかという、日本で育ったかどうかの違いだと思いますが、確かに仕草には相違点があると思います。

☆対話へのコメント

☆結論・まとめへのコメント

# 世界とつながるための私の生き方を探究する

濱田彩乃  
マキシモ・ブルック  
松田真希子

# 踊りが心のよりどころ

—自分を肯定できるものとして—

濱田 彩乃

## 1. 動機と理由

私は踊ることがとても好きだ。ジャズダンスとの出会いは10歳のとき。仲の良かった友人が発表会に招待してくれた。美しい衣装、お化粧を身に纏い、色とりどりのライトの下で踊る彼女はとても輝いて見えた。私もあの場所に立ってみたい、という憧れや好奇心が芽生えてきて、母親に、「私もダンス、習いたいんやけど。」と切り出したことを覚えている。レッスンに通い始めて、音楽に合わせて体を動かすことへの快感を覚えた。それに加え、小学生の頃の私は人前に立つことにためらいはなかったもので、舞台の上で表現するのを純粋に楽しんでいたのである。

しかし、中学に入り、環境が変化し、自分自身への見方も変わった。きっかけになったのはちょっとしたいじめだった。野外活動のグループリーダーになったことで、「調子に乗っている」だの、「目立ちたがっている」だのと言われた。その経験から、嫌われないためには周りの空気を読むことが大切だと察し、差し出たことはせず、クラスメイトの顔色を窺いながら地味に過ごすことで「学校での居場所」を確保していたが、そこで自分を肯定することを忘れていた。また、友達だったはずの人が次の日には敵になっている、という状況を頻繁に目にしたことで、本音で関わるより、通り一遍な付き合いをするほうが安全だと思うようになった。以来、人の目、周りからの評価が気になり、キラキラしたダンスの世界と「地味な自分」が対極に位置すると思い込んでいたので、自分の趣味については周りにあまり話さないようにしてきた。

今思えば、学校で自己表現をしない分、ダンスのレッスンが本来の自分を解放できる場で、鏡の前で踊っている姿を見て、自己顕示欲を満たしていたのかもしれない。ダンスを踊ることで、凝り固まった頭や気持ちが楽になるとともに、自信を取り戻せると感じていたのかもしれない。それもあってか、飽き性の私なのに長い期間、同じ場所に通い続けられた。

時は経ち、大学でブラジル北東部のダンスであるフォホーの同好会に参加してから、踊ること、自分を見せることに対する意識が少しずつ変わっていった。フォホーはペアで踊りながら、相手からの動きやエネルギーを受けて、自分のエネルギーを返していくが、その強弱や向き、相手との距離によって、ことに調和のとれた美しい流れになったり、荒々しいステップになったりする。そのコミュニケーションとしての側面がとても面白く、その種のダンスの虜になった。また、それは私に、人とつながっている、という安心感を与えてくれた。そして、自分の好きなものを好きだと素直に表現することによって、心が充実感で満

たされていくという感覚も味わうことができたように思う。自分を解放し、自分を肯定できること、そして、人とつながることができること。それが私が踊ることが好きな理由だと思う。

最後に、今回このテーマについて考えながら、授業で私がダンスを始めた年齢くらいの子どもたちを前に思うことは、それぞれが自分の「好き」を大切に、友達の「好き」を知る面白さに気付けるような雰囲気、機会を作っていきたい、ということ。それが将来、何かの形で彼らを支えてくれるものになるかもしれないから。私にとっての踊りがそうであったように。

## 2. 対話－Y先生との対話的活動

・この人物を選んだ理由：今回、この対話テーブルに参加されているY先生にインタビューをお願いした。この対話の場で知り合った方なので、インタビューの意図、プロジェクトの共通認識があると考えたのと、ダンスがお好きだとのことで、お話をしてみるのが楽しそうだと思ったからである。

### 2.1「踊ることのモチベーション・目的」

ダンスは二人の共通項であったが、踊ることの意味には大きな違いがあることが分かった。目標があつての面白さが「好き」で楽しんでおられたY先生と、ダンスを競技にしたことがなかった私の「好き」は異なつたが、踊っているときの高揚感などを共有することができたのは興味深かった。そして、どうして私がダンスの競技会などに参加したいと思わなかったか、をインタビュー後も考えていた。あの時はまだ、好きなダンスに他人からの評価が伴うことで、自分に自信を与えてくれていたものが無くなってしまうことへの怖さがあったのではないかと思う。

Y先生：私の学校で、誘われて踊ったとき、最初はね、私服で踊るんですね、練習の時は。でも、発表会とか学校の行事とか、コンクールがあったときなんかは、衣装を借りてきて特別にダンスの衣装を着て、なんかいいよね。衣装に着替えてみんなで踊ると、すごくまくなった気がするんだよ。

わたし：気持ちが充実するんですね。(私の場合)それに踊りが伴っていたかはわからないけど、その瞬間というか場が面白くて。だから舞台裏からいつも楽しかったです。発表会の時は。

Y先生：私は、踊っているときにはね、誰も見てくれる人はいないから。仲間がこう、横、前を見ながら、間隔を取って同じように踊ったりとか、リズムをとってというのがあったから、それはそれで楽しかったけど、人に見られるっていうのは本当に1年に2、3回ぐらい。学校の行事、プラス、コンクール、って感じで。

濱田さんはコンクールとか出てたんですか。毎年1回は。

わたし：いえ、そんなグループではなくて、私はただそのダンスグループの発表会に出ていただけです。成果発表だけで、特に競ったことはないですね。

Y先生: 競ったことはないんだ。モチベーションというか、今まで続けてきたモチベーション、というのは何なの？

わたし: どうですかね。本当に純粋に「好き」ですかね。モチベーション、何なんでしょうね。たぶん、踊っているときの自分が好きなんだと思います。(笑)

Y先生: そっか。私は一番最初に誘われたのが、コンクールに出るために誘われたから。学校の行事とか。みんなに見せるっていうことが前提で。で、最後はまあまあ上手な人が集まって、コンクールに出ましょ、っていうことで、またもう一つのモチベーションがあったんだけど。

コンクールが終わった途端、練習がなくなっちゃったんだよね。ほら、学校って、1年単位でしょ。年末に、発表会とかコンクールやったら、次の年ってまた新しいメンバーになっちゃうんだよね。子どもが卒業して親もいなくなるってこともあったし。

わたし: そうですよ。先生もグループでのダンスをされてたっておっしゃってましたもんね。

Y先生: でも父兄ばかりだったから。

わたし: それでも楽しくないですか？一つの目標に向かって。

Y先生: めっちゃ楽しかったよ。本当に楽しかった。

## 2.2「性格の話」

自分から見えている相手と、相手から見られている自分にはやはりギャップがあって、それに会話を通して気づき、そこから互いを知るために話を深めていくプロセスの大切さを改めて体感した。相手のことを聞きたいというだけじゃなく、自分のことをどこまで話そうかというコントロールを超えて、知ってもらいたいという気持ちに少しずつ変えていけたらと思った。

Y先生: 内気とか、恥ずかしがりや、って感じで「地味な自分」って書いてるのが、私は内気な性格で、恥ずかしがり屋さんなのかな、って何となくそういう風に思ったんですね。いつも何気なく、濱田さんて下を見るでしょ。

わたし: そうですか？

Y先生: 笑うときも、フフフ、って笑って。はい、という感じ。オンラインのクラスの時とかさ。やっぱちょっと内気な性格があるのかな、恥ずかしがりやなのかな、って。だから、コンクールにも自分からあんまり出たくないのかな、って。そうでもないですか？

わたし: 恥ずかしいですかね。いや、恥ずかしいというか、周りの目が気になるかな。発言もそうだし、何をするにも一度フィルターにかけてから、言うか、言わないか、みたいな。それもあって、たぶん、コンクールにも私はまあ、無理やな、と思うのか。そんな段階があつての、かもしれせん。



Y先生:それは知らない人、とですよ。あまり親しくない人、みたいな。

職場の仲間とか、友達とかだったら。

わたし:そうですね。慣れると何でも逆に話過ぎるくらいです。

Y先生:濱田さんっておしゃべり?おしゃべり好き?それとも聞く方が好き?

わたし:聞く方が…ですかね。何か話し始めると、自分のことばかり話しちゃう気がして。

Y先生:まあでも、しますか。自分の話、いっぱい?

わたし:どうですかね。抑えてる?かな。

Y先生:私はどちらかというとも何でも自分のことを喋る機会があれば、あんまり恥ずかしいって思わないし。

わたし:あ、でも、あのオンラインの会話の部分だけを見るとですけど、Y先生ってこう、お静かになさってたから、普段もあんまり話されない方なのかな、って第一印象では思ったんです。

Y先生:あ、そうなんだ。もしかしたら私も、ちょっと似てることもあるかもしれない。でもね、今のオンラインの参加の仕方って、たぶん経験からなんですよ。

わたし:それは、どういう意味で。

Y先生:経験から、その、何だろうな、言いたいことはたくさんあるけど、意見もあるし、他の人たちが言ったことに対してもなんかこう、ディスカッションみたいなのをしたいな、っていうのはあるんです。でも、若いころはそういうの沢山やってたんだけど、だんだんだんだんこう、司会をすとか運営を任されたりとかすると、自分が喋るより人が言うことを聞いたうえで、色々動くようになっちゃったっていうか。

わたし:こう、全体を俯瞰してから…。

Y先生:そう、もうね、変わっちゃったんですよ。若いころは 偉そうに 素人なのに自分の言いたいことわーって、自分がいかにも、とこう言ってたけど、だんだん年食って経験積んで来たら、私が言っちゃうともう、話が終わっちゃう、みたいな。どうしましょうか。じゃあ、こうしよう、と言ったら決まり、となることも無きにしも非ずだから。今は、自分が一番最初に何かを言っちゃうっていうのはなくて、みんなが言わないんだったら、わたし言っちゃおう、みたいな。

### 2.3「ダンスを心のよりどころに」

人の目が気になる、というのはなかなか変えられない。しんどかった時期、自分を解放できた場所であったから、ダンスには特別な思い入れがある。今、こうやって好きなものをじっくりと見つめ返せるのはとてもありがたい。この対話のテーブルがなかったら、皆さんからのコメントや、Y先生とのインタビューがな

かったら、おそらく自分を深く掘り下げて客観視することからは逃げ続けていただろう。あの経験から20年近くたってもまだ、それを自己肯定感が低いことの理由にしているのは、自分でもしょうもないと思う。だが、今回経験を隠さずに言葉にしてみたことで、ここからの見方を変えていけるような気がしている。

Y先生:ただね、彩乃さん、学生の時なんかは結構、精神的にはつらかったようなことが書いてあったから。

(…)

Y先生:学校ではなかなか自分の気持ちがこう、素直になれないっていうか。やりたいことが思いつきできない。だから、ダンスで思いつき踊って、体動かして、気持ちがいい、っていうかそこらへんが快感なのかな、って。

わたし:まさしく、そうですね。周りから、なぜか真面目にみられるんですよ。で、まとめられそう、って思われるみたいなんです。だから、結構そういうポジションにおかれることが多くて。だから、顧問とも喧嘩したことがありました。ここに書いたこととは違うんですけど、別のこともありまして。中学、バドミントン部だったんですけど。

Y先生:私、卓球部でした。

わたし:あ、ラケットつながりですね。

Y先生:何かやっぱりちょっと似てるな。

わたし:で、そんなんで、部長におかれて、顧問とめっちゃ喧嘩しました。「絶対にやりたくない」って。

Y先生:やりたくないのは? 自信がないから? それともまた、みんなに非難されることが多いっていうか?

わたし:そうですね。非難される…。ちらっと顧問が全体で言ったんですよ。今、部長には誰で、副部長には誰を考えてる、って。もう、そこからひどくて。周りからの攻撃というか。で、経緯も少し言って、「絶対にやりたくない」って顧問と喧嘩しました。

Y先生:反抗したんだね。

わたし:最大の反抗をしたつもりだったんですけど、でも顧問もすごく頭が硬くて。

まあ、そこからまた始まった、って感じですね。

Y先生:でも、彩乃さんってそんなに恥ずかしがり屋でも、そんなに内気でもない。

ダンスをしてるってことは、もっと目立ちたいのかな、って。人に見てもらおううれしい、とか、きれいな衣装着て上手に踊って。仲間とか、周りの人に見てもらったらちょっと快感っていうか。周り

の人が彩乃さんのことをみて、うわ、きれいとか、かっこいいとか。で最後、達成感があるというか。すごい充実感を感じているんだろうな、って。

わたし:その傾向はあったかもしれない。前に立つのが好きだった。小学校の時までは。

Y先生:中学校のいやな経験で辞めたんだ。

わたし:はい、やめました。これは出たらのになる、と思って。

Y先生:的になる。あ、そういう感覚なんだね。

わたし:それは、私の被害妄想も少し入っている気がします。

Y先生:出る杭は打たれる、っていうやつかな。

## 2.4「本来の自分、いつもとは違う自分」

本来の自分になれるから好きなのか、それとも、いつもと違う自分になれるから好きなのか。Y先生からの質問をいただいて、その場では答えることができなかった。動機文にも書いた通り、小学生の自分を基準に考えると前者だと思い込んでいたが、中学生以降、環境、状況の影響や変化に伴って、自分は大人しくみられることが多くなってきたし、おそらくそれで自分も納得している。とすれば、今、私がダンスが好きな理由は、後者の「いつもと違う自分が見せられて、大胆に表現できる自分がある」からなのだと思う。

Y先生:いつもと違う自分になれる、っていう感覚があるのかな。それとも、本来の私になれるっていう感覚なのかな。

わたし:そうか、そうですね。

Y先生:後は、上手に踊れる自信っていうのが長年やっててそこにはあるから、こう、リズムの取り方とか動き方っていうのは、その分の筋肉もあるだろうし。知りたいな、と思ったのは、いつもの自分がそこでは、ほんとの自分を出して、自信をもってそこでこう、踊ってるっていうのを感じるのか、それともわたし、いつもは大人しくてこんななんですけど、踊りになるとすごいでしょ、っていう充実感っていうか。

わたし:動機文を書いたときは前者だと思っていたんですよ。小さい時は前に出るのも好きだったし。だけど、今、そういわれて、それ以降の自分をいつもの自分とするならば、いつもの自分とは違う自分になれるから好きなのかもしれない。

Y先生:年齢と共に変わっていったるかもしれないですね。

わたし:そうですね。それはあるかもしれないですね。

Y先生:子どもの時の心理と、大人になってからの心理が変わっているのが当たり前だし。立場もね、大人だし、親だし、女だし。昔は子ども子ども女の子、だったのがね、変わってきてるだろうし。

## 2.5「将来的にどうしたいのか」

将来的にどうやってダンスと関わっていくのだろうかと考えたが、やはり、「自己肯定感」「解放」「つながり」という言葉が思い浮かんだ。学校の行事や趣味としてのサークル活動などで、その面白さ、奥深さを伝えていくのもいいかもしれない。

Y先生:彩乃さんもあと20年したら、ダンスのことをどう見るようになるのかな、って。だんだん教室に通うようなのはやめて、ディスコばかりに行くようになるのか、コンクールに出る機会があつてそっちに頼むのか。自分で教室開いてやってるのか。

わたし:サークル活動みたいに、自分たちで探り探り研究をしていくのも好きなんですよね。みんなYouTube見ながら、こうかな?こうかな?と言いながらやっていくのもいいかもな、と思いました。

Y先生:将来というか、これから先、ダンスに求めるものって何だろう。

どんどん変わっていくし、目指すものが出てくるのかな、とか。ただ純粋に体を動かすのが好きだから、あまり変化を求めてないのかな、とか。

わたし:それこそ、細々とでもずっとできたらいいな、という感じですかね。気分転換になるかもしれないです。

Y先生:私はすぐ何かの結果を求めたり、何か目指すものがあつたらいいなと思うんだけど、それなしでは何かあんまり。ないな。仕事をするようになったら、常に結果と目標がいつもあるから、どこで働いていても。

わたし:結果がある仕事…今はそうなんだと思うんですけど、前職を考えたら答えがない職場だったんですよね。だから、のんびりしすぎてるのもダメなんですけど、その方が楽なのかもしれないです。

Y先生:やっぱ、環境が違って、人生が違うと考え方もほんとに違うんだね。私もダンスが好きだから、彩乃さんに興味をもって、もしかしたら、共感できる、共有できる場所がもっとあるかな、とか思ったんだけど、あんまりないな。

わたし:見当違いな話ばかりでしたか。。

Y先生:いや、どっちかという、専門的なんだよね。でも専門的な割にはコンクールにも出ないし。そこが不思議なんよね。他の人の踊りを研究したりとか、別にコンクールに出るためとか、大会で競うからとか、このチームを強くしようとか、そんなとかじゃないもんね。

わたし:何のためにしていたんだ、って感じですかね。(笑) コンクールに出たいとかいう気持ちはあまりないんですよ。

Y先生:でもまだ20年あります。もしかしたら、ブラジルのサンパウロのコンクールに出て、全国に出て。私だったら目標を目指して頑張る、ってのがダンスにはあるんだけど、彩乃さんは今の形で満足されてるみたいだし。

(…)

Y先生:ダンスは学校では教えているの？

わたし:お遊戯会のためには、やったりしていますね。でも残念ながら、今年はそのお遊戯会もできないと思うんですけど。(…)

Y先生:自分が支えられたから、子どもたちにも何か、困ったらダンスだぞ、って。

わたし:ダンスに限らず何でもいいんですけどね。好きなもの、自信が持てるものを見つけてくれたら…。

### 3. 結論・まとめ

今回自分の好きなこと、興味を起点に自分の「テーマ」は何なのかを考える活動に参加させていただいた。「好きだから好き」というところ止まりで、そこまで深い意味まで考えたことのなかった私には、第一回目の対話テーブルでの説明は分かるような分からないようなで、正直戸惑っていた。そして提出した一回目の動機文。細川先生からの「自分を解放しなければならないのでしょうか、そして、人とつながることとはどのような関係があるのでしょうか」「自己の解放と人とのつながりが重要なのか、どうしてそのことが踊ることと結びついているのかを、もう少し具体的に」というコメントをいただいた。どのように書いていけばいいのか、本当に私が言いたいことはそれなのか、こんな問いかけをしながら、自分なりに文章にいった。対話テーブルに参加されている他の方々から疑問や、問いかけをいただくたびに、少し進んではまた戻り、を繰り返した。自分では言葉にはっきりと表すことのできていなかった感情を代弁していただいたことも多々あった。

自分の「テーマ」を話したり書いたりするうえで、内省をしてきたが、好きなことから考え始めたはずなのに、いつのまにか自分の弱い部分や、課題とするところ、変えたいと思っているところなどが思い浮かんできて、新しい発見に面白さを感じると同時に、その精神的な重さから、なかなか向き合えない時もあった。だが、自分から発信する体験によって、知ってもらいたい、そして相手のことをもっと知りたい、という気持ちに徐々に変わっていったのは不思議な感覚だった。一旦はこの文章を書く活動は終えることになるが、自分の「テーマ」については、じっくりゆっくり、考え続けていけたらいいと思う。

最後になりましたが、この活動で出会えた皆さまに、心から感謝いたします。本当にありがとうございます。

## メンバーのコメント

### ☆ 動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko

私はカポエラ教室に見学に行ったことがあるのですが、カポエラも似ている気がします。多くのラテンダンスは体を使った対話だなと思います。

Hideo Hosokawa

濱田彩乃さん、ありがとうございます。踊ることが彩乃さんを解放するものだという事はよくわかりました。ところで、彩乃さんを解放しないもの、つまり縛っているものは何でしょうか。踊ることが自己解放であるとするならば、むしろ自己拘束の原因・理由こそを語ることで、踊ることの意味も明確になるのではないのでしょうか。

Alessandra Miyuki Hasegawa

彩乃さんにとってのダンスは私にとってのファッションだったのかな、と読んで思いました。私にとっては解放されるものではなく、手を握って一緒に歩いてくれるものだったんですが、ファッションが好きという気持ちが当時の私を支えてくれました。だからといって、私は別に奇抜なものが好きという訳でも、絶対に流行最先端みたいなタイプでもなく、自分にはファッションが好きという資格がないんじゃないかって思ってた自信がなかった時もあったので、「対極な位置」と感じた彩乃さんの気持ちがよく分かります。

Mie Yokomizo

あやのちゃんのダンスを見たいです。芯の強い彩乃ちゃんのようなカッコいいダンスだと想像しています。好きなダンサーとかバレリーナとかいますか？  
私は、実は小学生の時に一瞬、器械体操選手になりたくてバレエを習いたかったことがあります。結局、両方しなかったけれどでもどこかに踊ることへの巨大な憧れがあります。踊れないとしたら彩乃ちゃんはどうなるのでしょうか？

tsuruchan56

自分の「好き」を大切に、友だちの「好き」を知る面白さに気づく、いいですね♪♪♪  
そんなこと意識しながら子供の成長を見守ってくれる先生、いいね！

Alessandra Miyuki Hasegawa

コロナ直後、何かダンスを習ってみたいなあとおぼやいていた私。彩乃さんの文を読んでもっと習ってみたいなくなりました！「それぞれが自分の「好き」を大切に、友達の「好き」を知る面白さに気付ける」ってとっても素敵だと思います！

### ☆ 対話へのコメント

### ☆ 結論・まとめへのコメント

Eriko Nakajima

私もダンスが大好きで、踊りは心の支えとして共に人生を送っています。綾乃さんの文章にある「日本で踊る」ということと「南米で踊る」ということの機能の違いを私も感じたことがあります。また「踊る」ことに対するイメージの違いも。そしてそれで悩む。ただ、そのような他者からの「踊り」に対する評価と、綾乃さんにとっての「踊り」の意味付けは全く別の次元に存在していると思います。でも次元を超えて影響力があるので怖いことです…。綾乃さんの「踊り」が他者からの評価によって消えなかったこと、踊りへの意味付けを共有する

者の一人として嬉しく思います。今度ぜひ一緒に踊りましょー！！日本語業界で踊れる人を見つけるのは結構難しいのですが、見つかって嬉しい！！

Juana Horikawa

綾乃さんの文章読読んで共感するところ沢山ありました。私も自分に足りないものがいっぱいあると思い学びを辞められない、教育学、大学、専門学校、大学院と給料のほとんどがそこにいつている。私も悩むことが多かったですが、この日系人移住地で日系人だから日系人の気持ちが分かって受け入れてくれていると思います。綾乃さんも学習者 一人一人と真剣に向き合っているからこそ悩まれると思いました。その気持ちは、生徒に届いていると思います。日本でお世話になった先生が、「あの子は先生の指導で成長するけど先生の方が成長させられますよ。」って言われてからいつも生徒からも学んでいると思います。これからも多く学び、いっぱい踊りましょう。

# 文学と私

ブルケ・マックシモ

## 1. 動機と理由

本を読むと、作家の感じていることを思い浮かぼうとすることが一番好きです。自分が考えたことのない感想とか見たことのない言葉に遭遇すると、頭の中に刺激が湧いてきます。遣れたことのないことが出来るようになると同じ感覚で、言葉をどんな由来やニュアンスをもっているか、作家の味方を通して世界の色がどう変わるかみたいな連想が浮かんで来て、つい笑顔をしていることに気づきます。世界観の違いの多さに実感すればするほど、それなりに自分の考え込んでいる「有り得る感情」を広げるきっかけが出来ると思っています。

例えば、私のお気に入りの辞書の序文には出版するまでの作家の仕事や期待などが載っていて、それを初めて読んだ時言語学に対するパッションが少し移りました。他はドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」に面白い宗教的な信念の対照し方に関心して、宗教哲学に目を向かせました。

そうやって色々な本を巡って美しいだと思える考えやイメージを浮かばせて、重なって行けば、人生の背景がどれだけ大きくなるかを味わえるようになって信じています。

文章を書いている時は、心を澄まして自分を顧みることによって自覚してもいない考えが見れるようになることをとても不思議に感じていて気分が和らぎます。

これを書いて気づいたことは、最近文学に関係ない勉強に夢中過ぎて、本を気楽に楽しむ心構えができていないことです。これから色んなことを考え直した、今の暮らしを犠牲にしない励み方を思い付こうとします。最後まで読んで頂いてありがとう御座いました。



## 2. 対話 — 細川英雄 — ブルケ・マックスモ

・対話の相手：細川英雄

(前省略)

細川「この動機文を読ませて貰って面白いと思うんだけど、同時に感じるのは・・・うん、マックスモさんは何をしたいっていうのが・・・マックスモさんのやりたいことはまだよく分からない——感じがします

マックスモ「動機文を眺めた時、正直自分でも「何をしているかな」を考えながら書きました。時間がなくなつて・・・動機文を出さなければならぬ時期が来て、それをそのままだしてしまつたという気分が残っています。」

細川「なるほど。あの～例えばあの～一番最初のところに作家の感じていることを思い浮かべようとするのが一番好きですと書いてありますね。そしたらその作家の感じているのは好きっていうのは何故なのか——はどうですか？」

マックスモ「そうですか？ 私としては・・・えっと——人の感じていることを思い浮かぶのは人生の一部とか・・・誰でも子供の時から感じたことがあると思いますが・・・人の感情を思い浮かぶ楽しみは他の言葉で表すにはどうすればいいんでしょうか・・・何か・・・その行為には理由があるんじゃないかと、その行為から理由が生まれると私が感じていますからどう説明すればいいのか・・・」

細川「はい、えーと・・・こういうことかしら。例えば自分が考えて・・・自分は普段感じたり考えたりしていることがあるけど他の人の文章読んだり他の人の意見を聞いたりするとその人の感じていることか感じていることを・・・まあ、知ることが出来る。そうすると今まで自分にはなかったものは見えてくるからとても可能性を感じる。そういうことですか？」

### 【自分の考え】

他の人の感情を思い浮かぶ感じが伝わらなくても、その感情による可能性なら伝わるということが以外でした。

マックスモ「はい、えっと・・・動機文のどこに書いたのかはおぼえてないのですが、自分の背景が大きくなることを味わえるようになるという文を書きました

細川「はい、背景が大きくなるのはどういう意味ですか？」

マックスモ「えっと・・・世界感の背景と言えれば自分が感じ得るものが・・・例えば本を見るとそれは紙の塊でしかないと思いついてたら他の人の本に対する愛を見たら、その感情も存在するという事に気づいてその背景が広がる。その言い方を使ったのは別に人の中に好きがあって、その

好きが本に映しているのでは無くて本に対する好きが特定で、それはまだ存在していることには気づいていない。だからその言い方でそれをはっきりしたかった。

細川「あ、なるほどなるほど。それは多分他者と自分の関係の中で自分の価値観とか感覚とかが新しく更新される・・・という意味ですか？

マックスモ「はい、その意味でもありますね。えっと、日本語の価値観はスペイン語に通訳すると「センチドデヴァロレス」[Sentido de valores]になりますけど・・・そのスペイン語の言葉は道理に近い意味があるからちょっと違いという気がありますけど・・・価値は道理だけのものではないんですね

細川「はい、だから日本語もそうですよ。価値観っていうのをちょっと道理的なものがありますよ」

マックスモ「あ、そうですか。でも限らないんですね。」

細川「うん、限りません」

マックスモ「あ、そう。じゃあ価値観でいいと思います」

細川「はい、そうですね。でもそれは必ずしも文学や言語学だけの問題ではなくて、全ての人の関係・・・他者と自分との関係で生まれてくることでしょ。そうすると何故文学なのか何故言語学なのかという所のマックスモさんの考えはあんまり述べられていないのでそこをもう少し知りたいです。

マックスモ「そうですね・・・私としては答えはちょっと変わっているかもしれないけどそこには全く理由がないと思ってます。ただ自分がそれが文学だと勝手に選んだと信じています。その感じ方はまあ・・・多分私にとって文学は総合的なものだからそれにすることにしたんですけども私の経験が違ってたらその感情はどこへでも行ってたのでしょーと思っていて、別に理由をつけるようなことはしたくなかった」

### 【自分の考え】

自分の話し言葉に無駄が多いのは多分対話十分にしていないからなのでしょう。この会話ではっきりするのはいいが多分もうちょっとこの話題を考えて置くべきでした。

細川「そうですね、でも文学はマックスモさんにとって総合的ものの理由は何ですか？」

マックスモ「何でしょう・・・文学を勉強していると・・・まあ、文章を読んでいるとその文章の内容が問わないという事があります。文章ではなく、文章の表し方はどんなものなのかを研究している、文学は。だから内容が何であっていいという・・・だからその内容を表している人の感情の全てを見ているのは文学であると私は思っています」

細川「うん、でもそうしたら優れた文学とそれほど優れていない文学があるでしょう。その優れた文学ということ・・・それは文学の世界の中で一つの価値・・・文学の価値というものがあると思う

んですね。それはマックシモさんにとってどういうものが文学として価値があるというふうに考えます」

マックシモ「そうですね、価値はあるかないかは人にとって違うから私が思っているのは文学に色んな人に伝わる力があれば・・・その人類の本能に届くようなものが書けばそれは価値があると言えると思いますけれども、それを・・・何であろうとそれに価値を与える人がいれば価値があると胸を張って言えると思いますから価値のない文章とか価値のないものがないと私は個人的に思っています」

細川「うん。まあそれはその通りだと思います、価値観っていうのは一人一人違うからこれは良くてこれはダメということは簡単に言えないということをよく分かります。だけれどもそこはやっぱりマックシモさんは自分は好きな・・・興味関心のある文学というのも多分あると思うんですね。ここにはカラマーゾフとかまあ、ドストエフスキーのことが出てきますね。そして言語学の辞書も少し書いていますね。これはつまりどういう繋がりがあるんですか？」

マックシモ「はい、えっと。ドストエフスキーの本でも、その辞書の序文でもそこに書いていたものが自分に想像していないことを見せたという繋がりがあって・・・例えば序文には言語学に対するパッションが載っていました。それをまあ多少持っていたとしてもそれを初めて読んだ時、それはどれだけ重みのあることかを実感して自分もその感情を抱こうとするようになりました。ドストエフスキーの場合は宗教について・・・まあ、カラマーゾフの兄弟の中でキリスト教についての道徳的な対照があります。神様に信じるのがいいか、悪いかそしてそこから社会がどうなるかをとても面白い書き方で表していました。だから私もそういう問題に興味を抱こうと思えるようになりました。」

細川「それはとても分かります。僕もドストエフスキーにはうん・・・興味はあるし、それからその言語学の言葉についてのパッションが伝わってくるその感覚とても僕もよく分かります。でそれはマックシモさんのこれからの職業に文学はどんな意味があるかという所がもう少し知りたい」

マックシモ「はい！そうですね。私にとって職業というのは何かを楽しまなければならないものに見えています。そして文学は私にとって文学は楽しみを広げるものに見えていますから文学は私を人的に成長させると同時に私の未来の職業にもいい影響を与えてくれると信じています」

細川「人間的な成長って何ですか？」

マックシモ「人間的な成長何ですね・・・何だろう。私としては人間的な成長は世界を楽しめるようになる事と世界にいい影響を与えられるようになるの二つの合わせに見ています」

細川「うん～、世界を楽しむことと世界に影響・・・例えばどんな影響なんですか？」

マックシモ「そうですね。周りの人の態度とか、周りの人の未来への可能性とかに影響を与えてそれを上げるということ何ですね。例えば**家族**にどうしても片づけられない問題に答えを出すとか腹が減ってなにも食べられない子供に食べ物をあげてその子供を幸せにすることとか。その幸せは必ず自分に映している方向に導きだすと思っています」

## 【自分の考え】

家族って口に出した時声が妙に枯れて面白い。この先の予告みたいですね～。

細川「そういう風に考えるようになったのは何か具体的なきっかけはありますか？」

マックシモ「そうですね。私も出来るだけ客観的にみるようにした時、子供の時はね、私の最もシンプルな本能は何かと真剣に考えてました。その出した答えは自分が幸せである事と幸せな顔が見れることだと感じました。それ以外は別に味方をいくら変えてもいいと思っています」

細川「そういう風考えるようになったのは具体的なきっかけかエピソードはありますか？」

マックシモ「そうですね。それは分からない(笑)いくつかは考えられますが、それを原因だと呼びつけることは無理にしているかどうかは分からないですね」

細川「まあ、原因というか理由というか、そんなはっきりしたものじゃなくて何かそのとき気づいた――あ、そうなんだって気づいた瞬間は多分あるかと僕が思うんですけど」

マックシモ「そうですね。多分何か出来事かそれを成したわけではなく私はただ単純にストレスが凄く抱えていてそれをどうやって抜ければいいと凄く悩んで、ある時突然答えを出せた」

細川「どんなストレス？」

マックシモ「えっとまあ、子供の時はね。私は凄く物事を考え直す傾向が強いから簡単ことにストレスを持つのがまあちょっと敏感なところなんですよね。例えば子供の時二匹の犬がいて、その二匹が互いを殺し合うを毎週一回だけでも殺し合おうとしていました。私はその犬をどうすればいいんだろうと思っていたんだけどもお母さんもその犬のどちらかを捨てることはとても痛くに思っていたから、だから私も犬を捨てる決心は出来なかったし、そのままその状況が進むことも出来なかったから完全に自分との戦争を始めていました」

細川「つまりどんな戦争ですか？」

マックシモ「何かが正しいかの戦争。でも・・・二つの団体があった戦争ではなかった。だからいつまで経ってもどちらかが勝つのは不可能だったと思います。結局お母さんが決めて一匹の犬を他の人に渡しました。(溜息)」

細川「(笑)でその時？」

マックシモ「その時？(笑)それで私は凄くないたお母さんを慰めて自分がこれから決める事に対して必ず優先をちゃんと出来ないといけないと思って、周りの人にもその順番をはっきり決めさせないといけないとも思いました」

細川「うん、それはいくつぐらいの時ですか？」

マックシモ「十一歳かな」

細川「うん、なるほど。それで今話してくれたことと文学の興味は繋がっているんですか？」

マックシモ「そうですね。繋がっているのでしょうか。まあ、その決断をとるには私はその時まで考えていたことにさらに一方を踏み出さなければならぬ境遇に居ました。文学はそういうものでもないと私は思っていますから共通点はそこにあるかもしれないと思っています」

細川「そうですね、それを具体的に感じた小説とかまあ、文学作品があった・・・であったんでしょうか？」

マックシモ「そうですね、最近読んだ本には夏目漱石の心の人文は「先生の奥さんは心を大切にしていた」という文があって、そこから凄く影響を・・・何かこれは日本と他の世界の違いなんだなと考えていました」

細川「他の国は心を大切にしないんですか？」

マックシモ「いや、心はまあ・・・感情は大切にしているんですけども、心はちょっと違うんですね、微妙に。感情は通訳出来る言葉だから、エモシオン Emociónとかでね。でも心は決して Corazón コラゾンではないんですね。心臓、心臓ではない。だからその言葉を通し私は日本と別・・・まあ別は全部知りつくしたような言い方はしたくなんですけども、私が知っている世界と違うんだなと思っていました。それでその敏感性、扱い方とか思いやりがちがうんですね。自分と自分以外のものにそんな注意・・・ちゃんと見るという感じがとても特別だと思っています。」

細川「それは一番話してくれた二匹の犬の話しとどこかで繋がっていますか？」

マックシモ「面白い質問なんですね。はい、繋がっていると思います。私はお母さんの気持ちを最も大切にされたかっとおもってますからその・・・他人と自分の心を大切にするという想い・・・もうちょっと深く考えないといけないんだなと思っていましたからその感情も繋がっていると思います。」

細川「なるほどね・・・何かちょっとマックシモさんは文学、特に日本文学に対する何か・・・興味関心の方向・・・まあ方向と一体かね。うん・・・その道筋が何かちょっと見えたような気がしました。多分その辺があれですね。日本語勉強して日本文学を読みたいというあの・・・日本文学を研究したいという気持ちと繋がっているかなと思います。まあ(笑)というふうに私は解釈しました」でそうするとあれですか。あの～マックシモさんの場合は文学を研究することに興味があるのかあるいは自分自身が文学を創る。例えば小説を書くとか詩を書くとか。そういうことと・・・それは一つのものですか？それともやっぱり文学を研究するのが目的なんですか？」

マックシモ「えっと両方が好きだと思いますね。人生はどんな道に私を導かすのかは分からないのですが、自分の気持ちを表す仕方としての書く気持ちと気持ちを映して考え直すための読むは同時にしなければならないと感じています。」

細川「なるほど、はい。今までに小説とか詩とか創作活動はしているんですか？」

マックスモ「はい、しています。まだ完成したものは出来ていないからまあ(笑)活動はしているかどうかはちょっと微妙な感じなんですけども・・・でもしています」

細川「はい、そうですか。楽しみですね、とても」

マックスモ「はい、ありがとうございます」

細川「(笑)えっと最後の質問なんですけど、そういうそのマックスモさんの興味に対して動機文の最後にちょっと書いていますけど、文学のない勉強に夢中過ぎて本を開く心構えが出来ていないことに気づいたと書いていますね。普段の日本語の勉強とそれからマックスモさんがしたいこと・・・これからやりたいと思っていることとあんまりつながっていないんですか？」

マックスモ「いや～それは違いますね。(笑)日本語の勉強だったらまだいいなんですけれども、今文学とは関係ない・・・まあ関係ないものがないかもしれないけど数学の勉強をしているんです、今は。留学するための試験が三つあって、それは英語と日本語と数学の試験で。今数学の勉強していて、私は数学がちょっと苦手で、あんまり感情繋がらないものだから。(笑)」

細川「例えば「ゼロとは何かを考えるのはとても文学的なものだ」と僕が思うけど」

マックスモ「はい、でもゼロとは何かと一々考えたら(笑)解けない気がしますから」

細川「なるほど」

マックスモ「別にそれが単純に数学を十分に分かっていないからだと自覚していますけれども、まだまだ勉強しなければならないことは変わらないんですね。そうしてそれに冴えない・・・冴えないかな・・・冴えない気分があるのは変わらない」

細川「そうですね(笑)どうもありがとうございます」

マックスモ「こちらこそありがとうございました」

(後省略)

### 3. 結論

「文学」は私にとってとても大事なものだということは予め分かったつもりでいたんですが、やはり人と話合ったら自分の振る舞いも明確になって怠っているところを磨きたくもなりますね。最近みたドラマで「人間は本みたいだといいな」という科白を思い出してやはり、ある思想を至ろうとして各言葉を丁寧に選んで作られた本のようにありたい。だから出来るだけ見倣います。

## 後書き

この世界でありうる物事は一人で考えて解釈するのに余りにも綺麗で余りにも危ういものだと思いますか？少なくとも私は心を他者に開かず生きて行ける自信はないから対話をとても快い活動に思っています。それをこの数週間で改めて味わせたくれたことを感謝に思っています。ありがとうございました！

### メンバーのコメント

#### ☆動機と理由へのコメント

Matsuda Makiko

私もすばらしい建築作品をみたとき、新しい世界やパラダイムが開けるような気がします。マキシモさんが文学が好きな理由と似ているかもしれません。

Hideo Hosokawa

マキシモさんとは、昨日、Zoomでやりとりしました。マキシモさんにとって文学とは何か、そのことがこれからの生活や将来へ向けてどんな意味があるのか、ほんの少し教えてもらいました。ぼくのテーマについても、少し話ができただけで良かったです。ぜひインタビューをまとめてくださいね。よろしく。

Alessandra Miyuki Hasegawa

私も本を読んで視野が広がる感覚がとても好きです！

Mie Yokomizo

私も最近、文学に関係ない本ばかり読んでいます。でも、今、マキシモさんのような読み方(作家の見方を通して世界の色がどう変わるか)っていう私にはなかった読み方をしてみたいです。ありがとうございます！世界がカラフルで彩りあふれ、弾けるみたいな感じになった本がありますか？あったら知りたいです。

#### ☆対話へのコメント

Hideo Hosokawa

マキシモさん、記録ありがとう。オンラインでの指摘もあったように、これは、マキシモさんの結論に近い文章になっているので、ぜひその前の段階の根拠・証拠として、インタビューのやりとりをそのまま文字化したものをお願いします。そこでもう一度、動機文との関係を考えてみると、このレポート全体の意味が見えてくると思います。よろしく。

#### ☆結論・まとめへのコメント

# 「拍」としてのことばと建築

松田 真希子

## 1. 動機と理由

私は昔から家が大好きです。広島市の郊外のニュータウンに生まれ育った私は、子どものころから住宅建築現場に捨てられた建築資材で基地を作って遊ぶのが好きでした。父は指物大工で、私の家には父が作った建具や家具などがありました。家族で庭の鉄の柵を作ったり、コンクリートの倉庫や階段を作ったりしていました。広告の裏に理想の家を描くのがすきでした。愛読雑誌は『新建築住宅特集』という住宅の専門家も読む商業雑誌です。

そんな家が大好きな自分ですが、建築家という人生の選択肢はかすりもせず、大学は文学部でインドに留学した後に日本語教師になり、言語研究を専攻し、大学の先生になりました。家好きの情熱はマイホームに向けられ、2012年に建築家に念願のマイホームを建ててもらいました。

実際の家づくりを通じて、自分がどういう価値観でどうやって生きていきたいのかを考えることができました。そして理想の家をつくるには、その家単体ではなく、周りの関係性や社会のあり方などについても、構想し、働きかける必要があると感じるようになりました。家を建ててからは、一般向けの製図ソフトで設計図面や建築パースをよく作るようになりました。まだ施主としてしか建築に向き合ったことしかありませんが、最近は建築を人生のテーマとして生きたいと思い、迷っています。

家の設計について考える時、こんなことを考えます。どのように自分は生活したいのか、家族とつながりたいのか、自然とつながりたいのか、家同士、コミュニティとつながりたいのか、サステナビリティを考えるのか、環境、歴史、文化を考えるのか、等々。つまり、マイクロからマクロへ、個人から集団・社会へ、人からモノ・コト・環境へ、今ココから、過去未来へと、家とその家に住まう人間がどのような関係性の中におかれているかを可視化し、それぞれについての自分のよいと思うあり方について考えます。家の「よりよいあり方」について考えるというのは、このように、非常に本質的で哲学的な行為だと思います。

このような感じで、家について考えるようになるにつれ、自分や周りの人が構想する社会のあり方に落ち着かなさを感じるようになりました。例えば、私は今の日本の住宅が大嫌いです。いろんな住宅メーカーが販売する家は、軒が浅く、サイディング材で覆われ、向きもバラバラ、壁の色もバラバラで、周りとの調和が取れず、形が歪で、人との関係が閉ざされています。そんな住宅は10年も経つと家の価値が半減し、30年も経つと価値がゼロ。取り壊されて大量の埋め立てゴミになります。コスト重視、住宅性能



重視の中で、身勝手に市民性の低い今の日本社会のあり方を象徴しています。私はそうしたことが本当に「美しくない」と感じます。

逆に金沢の町家群のようなものは美しいと思います。古く、断熱性能は低く、家同士の独立性は低く、それぞれの家のデザインには個性はないかもしれませんが。しかし、縁側、軒下、土間など、昔の日本家屋のあり方には、風土やコミュニティ形成のために果たしたいろいろな機能がありました。瓦屋根、土壁といったサステイナブルな素材が使われていて、同じ規格で作られた建材により建て替えや、建材の再利用も可能でした。冬は寒くても、夏は通り土間、中庭を通じて風が通り、涼しく作られていました。私はそうした家を「美しい」と感じます。

ここで、私にとっての「美しさ」とは何かについて説明したいと思います。私にとっての「美しさ」とは、以下のような気持ちによって導かれた合理性や創造性です。もう少し具体的にいうと

- 自分の領分を超えた「何か」に対する謙虚さや崇拜
- わからないなりに、つながりあえないなりに、それでもよりよくつながろうとがき、対話する努力
- 難しい問い、つかめない答えに対する求道的態度
- 自分にとっての最善を他者と共有しようとする気持ち

そういうものがあると「美しい」と感じます。傲慢さ、怠慢さ、身勝手さなどから構成されるものは、美しくありません。自分は美しい建築、美しい町、美しいコミュニティ、美しい社会づくりがしたいです。美しいものの中に暮らしたいです。美しく生きること、それに対する貢献ができること、それが自分にとっての幸せな人生だと思います。

私は建築家として生きているわけではありません。私はことばの研究者です。実は10年くらい前から、ことばの研究者をやめて、建築家になれないかなと考えています。建築のことを自学し、建築士の資格をとるために、大学の通信教育にいかうと思っています。とはいえ、暮らしていかないといけないし、今の職業につくために長い時間もかかりました。ここでやめていいものかと悩みます。

同時に、今のまま、ものを建てない建築家になれるのではないかとも思います。コミュニケーション、文化様式、社会制度、コミュニティに対する問題提起をすることでことばやコミュニティの建築やデザインにかかわることができないだろうかと考えています。しかしやはり、実際の形や空間をつくってみたい欲もあります。

こうした考えについて、文学が好きなマキシモさんはどう思うのか、聞いてみたいです。

## 2. 対話—マキシモさんとの対話的活動

・この人物を選んだ理由：

オンラインでの対話的活動で私の動機文について話した時のコメントがとても参考になったからです。この人と話すことで、自分(ま)の思考は深まると思ったことからです。

### 2.1「ことばの研究と建築は統合できるということ」

マキシモさん(マ)と対話で最初に話したのは、ことばの研究を建築に活かすことはできないのか、という話でした。私はことばの研究をやめて、建築家になることを考えていたので、ことばの研究と建築をつなぐことについてそこまで深く考えていなかったことに気が付きました。

そしてマキシモさんとことばの研究と建築はどう違い、どう統合できるについて話すことができました。

マ 建築を環境に影響に与えるという見方について、松田さんはそれは建築に限らないと思っている。自分の職業にもあてはまると思っているが、建築はどこが違うと思うか？

ま 建築は身体性を伴う。土地に縛られている。環境とのインタラクションがある。環境に対してダイレクトにかかわると思う。

マ なんのきっかけにことばの研究に励むことになったのか？

ま 大学のときにインド哲学を勉強してインドに留学した。そのときにサンスクリット語やパーリ語を勉強した。そのとき文法がおもしろいと思った。昔の人が考えたことばのルールはおもしろいと思った。ある名詞を男性の名詞ときめたり、自然やもの、人の動き方を表現するためにいろんなルールが考えられていて、それは合理的、特にサンスクリット語は複雑な文法があっっておもしろい。人間 みえない人間が考えたルール、人間がそれをことばにする意味があると思って、時間のあらしわけとか、そういうことをことばによって表現しようとするところがおもしろいと思った。

マ ことばと建築がつながる共通点があると思うか

ま あると思う。どちらも人間が生きていくために考えたもの。人間がよりよく生きるために努力して考え出したものが建築でありことばだ。ことばにしても建築にしてもどうやったらよりよく生きられるか、という絶えざる努力というのが、ずっと人間の歴史のなかにあると思う。それは共通している。でも共通していないこともある。

マ 一番共通していないと思うところはものとして触れるということか

ま はい、環境としてダイレクトにかかわります。建築は引っ越しができない。もっとローカルなもの。ことばは引っ越しができる。もっと環境から独立しているところもある。

マ ことばは建築に影響を与えることはあると思うか？

ま あると思う。どんな風かと、建築の建て方に二種類あって、Ready madeとCustom Madeなんです。Ready madeというのはすでに住宅メーカーが考えた、商品としてできているものを選んで買うこと、custom madeの建築をするときは、建築家と相談しながら家をゼロから考える。その時にことばはとても大きく影響する。

どんな家がいいと思うかを建築家と建てる人が相互に話をするのは大事。ことばによって説明されると思う。設計図とか写真とか素材とか、直接見せてわかるものもあるが、それだけではなく、価値観とか、どういう風に生きていきたいからこんな家がいい、こんな社会の生活スタイルが実現するからこんな家がいい、と説明するときはことばが必要だと思う。

マ ことばの研究を建築に役立てることはあると思うか

ま あると思うが、そこを今までつないで考えたことがなかった。コミュニティデザインとか、どういう社会がいい社会がいいと思うかというのを、ことばの中にある合理性やルールを活かして提案

することはできると思う。ディスコース研究とか、Brown & Levinsonのポライトネス理論などは建築に活かせると思う。

そうなんだけど、建築は形や素材や物質的なところが大きい。私の研究が生かせることは精神的なところだけかなと思う。

マ でも、精神なところ、私が言ったようなことは精神的なところだけ、といったが、精神的なところは一番大事だと思いませんか。建築は人間のための科学だから、人間をわかる専門の勉強をした人だからこそ分かるものはがる。そういう風に思ったことはありませんか？

ま そういう風に思ったことがなかったんですよね。見た目とかもののほうに興味が強かった。建築が好きなのはデザインだったり、そういうところだったんだと思う。マキシモさんと話して、私も、人間の生き方にかかわるもので、精神的なものは非常に大事で、今私がやっている研究は建築とつながりがもてるんだということは考えたことがなかった。おもしろいなって、一番大事だっていわれたら、そうだよなって思う。クライアントと家を建てる人の対話にも生きると思うし、こういう建築のあり方、コミュニティのあり方がいいんだ、っていうのをコミュニケーションやことばの研究にも生かせるんだってわかった。

## 2.2「アートは才能によって生み出されるものではなく心を澄ますことによって気づくもの」

次にマキシモさんと話したことは、アートの作家性に関することです。建築家にしても、アーティストにしても、一部の才能ある人によって行われることで、そんな才能は自分にはないということが建築家になることをためらう理由でした。しかし、マキシモさんとの対話を通じて、自分がアートを狭く見ていたこと、いろいろなことをつないで考える努力を怠っていることに気が付きました。

ま マキシモさんにききたいんだけど、そういう活かし方は才能にあふれてなくてもいいと思う？

マ 私は才能は大事だと思っていない。一番実力にかかわることは興味だと思う。一番こどものころの興味が、これはピアジェという心理学者の説なんですけど、子どものころは物語、、、(略)人間は脳がだいたい同じだから、使わない技能が失われるわけではない。ただ、人は使いたい部分と使いたくない部分を分けて生きていると思う。松田さんが言ったように、そんな風に建築と人間にかかわっている学問と一緒に考えたことがないというのは、建築にあって、ことばにないところはそんなに見たくないということなのではないか。でもそれはできないことなのではなく、まだそんなにやっていないからではないか。人間は普通自分が得意だと思うことを繰り返して、その満足で生きるものだから。自分が全然できないことをするのは、、、すぐえらそうなことを言っているみたいだけど。笑。

私はそんなに学問にてこづったことがなかった。子どもの頃。だから一番人生にてこずる人間の気持ちを総合的に文学を研究したいと思った。研究しなかったらきっと逃げると思った。私は機械的に仕事をする人間になりたくないと思っているけど、そういうところがあると思うから、そうならないことを勉強したいと思うんですね。

ま 人間の感情は手こずるものだけど、好きなものですか？得意じゃないものですか？

マ 考えれば考えるほど難しくなるものですね。でもやっぱり一番達成感を感じるものは私にとって人の気持ちなんですね。それさえうまくいけば、他の全部はなんの形をとってもいいと思うんです。

ま 興味があって考え続けたいものは美しいありかたかもしれないと思いました。それは表面的なレベルの美しさだけでなく、ことばの中にあるルールも私にとって美しいことかもしれません。建築の中にあるものも美しいものだと思う。自分はアートがすきだけど、アートに苦手意識がある・自分には才能はないんじゃないか、自分が興味がある限り向き合い続けることが大事なのかなどと思いました。実現の仕方はいろんな方法があると思ったかもしれない。それは私がことばの研究者としてアートにかかわれるということかなと思った。

マ ことばの研究者というより、ことばに興味をもった人、ことばからいろいろもらった人、ことばを勉強したからこそある実力ですね。

ま 以前にも同じような気持ちになったことがある。アーティストの授業のアシスタントをしていたときにも同じ気持ちになった。そのとき、私はアーティストにはなれないと思った。でも私はことばの研究者である自分とアーティストをつなぐことができると思った。ことばをならったことでもっているいろいろなことを建築に生かせばいいと思う。それはとてもチャレンジングなことだと思う

マ 私はここからえらそうなことをいっているけどチャレンジしないんですが。笑 チャレンジするのは松田さんだから

ま そうですね。笑 そうかあとと思いました。建築のおもしろさをことばの研究に活かすのも意味があるんじゃないかと思いました。建築が大好きな私だからできることばやコミュニケーションの研究もあるかなあとと思いました。

### 2.3「ことばも建築も文学もだれのものでもなく、だれのものでもある」

次にマキシモさんと話したことは、文学やことばや建築の作家性に関することです。作品はそれを読む人がいて初めて成り立つ。アイデアやことばは誰のものでもなく、だれのものでもあるということを教えてもらいました。そして、ことばは、作家性がない文学や建築のようなものだというのに気づかせてくれました。私がことばの研究に興味をもち、それを仕事としていることと、建築が大好きだということは、実は、同じことかもしれないことに、気づかせてくれました。

ま 建築は人がいてはじめて成り立つものかもしれない。人がいてはじめて建築は生きる。でも本も読まれることで初めて意味をなすかもしれない。

マ まあ、人は文学がなくても生きていけるけど、家がないと人は死にますよ。ホモサピエンスは笑

ま 本はなくても生きている。でも物語がないと人は生きていけない  
人間はたくさんの物語の中にいないといきていけないと思う

本に書かれていないだけで。いろんなレベルはあると思う。

私は建築と文学がつながるものと考えたこともなかったし、ことばと建築がつながるものと考えたこともなかった。それはつながるものだとわかった。インタラクティブなものである。対話？的なものという共通点がある。ことばは私にとって作者のない文学かもしれない。

マ 作者のない文学、、、そうですね。

文学もある意味作者があるけど、その文章の中にあるアイデアやことばはだれのものでもなく、だれのものでもある。と思います。建築もそれに似たようなところがありますね。

ま だれのものでもあり、だれのものでもない、そのことばは好きです。

強い作家性があるようでいて、実はそうではないのかもしれない。

マキシモさんはどんな作家に対しても同じことを思いますか。

マ サンテグジュペリの「星の王子様」、そのを例にすると、現代のヨーロッパの人が失われている子ども性、子どもらしさ、子どものessence、が失われている、その本を読むと、妙に伝わる感情がわいてくる。でもその感情は作家のものだけではない、自分が心を澄ませば、勝手にわいてくるもの、でも読んで初めてそれを思い出させてくれる、なんですね。作家が書いているときは、私の個人的な考えでは、何かを作っているという感じでいたら、(その人は)方向を誤っていると感ずる。その作っている何か勝手に表れるんですね。歴史にでも人にでも。でも人が考えられるものは、もう考えたことのあるものなんですね。自覚するのは本当にできるのか、と思うんですね。

ま マキシモさんの話を聞いているとカントという哲学者を思い出す。認識できるものとできないもの。文学というのは、私たちが実際には認識できないなにかを心を澄ましてつかもうとする行為なのかもとはある、でも認識はできないなにかをできるだけ明らかに出していこうとする行為なのかなという感じがしたが、カントに影響を受けている？

マ カントは大学の資料でしかしたことがないけど、お母さんとよく話しているから、お母さんの影響だと思う。哲学はあまり勉強したことがない。

ま マキシモさんが言ったことは私もとても共感する。作家がもし、新しい何かを生み出しているというなら、それは作家の錯覚ではないかと思う。日本の伝統工芸作家も似たようなことを言っている。すでにある形が自然にあらわれてくる。自然に「成る」。心を澄ますと表れてくる、真実は自然に下りてくるという。自分がそれをつくるわけではない。という。

近代は、人間は個人が大事になって、個人のクリエイティビティの錯覚が起こった。本当はそうじゃない。既にある真実に近づきたいと努力した結果、その真実は自分の前に表れてくるそれを表すだけだといいました。私はマキシモさんが言ったことはそれに似ていると思った。

マ 美術は確かに今までなかったものがうまれてくるところがある。でも感情における話は、感情はだれか一人のものではないから、一人が生み出すものであってはならない。あってもしょうがない。自分が感情を生み出したっていてもそれは社会には影響がない。個人の経験にしかない。

ま 感情は特にそうでしょうね。みんなものですね。

### 3. 結論・まとめ

私は建築が好きで、アートが好きで、ことばが好きです。特に建築物を作ったり、鑑賞したりすることが好きですが、これまで、建築を仕事とすることには縁がありませんでした。今はことばの研究、ことばの教育にかかわる仕事をしています。ことばの研究も嫌いじゃないのですが、本当にしたかったことじゃないんじゃないか、もっと好きなことをして生きていったほうがいいんじゃないかと強く思っていました。対話的活動をした後、ことばの研究者として生きながら、建築も統合すればいいのだと思うようになりました。

マキシモさんと話して、ことばやコミュニケーションの研究と建築が好きであるということは実は同じことで、統合できることがわかりました。まず、建築もことばも、ともに人と共にあるものです。人のないところにことばはないように、人のないところに建築はありません。そして、複数の人や社会、環境とのかかわりのなかにあるもの、という点も同じです。ことばは人により依存し、建築は環境により依存していますが、それは実は表面的な違いで、大きな違いではないとわかりました。

そして、私は、人が作り出す作品性や芸術性にとっても興味があり、そうした芸術性を発揮できる人をうらやましく思っていました。そして、ことばの研究者である自分は、とりたてて発信力も創造性もない、つまらない人間だと思っていました。しかし、マキシモさんとの対話により、アートというのは、決して才能によってなされるものでなく、いかに人が心を澄ませることができるか、いかに本質に気づきそれを提示できるかであるかということを見せてもらいました。それは私がもともと動機文で書いた「美しいこと」の謙虚さのイメージとも一致しました。

これまでの自分は、発信したり、生産したりすることが建築でありアートだと思っていました。そして、ことばは私にとってアートではありませんでした。しかし、今は違います。

三木成夫の「打」と「拍」のたとえを使いたいと思います。三木は太鼓を面に向かって振る行為、それが「打」で、バチが面から弾かれる状態、それは「拍」だ。打と拍があわさって初めて音が出るとしました。

もちろん、その二つは共存するもので、どちらか一つだけ取り出すものではありません。私は、今回の対話で、建築には、「打」が前に出た建築もあれば、「拍」が前に出た建築もあると思うようになりました。関係性の中で自然に「成った」町家は、そんな「拍」が前に出た建築だと思います。

そしてことばというのはまさに「拍」です。だれかが意志をもってことばを新たに作り出すことはできない。人とかかわりやつながりによって、人との間で自然にたちあられてくるものだと思います。

ことばの研究も同じで、いかに「すでにあって、気づいていないだけの」ことばのありようの本質に気づき、それをあらわせるかであるか、だとわかりました。そして、私は、そういうことばだから、おもしろいと思いい、作家性のある文学ではなく、ことばそのものに興味を持ったんだと思います。

ことばも建築も、誰かのものでもあり、誰のものでもあるという、マキシモさんのことばはまさに、「拍」としてのありようを指しているように思います。ことばとは名前のない、作者のない文学であり、マイクロにもマクロにも組み上げられる「作品性のない建築」なのだ気がつきました。

誰もがよりよく生きるために、よりよくつながるためにことばを使う。長い歴史をかけて、よりよくつながるためのことばを、ずっと紡いできました。親から子へ、コミュニティからコミュニティへ、継承してきました。あるときは広く共有され、あるときは私的に秘めて使われてきました。ひとはことばをつくり、つかい、捨て、再生してきました。非常にダイナミックで、形があるようでない建築、それがことばです。そして、人が人とかかわりをもって生きてきたという記憶そのものでもあります。

そのため、私が好きな、拍としての建築を愛するように、拍としてのことばの研究も愛せるような気がしました。建築における気づきをもっとことばの研究に活かしたいという気持ちになりました。

いろいろなことに気づかせてくれたマキシモさんに感謝します。

### 対話的活動を終えて

人間の悩みや考え、興味関心というのは、深めていくといろいろな共通点がありそうだと思います。グループで対話的活動をする中で、いくつかの点において共通すると感じるシーンがありました。子どもの頃の記憶であったり、社会的な規範への反発、帰属意識やそのゆらぎであったりです。

同時に、自分の中で、いくつかの、関係がなさそうな分散した興味や行動が、深く考えるとつながりがあると感じました。いくつかの興味は、感情的なもので、論理的に考えるに値しないと思っていたのですが、そうではありませんでした。自分にとって今回の対話的活動で気づいたことというのは、私にとって大きなことです。

研究者としていろいろなことを考える作業をしていますが、意外に今まで考えたことがなかったことがあることに気づきました。もっと「取るに足らないと決めつけている自分の興味関心」について探究したいと思うようになりました。

最後に、深く考えるためにはことばとそれを聞いてくれる人の存在が欠かせないと思いました。受容的に聞いてくれる人、効果的な問いを投げかけてくれる人、深くものごとを考えている人。そういう人でありたいと思いました。

とにかく、私はマキシモさんと対話ができてよかったです。ありがとうございました。

### メンバーのコメント

#### ☆ 動機と理由へのコメント

Hideo Hosokawa

松田さん、真希子さんの美しさへの追求、すばらしいですね。

それはそれでとてもいいと思うのですが、今の生活や仕事との関係の中で、この真希子さんの美意識はどのように活かされていますか。

「私にとっての美しさとは…」の考え方や、現在の日本語教育や大学の仕事とはどのように結びつくのでしょうか。もしかすると、あんまり言いたくないことなのかもしれませんが、でも、向き合う姿を見たいと思います。そのことによって、真のテーマとその対話が生まれるような気がします。よろしく。

Mie Yokomizo

なぜ人は「美しい」って感じるのだろうか？って松田先生の「美しい」言葉を読みながら不思議に思いました。私も日本の現代家屋やコンビニとかが嫌いです。でもブラジルの簡易レンガブロック住宅は好きです。ますます不思議。

Alessandra Miyuki Hasegawa

私もみえ先生と同じように、松田先生の文を読んで、「美しい」という定義に関して思っていました。そして、自分は松田先生のようにお家が人と人との関係に影響を与えているということに着目したことがありませんでした。でも確かに、家もそこに住む人を表現するものだと納得しながら読みました。松田先生は、美しい建築が人と人の繋がりへと影響されると思うということでしょうか？

#### ☆ 対話へのコメント

**☆結論・まとめへのコメント**

Eriko Nakajima

いつも、松田先生が作られるウェブサイトやちらし(今ここに出ているワードも文章も！)を見ていて、とても素敵なデザインで且つ読みやすく、すごいなと思っていました。この対話活動を通して先生の建築への思いを知り、私には納得いくところが沢山あります。なので先生の建築の眼や知識は、明らかにことばの研究や活動に活かされているのだらうと思いますし、このCLD Onlineはすでに「ものを建てない建築家」によって建てられた場で、お陰で今私たちがこうしてここにいる、と感じています。

Alessandra Miyuki Hasegawa

とても素敵な気づきですね！私もアートが好きです。ことばもアートだと私も思います！私から見た松田先生は、ことばを巧みに使われる立派な芸術家です。アートって、人それぞれやっばり解釈が違うのかな、とよく思うことがあります。一度自称アート嫌い(何だって!!)ブラジル人の友達とアートで議論になりました。「インクをぶつただけのペイントはアートじゃない。レオナルド・ダヴィンチのように技術があってこそアートだ！」に対する私は「インクをぶつけるという行為で表現したいと思う域に達しているのであればアートだ！」などと埒の明かない討論を繰り広げました。でも共通するのは「心を動かされたか」という点でした。友達は自分が達することの出来ない極みにアートを感じるとの事。私はアートに触れ、そこから何かを感じ取ることにアートを感じます。松田先生のお力は、私も私の友達の心をも動かすことば建築家だと思います。

Mie Yokomizo

生意気ですけど、本当によかったです！！！！素敵な対話。確信に触れる「建築とことばの共通項。タイトルを見たときには、日本語のモーラである「拍」なのかと思いましたが違う日本の和太鼓の「拍」からなのですね。心から安堵にも近い気持ちが広がっています。



## あとがき: 対話的活動は人間化の探究活動

松田真希子

(CLD-Online 主宰)

「コロナウイルスが流行する中で、私は社会に対して何ができるだろう。研究費はあっても南米への調査研究もできないし、、、  
 そうだ！オンラインで南米とつながって日系の複言語の若者と対話的活動をしよう！」

ということで2020年5月10日に始まったのがCLD-Onlineの対話のテーブルです。しかし、最初から青少年対象の対話的活動は難しいのでは？と国際交流基金の中島さんの助言もあり、まずは現地の日本語教師の方に参加してもらったのがこの南米教師篇です。この活動には南米に生きる12名(と私)が最後まで参加しました。ブラジル、アルゼンチン、ペルー、パラグアイ、ボリビアの5か国で日本語や日系社会とかかわって生きている方々の対話的活動の記録、個人的にはとても力作ぞろいだと思います。ぜひいろいろな方に読んでいただきたいです。

細川先生による対話的活動は「自分自身がテーマと覚えることについて書く(動機文)」→「動機文を他者に読んでもらい対話する」→「対話データを文字化し、それを読んで内省を深める」→「全体のまとめを書く」→「すべてを一つの文章に統合する」という流れで行われました。

私は、今回対話的活動に参加して、これはブラジルの教育学者パウロ・フレイレ(Freire, P., 1921-1997)の人間化(Humanization)の活動(praxis)そのものだと思います。フレイレは、1970年に『被抑圧者の教育学(Pedagogia do Oprimido)』という本で、課題提起教育(educação problematizadora)による解放(libertação)を提唱した人です。フレイレは抑圧されている人々自身が対話(dialogo)を含む課題提起型教育により、自分の抑圧されている状況を意識化し、主体的に変革していくプロセスが大切だとしています。そしてそうした活動によって解放されるプロセスを「人間化」と呼んだそうです。今回の細川先生の対話的活動は「自らのテーマ(課題)の探索→対話による意識化→テーマの再考→自己の解放」というプロセスがありました。私はそのプロセスにより、参加者が次第に「人間化」していくように見えました。

例として中島さんの対話的活動を挙げたいと思います。中島さんは長年猫シェルターの活動をしておられる方で、動機文でもまずその活動について書かれました。猫シェルター活動で感じている猫への愛と問題意識を活動に参加したメンバーに向けて発信したことで、まず中島さんの問題意識が共有され、小さな社会化が始まりました。しかし最初はひたすら保護猫をめぐる世界の問題(怒り)について書かれていて、あまりご自身のことは語られませんでした。そして次に叔父さんと対話します。叔父さんの対話により、「人間存在とは何か」「それに葛藤する私とは何か」という根源的な問いが浮かび上がります。中島さんは葛藤、躊躇しながらも、この問いに向き合い続けました。他者のために生きようとする自分は結局は自分のためなのではないか、それは偽善なのではないかと葛藤します。答えは出ませんが、「他者の中でどう生きるのか」と「悶々と」悩み続けることを選んだところで文章は終了します。その後、中島さんは文章の公開をめぐり、周囲に自分の文章を読まれることを非常に気にされ、躊躇されていました。そして気になる部分を何度か書き直しをされていました。しかし、結局そのまま公開することを選びました。よ

り広い他者に自分を解放し、問う覚悟を持ったのです。この中島さんの対話的活動から文章公開に至る葛藤のプロセスは「意識化→解放」というフレイレの人間化の活動と符合します。

抑圧とは決して社会的・制度的なことだけを意味しません。自分自身で無意識のうちに行っている抑圧もあったと思います。今回参加された方の大半は、南米日系社会で日本語教師をされています。しかし、今回の対話的活動で、「自分の興味関心や好きなことについて話してください」というお題を出すと、2-3名を除き、誰も日本語教師であることを興味関心のテーマとして提示しませんでした(私もそうです)。また「特にない」と悩まれる方もいました。ある種それは、普段の生活や普段従事していることへの否定、自分自身への否定的態度に映りました。

「私は長い間、自分を受け入れずに生きてきた。そのため、自分で自分をたくさんいじめてきてしまった。」

という長谷川さんの率直な指摘は、他の多くの参加者に共通しているように思いました。長谷川さんに限らず、参加者の多くは、これまでの自分や自分の居場所に漠然と満足していないように見えました。そして多様な文化的背景を持って生きていることによる居心地の悪さや不安、孤独、もっと幸せな生き方が別のところにあるのではないかと、という疑念をいろいろなレベルで抱えているように思いました。私もそうでした。そして普段は学習者(や家族?)のことばかり考えていて、自分自身のことを深く見つめ、考えることを「ぼっかりと」忘れてしまったような、あるいは放棄しているような印象を受けました。子どもたち、学習者をどう社会に位置付けるべきか、そのために自分はどのような指導をすべきか、日系社会をどうすればもっと活性化できるか、そんなことについては熱く語れる方々が、自分のことを話すということになると、思考停止してしまっているように見えました。またアイデンティティの悩みも他者(世間・社会)が規定する自分に居心地の悪さを感じているように見えました。自分自身を人生の主役に据えて、自分で社会を構成し、その中心に自分を位置づけて、自由に考えることが、私自身も含め、ほとんどなかったのではないのでしょうか。自分で自分の自由を抑圧してしまっていると感じました。

世界の中に自分がいるということ、自分もまた社会を作る活動主体であるということ教師ほど忘れがちになるように思います。そして、既に用意された「正解」や「価値観」を無批判に受容し、それらを学習者に示し、それをよりよく共有した学習者が増えることを自身の生きがいとしてしまっていると思います。しかし、そういう教師は結局フレイレのいう「抑圧する人/される人」であり、「銀行型教育(Banking Education)」の担い手なのだと思います。そういう教師のもとで育つ学習者は、結局同じ道を歩むように思います。教師がもっと自分自身のテーマに自覚的になり、様々な前提やしがらみから解放され、自由になり、主体的に参加していく必要があるのではないのでしょうか。そうした先生が教育にかかわることで、生徒や子どもたちも自由な人となれるのではないのでしょうか。その意味で、リタさんの「教師として私達は生徒に幸せを達成できるように教育をしなければなりません。でもそのために、まず、私たちは幸せになる必要があります、幸せにする活動を理解して特定するのはその第一歩です。」というまとめは、「教師としての私たちをまず自由な存在とするべし」、という提案にも読めます。これは簡単なことではありませんが、教師である私の自己解放宣言として、理想的なまとめだったのではないのでしょうか。

また、今回の対話的活動を経て、誰が日本語母語話者か、誰が学習者で誰が教師かということは問題ではないということを確認できたのではないかと思います。今回は「日本語」として書かれたものではありますが、日本語が母語かつ教科学習言語であったという人は半分くらいだったと思います。そして、内容のすばらしさは母語話者かどうかとは無関係であったと感じました。特に日本語非母語話者で17歳の若き青年であるマキシモさんの文学に関する対話的活動とその記述はすばらしかったと思います。どのように対話的活動を行い、どのように内省を深め、どのようにその成果を表現できるかというのは、母語話者、年齢、性別、職業等によって決まるのではなく、そのようなことができる人かどうかによって決ま

るということ、つまりこの活動で問われているのは人間化の度合い、自由である度合いだったのではないかと思います。

対話的活動は母語—非母語話者という言語能力の権威性や序列を引きはがす可能性があります。自己を解放し、市民として社会参加するためのことばの力が弱ければ、言語の運用に長けていても、本質的な言語の使い手ではないということです。逆にそれができるなら、母語話者ではなくてもそれはより本質的な言語の使い手として、市民として優れているということになる可能性を開いてくれたと思います。

今回の対話的活動は自由な人間となり「幸せでより人間らしい人間となる」教育の可能性を開く一歩となったのではないのでしょうか。今後、南米で生きる日本語の先生たちがどのように対話を続け、探究を続け、教育実践につなげるのか、楽しみにしています(もちろん私も！)。

